

月花餘情序

其殘先生曰蓋聞天以日月為枕地以
 四海為禪四結易解神闕深閉孔子刪
 詩也關雎為首宜哉君子也小人也
 何莫由斯道也則耽々則為
 曾見江南妓邑
 大低

月花餘情序

風由此知此

氣肝

國之

音我飲奉酒也

則內損之基有也君

子

子豈夫不慎乎

採色子在傍曰是其殘

樣何為謂乎夫也可也

其色可也者非常

遊妓邑劇場之間則

何能知彼其色可也乎哉

何能知彼其色可也乎哉

月花餘情成

五

矣因題其端云見釣行燈曲中

獻笑閣主人題

月花餘情序

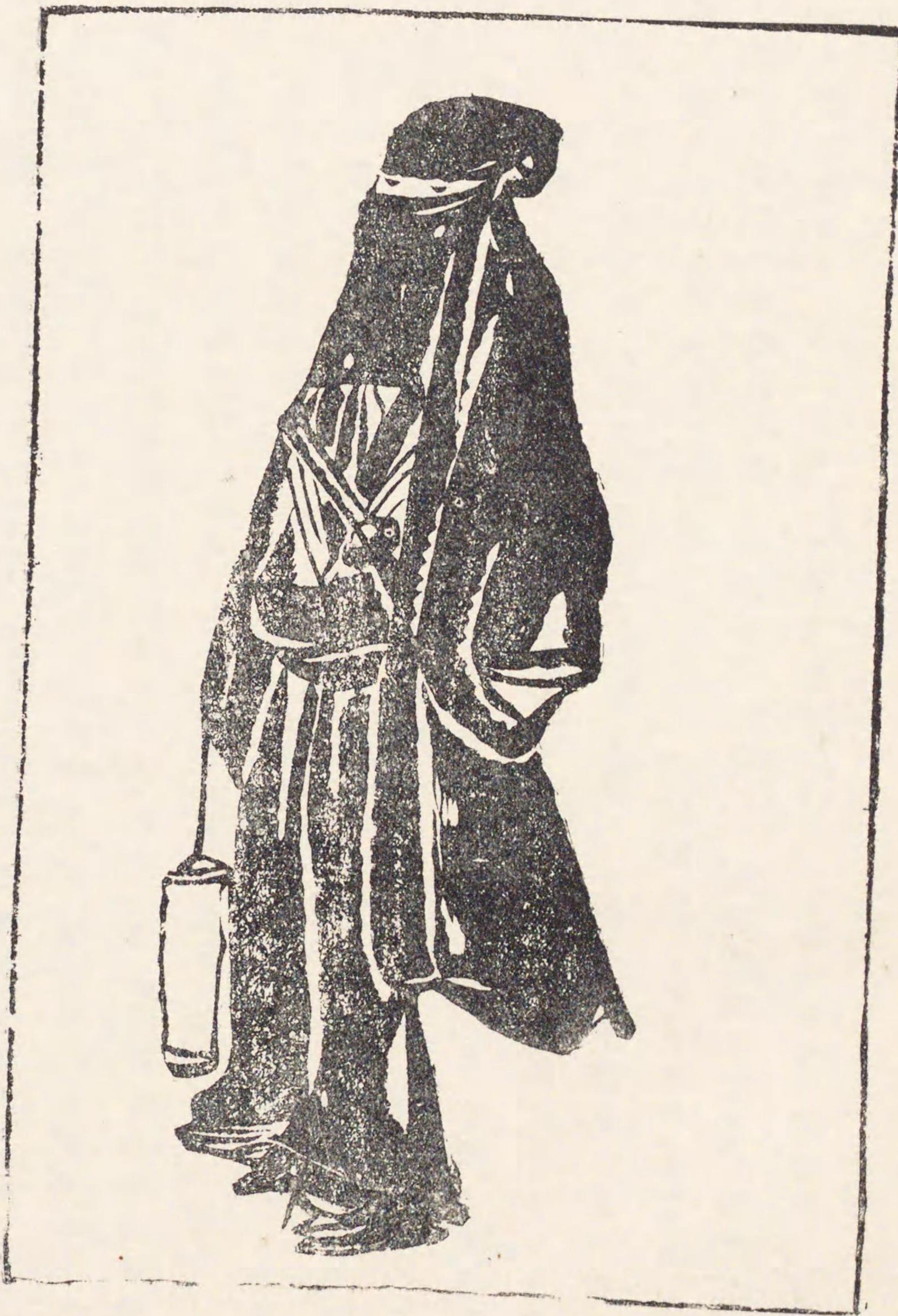
月花餘情

此書。不知何人之作。初有妓邑記。次之以燕喜。即詩閣宮之語也。終有祕戲篇。祕戲即帷幄之宴也。於菟饅頭之甘。多良須計之苦。各有其味。非味中味。而膾炙人口者。豈非此書耶。

江南妓邑記

浪華江南有妓邑。故嶠陽之地今屬島內。其地也。帶二江之雙流。一長堀。一道頓堀。望高津之本社。劇場前張。櫓高懸。木戶常喧。幟大連。有歌舞妓。有操。有唐線。有見世物。終于此。初于彼。徘徊于其間者則男女老少坊主神主。目送者。顧盼者。呼者。應者。趨者。蹶者。見招牌者。運辨當者。衆口囂々。有喧嘩。有干話。絡繹不絕。凡人之往來千百人。而莫有同者焉。其間有妓。通稱白人。於妓之中。又有新造者。年增者。皓齒者。若詰者。異體而同致。有御所出者。有屋敷出者。後家出非愧見兩夫。尼出何得持五戒。帽子。被。菅笠。則適其宜。至衣帶之美。與頭上之飾。不違勝論。匿衣服風呂敷。曰包子。從妓奴輩曰廻漢。送迎必乘駕籠。凡畜妓家。曰置屋。妓在置屋不侍客。客來酒樓。則使人至置屋招妓。凡買妓。一日一夜曰揚。如客九分晝夜。買其一或二三。炷線香。占刻謂之座切。妓來曰送。歸曰迎。如馴染而逢者。不俟駕行矣。有稱藝子者。彈三味線。而佐酒。年紀畧限于二八前後。絕不薦寢席。因又稱無色。取于情寶未開之義。然而今稱無色者。則無色也。而大色也。酒樓

邸俗稱茶屋之婢。稱中居。於其選也。不論美與醜。專貴妖態。凌于世。重于客。緒分麻前垂輕翻。緇兮縹子帶高結。袖手振腰。甚於轎夫。向斜日則反掌。障影。醉生于小歌曲。夢死于淨瑠璃。唯酒無量不及亂。劇場則不缺。初日。而定評判如時花曲。因循藉口。中居未染齒者。稱小女郎。雖夙傲。首筋之產毛未除。爪垢猶黑。至其染齒。則婉妖異常。詩曰。螟蛉有子。蜾蠃負之。其斯之謂乎。紋日則不移子所謂。從于門松立旦。于桃子柳茸菖蒲。檐燈籠二度月。菊佳節歲暮。是矣其他。至如彼岸庚申之類。凡三百六十日之間。而有一百餘度之日柄。噫夫此邑之華也。燕喜之娛也。祕戲之味也。遊此境。則不懼親父之折檻。而致居續之長。太鼓酒闌忘吐血之朝。中居賞頻思醜醜之夕。至間夫狂之手段。通殷勤于格子。忍人目于檐下。歡然相見。私情相語。於此也。引替寒聲之昔飛雪。而恨野側幽僻之地。詩靜女所謂城隅之類。之書出。食言于鐵漿付之客。盡情于深間之夫。與離此全盛之邑。而受出彼。江湖千里之屋暮作。寧作權助三助助左衛門稱鄙賤之人時花曲中之語之下嫁乎。凡百君子。敬而聽之。



燕喜篇

客花情來ル

どぶおや。いかふさむいの。

中居とよ

花情さんよふおいなはつた。サア。おあがりなはれ。こ

れお久米どん。御茶あけまさんせ。サアマ。御上りなはれ。

廻シ左助來ル

わたしが所の。ちよと。お尋なさつ

て。下さりませ。

とよ はやいぞや。

客

いかふにぎやかなの。神棚のもてなしがよひとみへた。

とよ ナア

ニおつちやるやら。是おなつどん。花情さんのおいなはつたぞや。

中居なつ

ヲ、よふおいなはつた。御まへ。

マアせんといへ。きつうのましなはつたぞへ。今夜は。きつとまかへしせにやならぬ。

客 それおれがまつたこ

とか。ろまうがのましたのじや。

くハしやつや
奥より出さまに

これ喜八。中の間へ大こんの鹽煮出しや。ヲ、花情さん。よ

ふおいなはつた。とよなぜ奥へやりましやらんぞいの。サア御こたつへ火をいりや。マア奥へおいなはれ。

客

いやノ。今ン夜ハ。いなにやならぬ。

客

ちと此邊え用があつて。

くハしや

そんならよいわいな。マアちよとおいなはれ。ついもどしますわいな。ちと

客

御咄し申事が有わいな。ほんに是。くめか。とよなと其状さしみてたも。哥夕さんの。御文が。きて有ツた。

中

居くめ アイなんじやいな。花情さん。奥へおいなはれといふて。手を取。

中居くハちや

諸ともに。いやノマ

アちよつとおいなはれといふておだてを鹽に。

客ア

、御意がおもひ。然らば奥へといふ露の。すつてんノ。

ヤア喜八髪高ふゆふたな。大分能イ男じやといふて。あたまをちよつとたく。料理人喜八 ハア是はいたもと
 おや。客 やつはり我商賣で。口あい。やりをつたと。いひく。奥へ行。こたつにもたれ狀よむ。とよ た
 ばこ盆持出ル。御こたつの火ハよふござりますかへ。客 ウ、よいそふな。とよ 夕ア申し。ろまうさんのおいな
 はつて。何やらぎやうさんに。御かんしやくで。客 てきハ常かんちやくじや。またそしてのんだである。エ、
 夕アきたら。よかつたもの。とよ サア夕アおいなはるとよいわいな。たいていおまへを。戀しがりなはつた事
 じやない。又大びらの覆になつてな。わたしも。喜八どんも。とんといきついてな。客 そふである。よふのむ
 やつおや。くめ とさん持出テ申し。哥夕さんへあらすぞへ。客 いやく。あのばいおや。くめ ナアニ
 をつしやるやら。そんなわる口おつちやると。つけるぞへ。客 大事ござらぬ。日がらのへんがへするよりまし
 でござろ。とよ 又やつはりわる口じやわいなサア一ツあがれ。客 どれ一ツのもふか。そりやくめさいたぞ。
くめ ハイおとよどん。こなんにさそ。わしやちよつと。哥夕さんの所へいてくるぞや。とよ いてごんせ。
客 どふでもか。人身御供にとられたと思ふていよわい。とよ ヨウおつちやるぞ。くハシヤ 罷出。いかふさ
 みしい事おやナア。夕さんへ。おちらせ申ちやつたか。とよ アイおくめどんの。いてござります。くハシヤ 申。
 御まへハ此間。桔梗屋えおいなはつたかへ。客 ちと付合か有ツて。くハシヤ それにマア。よふ御寄りなさら
 なんだの。そして。おまへハ何んぞあくしやうなんしたそふなの。夕さんのき、なんちて。夕アわたしか所へち

よつとおいなはつて。大ていはらたて、いなんしたことおやないぞへ。客 いや。それハてきが間違ふためへ。
 付キ合ヒに。何やら新ぞうがきたが。きつふ。酔ていて。何じややら覺へぬ。とよ いへおまへそふおやなかつ
 たけな。客 もふよいわい。のもふじや有まいか。くハシヤ 御てうし。なをしておじや。そして喜八に何ぞ爰
 でたくものしておこしやといや。とよ アイ くめ 罷歸り夕さんおいなんすぞへ。客 よい事の。くハシヤ 是
 くめあんどもひとつ持ツておじや。くめ アイとよてうし直し持出で片手に煮梅持來ル 女 郎哥夕來ル 座に付ク直に
 こたつへ當たる。女 郎 おつやさん。夕アハ くハシヤ ハイたんとべ、きなんちたの 女 郎 アイとつとわたちや
 今宵ハいかふさむいわいな。くハシヤ マア一ツあがれ。女 郎 アイ又ちばし盃事あつて亭主佐右衛門紙花情さん
 お出遊しませ。客 すつきりあハぬの。佐右衛門 ハイ今宵ハ。橘屋へだいもく講に参りましてござります。扱精進
 酒ハどふもゆるせでござります。壹ツのみ直しますでござりませふ。これハ。マア何ぞ御吸物出さぬかいといふ
 て。手をた、き。中居をよぶ。くめ アイといふて出る。佐右衛門 こりや。喜八ニさいぜんのくもわたを。ちよ
 つとすましにちて上ケませいといふてこひ。扱。マア。あがつてごろふじませ。むかいの京升屋が。此間京へ。
 仕かへものについてゆかれましてその土産に。若狭のたらの。雲わたを。けふもらひまして。御座ります。きつ
 と。おまんで上ケます。客 そりやよかろ。女 郎 くもわたとハ。どふやらこわいよふなものやナア。へ、
 、と。手のかうを口に當る。くハシヤ わたしもあないなものは。いや。それ申。猿のこしかけといふものが

有ナ。てふどそれいな。 **女郎** ヲ、いや。きみのわるひもんじやなア。 **客** ヲ、きさまのこうぶつの。りうきういも程かわいらしいものは御座るまい。 **女郎** ヲ、にくといふて。きせるでせなかをほん **客** そりやあれハ。 **佐右衛門** おまへにきせるでた、かれた、引ハ、、、 **小女郎さん** 料理なべにせりや **客** そりやあれようぢや。爰へおこしや。 **とよ** 火ばちの火な **客** 何やらくハしやのみ、ねぶる。 **くハしや** ヲ、そこへいこといや。 **客** 何ぞ。大きなものにちやうか。 **佐右衛門** よふござりませよ。これかいと云て。吸物わんの覆。 **客** よかろく。 **先はじめ給へ** **佐右衛門** ハイ。北の方つぎ給へ。 **くハしや** よしになんせいで。だいまく酒がよほどあるそふなぞへ。 **佐右衛門** ア、そふいわすと。つぎめされ。 **ヲ**、上かんぢや。且那上ケませよ。 **客** ちよつといほ、か **佐右衛門** 南無有がたし。夕さんはどかりながら。ちよつとなさつて。おくれんか。 **女郎** ハイついでくれなんすな。 **夫より酒になる又** **客** どふおや。ねからかまわんな。 **かね** イへ。よいから申。御客に付きまして。岩田屋へいて。おりましたといふて。 **客** のみ、ねぶる。 **客** 志まいにしておけ。 **かね** ハイといふて。かつてへたつ。 **くハしや** 申けいこさんなとちよつとよびなんせんか。 **客** いかさま志め野。よびにやつてみや。もし内にいずバ。 **さんごなと** **くハしや** ハイといふて。たつ。 **佐右衛門** 申ちよつと一ツけんさんじまじよか。 **客** そしたら。此大びらの覆に志よ。 **佐右衛門** これハきつい。ア、ま、よスウ。ロマ。サンナ。無手。リヤンコ。ロマ。おはね。 **イツコウ**。スウ。トウライ。 **客** サア。どふおや。 **佐右衛門** イヤこれはきつい **げいこ** 志めの **來ル** **客** す

つきりあわぬの。 **志めの** アイ。夕さん。さむいな。 **女郎** アイ。かへいら志う髪いひなんしたの。 **志めの** こちのお春はるどんの。ゆふてくださつたが。どふおややら、ぶくくして。わるいわいな。 **とよ** たばこすい **おとよ** さん。わるい色じやぞへ。 **とよ** 二日急いじやハいな。 **志めの** 二上り哥 **チンシヤン** ぞでにつ、め **ど小笹** のあられ中ほれやすさよわがなみだツンテレ、ツトンロン **とよ** になきつれかへるかりチンチテツツツウテチリ、よそに見なして思ひこそやれなとや心のなかるらん **客** 志めのひとつのみや。 **志めの** アイ **客** 小便したつ夕さん。夕ア新さんにあふたぞへ **女郎** アイ。わたしも八ッ過に志まふて。あふたわいな。 **志めの** 樂しみなんすの。 **女郎** ナンノイナ。なんぢややら。むしや。くまやじやわいな。それ。せんだのナ。たばこ入レの事だな。 **志めの** たいていはら立てじやないわいな。アノ。そしておまへの所の。妻木さんハ。やつはり文五郎さんかへ。 **志めの** のアイ。此間ハ。なを志こりぢやわいな。 **女郎** 急いやうに。心得てくれなんせへ。 **客** 小便を手水鉢のまへ **志めの** うたふ **佐右衛門** 所作する。 **客** ねころぶ此所志ば **女郎** ちやく／＼ひとつ。くれなんせ。 **とよ** アイ。茶もつてきて。夕さん。ちよつと。おいなんせ。 **女郎** アイといふて。勝手へたつ。 **佐右衛門** 勝手へ引 **くめ** 志めのさん仕廻なんせ。 **志めの** アイといふて。先ツたばこのみて。三味線志まふ。 **くめ** はな哥にこよひあをとてよもないかどを行つもどりつ **志め野** さん。おまへのたばこ入レ。見せなんせ。ア哥がるたにしたものおやな。天神さんかいな。 **志めの** なんのいな。くげしゆじやそふなわいな。鳥もなく。かねもひぢかぬ里もがな。ふたりぬる夜の。かく

れ家にせむ。くめ かわいらしい哥じやなア。客 近日々々。くめ お、しやうしあめのさん。ふり袖が。ひっくりかへつて有わいな。客 ちよつと御休被成。客 寢てゐる。くめ の間に。屏風のぢごく拵へある。其外、くめ 申。ちよつと御休被成。客 寝てゐる。くめ お、ちやうし。申。あちらへいて。御やすみなされ申々。客 ウ、ア、よふた。どりや小便してろくにねよか。くめ ナアニ。い、なさるやら。女郎 かつて おつやさんわたしがつ、みへ。どこにあるぞいな。くハシ や それとよ。夕さんの。つ、み上ケまぢや。どふじやいな。正月の。いぢやうへ。大かた出来たかへ。女郎 さいな。すつきりわたしが。思ふやうにならぬわいな。わたぢや。黒ちりめんの。ちろあけもやうに。ちやうといへへ。こちのお熊さんが。そら色ちりめんの。無地がよかろと。い、なんす。どふで。おもふやうにならぬさかい。わたぢやもふ。かまやせん程に。どふなとなんせとうそばらが立たさかい。ぐつといふたわいな。そりやそふぢやが。花情さんに。正月五日出てくれなんせといふてやつたが。まだ何とも返事なんせん程に。おまへも。そふいふて。くれなんせ。くハシ アイ。わたしも。そふ申そふほどに。おまへも。そふい、なんせ。そあて。おまへへ。いつが勝手しやへ。女郎 まちなんせやといふて。鏡袋より。のべの覺帳取出し。こうつ。マア。五日と。九日と。十三日と。十七日と。廿三日とが。わたしが。勝手じやわいな。くハシ もつとよい日を出なんせ。そりや。おまへ。わるい日。ばかりじやぞへ。女郎 さいな。それもまた。どふなとするわいな。マアお

まへも。そふいふてくれなんせ。くハシ アイ。マア。奥へ行なんせ。ま、上りなんせむか。女郎 いゑま、くハシ さいな。それもまた。どふなとするわいな。マアお
 かいやぢやが。ちや／＼一ツをこしてくれなんせ。鹽いれてへ。そしてわたしが所の。源七が見へたら。たばこ
 持つておじやと。いふておくれなんせといひ／＼屏風の内へ

浪苑春樓志

解題

一 『浪花青樓志』は、寶曆九年（我が二四一九西曆一七五九）の開板、原本は六十九丁（内譯、題言三丁、後序二丁、緒言八丁、目次七丁、本文四十四丁）。天地五寸三分。左右三寸七分。新町遊廓のことを書いた述作で、作者は墨江閣と『廓中一覽』に書いてあります。

一 その『廓中一覽』は、享和元年（我が二四六一西曆一八〇一）の出板、即ち『青樓志』に比べて、四十二年後れて世に出たものですが、その内容の記事は『青樓志』と同一です。委しく申せば『青樓志』の巻頭にある緒言、後序、緒言、目次を削除し、新に繪入題言五丁を加へ、本文最初の第一行と、最後の末行にある『浪花青樓志』の五字を削り去り、その代りに『廓中一覽』の四字を埋木ウツキしたもので全く古い板木をそのまま、に用ゐたものに相違なく、少しく注意して見ますと、新に書き添へた『廓中一覽』の四字が、舊本『青樓志』の板下筆蹟に似せてはありますが、風韻に於て餘程劣つてゐることが發見されます。——簡単に申せば、『廓中一覽』は『青樓志』の改題です。

一 この『青樓志』の著者、墨江閣また墨子羽の傳記については、寡聞の校訂者は、一語も加へることの出来ないのを深く耻ぢます。

一 本叢書の底本に用ゐた『浪花青樓志』は、本刊行會相談役南木芳太郎氏の愛蔵本。『廊中一覽』は時に見かけることがあつても、『青樓志』は中々見つからない珍書です。殊にその板下の筆蹟は見事な出事榮えであります。惜しいことに題簽の文字が見えませんが、本文第一丁の表題の文字を擴大してこれを凸版に致しました。

花柳之地。風月之臺。一種
春色。別具情態。一入
此境。爰翔燭和亭。觀尚然。
况當白者哉。此青樓志。所
由起也。桃源舊詠。頃多

遊之子。燬犀照之。乃彼後
之玄津。觀境煌。亦乞手。
余保讀斯志。宛如步花
朝月夕。豈能不動情。
情果屬何人。緣果期何時。

妾想乾眼。夢遊陽臺。
今幸及強。高遇之。一
至。余
無涯者。去其姊妹。養精
却老。少長。妻。子。垂杖。縮
地。送迎。自。至。巧。笑。即。是。奕

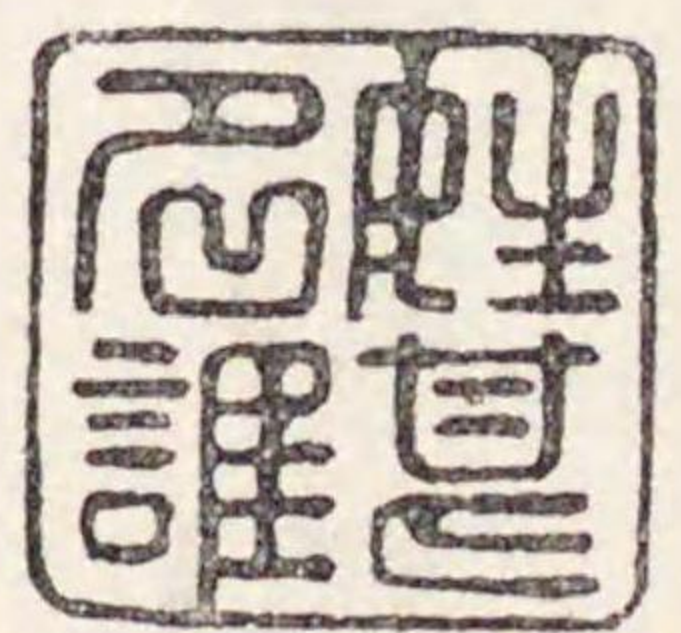
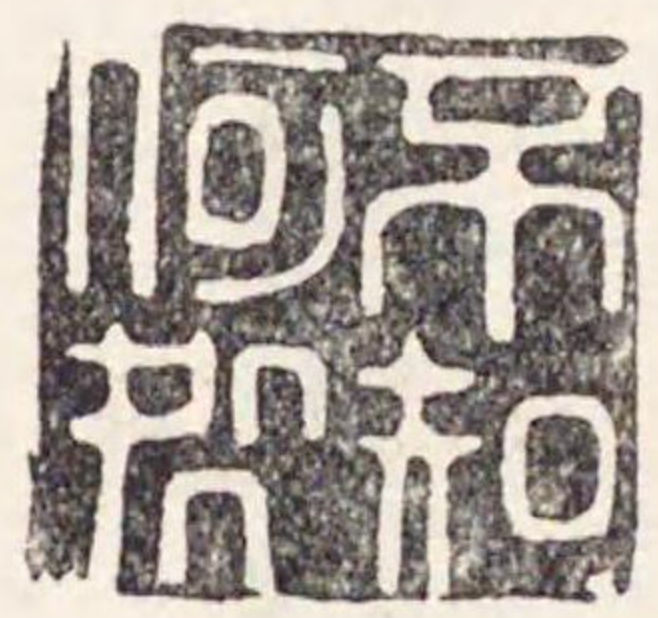
袂。抵。情。自。會。玄。理。世。誠。東。玉。真。巫。山。素。女。以。速。以。嬌。嬌。才。如。色。各。得。其。宜。信。我。豈。見。則。遠。我。蒲。團。上。人。也。乃。謂。如。夢。難。久。况。遺。風。俗。事。後。世。

毒。治。迷。子。弟。斯。得。其。道。矣。密。地。自。通。之。是。海。郎。可。水。高。牆。飛。度。詎。日。隣。如。窺。臣。有。情。則。有。緣。有。緣。必。有。態。後。之。視。今。猶。今。之。視。古。何。

不道造手箭斗花中。以俟
風月。知己哉。為序

己卯春二月既望石山老

樵漫題



青樓志後序

在中將善屬文其書辭往
往文以雋詠亦唯使人感
憤不已已余友墨子羽嘗
儀式在氏意其在斯乎乃

手自摘其清言以旦夕焉
今乃由是欲以著斯篇乎
亦卒不難矣子羽文克肖
在氏豈非其驗乎近寄忝
余且請有言余受而披之

則業已有序例在豈族余
之言乎敢贊盛事姑應其
索乃爾

子侑漁人題

傾城は人の心を種として萬のてくだとはなせり世の中の人まどひやすき物なれ見るものきくもの聞つたへに通ひ出せるなり紅葉に鳴鹿水に住むおしまでいづれか妻を乞ひざりける力をも入れず志て國の守をもこなし目のまほに鬼の様なる人もあわれに思はせ土氣はなれぬをも和らけたけきおやぢの首尾をつくらすは傾城の一ツ也此傾城鳥羽の御宇より出来にけり志かハ有れども世にはやることは木の村や越中よりぞ始りけるおし照や難波のあし中を築たる比は揚錢の數もさだかならず直にしてその程わきがたかりけらし近き世と成り六十あまり九ツにはうつりけるかくても花をめで歌をうらやみ香をめで茶の湯を常として心言葉やさしくさまぐに成にけるふりふらぬはすいぶすいの始なり此二ツははりあいのち、は、のやうにて手習ふ新造の始めにもしけるそもく客の品六ツなりそのむつの一ツにはすなほな客

口舌こときらふ此客君まだひ今そはなけをのはすこのきやく

といへる成べし二ツには色とる客

あつ鬢に思ひつく身のあちきなく夜ハ菊石^{みつしや}の有るも志らずて

といへるなるべし三ツにはかうとう成る客

君にけさ明ぬそのまにはしりいなは戀しき事に志ゆひやつくらん

といへる成べし四ツにはわけ知り客

此里に通ふもつきじ東口の濱の小石のふみつくすとも

といへる成るべし五ツにはさへぐ客

いつはりのたいこにあほうつくさせて踊文作うれしからまし

といへる成へし六ツにはぐりちな客

此里てきらわれにけりわる口のうちこまれても知り良をせり

といへる成へし

今の世の中の客の心やひに成りにけるよりあだなることはしたなきこと出れば色好の客も埋れ木の人志れぬこととなりて花すきほに出すべき事にもあらず成りたり古へのきやくはことにつけつ、風情をなしあるはやうきをせんとて便なき揚屋にまとひあるはさへがんとて大よせたいをよび心々のなくさひさかしおろかなるとあらしめしけむちか有のみにあらずされ石にたとへつくは山にかけてるつ、けに心を明し悦ひ身にすぎたのもしさ心にあまり富士の山によそへて枕の塵をわらひ松蟲の音につりかまのたぎりをよろこひ高砂住の江の松も相生のやうにいひかへし男山の昔を思ひて長かしの一時をくねるも哥を弾せてまぎらへしけり春のあしたの正月のかた秋の夕のほんのかた桃菖蒲きくのかた年ごとにす、はき餅つきことはじめを買ひ朝ごみの歸りに雪のつもるを見て我鬢の白きをなけき吉野川をひきて呼び立を恨みけり今は富士屋の跡も絶越中橋も朽るなりとおとろへをのみ

なけきけるいにしへよりかくつたられる中にも山本與次兵衛の比より身請ひろまりける彼世や傾城買のやうすもありけんまた藤や伊左衛門の助六が上にた、んことかたく助六の伊左衛門が下にた、ん事かたくなん有ける此人々を置て又もすぐれたる人も淀川の瀬々に聞へわん久が物狂のしきのほり客もたへすに有けるこ、いにしへのわけあり客わづかに三人り四人り有けり是かかれたる所をぬ所たがひになん年は五十餘り六十にたりぬその名聞へたる君はすなへちふじやあつまへ大夫のさまは得たれともまことすぎたりたとへは晝にかける花の移らふかたなきか如し扇子屋夕霧は其心やさしく言葉たらす志ほの目に色を含み匂ひ残れるとめ伽羅のことし丹波や井筒は言葉するどくそのさま身におへすいはばあき人の女房のよき絹着たらんがことし芳塾屋總角はそのすかたさいさくして始おへりふけすいはば三ヶ月の宵の雲にあへるがごとし丸や小富士は越中にさも似たりあわれも知り筆も妙なり物狂のしき所有言ハ、あふむかへしも詠ムべきさまなり丹波やまつ山はそのさまふつ、かなりいハ、たきどにまじる山はぎの花ふさ多きが如しこの外その名聞ゆる君野邊に生ふる夕かほのはびこり宇治にむれる螢のごとくに成にけりか、るに今四すし町の氣色あまねきひなの外まてかくれなくつくは山のみもとよりも繁く通ひ萬の里の上みにた、んこといにしへの夏をも忘れじふりにし事をもおこし今も見そなへし後の世にも傳はれとて寶曆七年丑の六月大つくし氣の浮客すい所の預り氣の摺れ客揚詰買の惣官あふささるさの爲成りぎやく衣紋つくらふ美男客等が寄り集り未來記に入らぬ花街の故實自らのおもへくをも立聞傳へし夏をもまじへこの地開けて傘を

さしかさすよりはしめて後の代までかわらぬことをもきかせいつも常盤に此所に居て子孫を見るにいたるまで又盛衰につけても客のことを思ひ此書をなすもむかしの格をこひ繁花の時至らん上代の風を祈りあるは今もちひざることもたて名付て浪花青樓志といふかく此たびゑらびしも山下水の流れひろがり濱の眞砂の数がぎりなき日數今は飛鳥川の瀬に成り女郎や茶やあはやの主も替り借住の家持となる夫舊記は春の花匂ひすくなくして空しき名のみ秋の夜の長きをかこてれば且は人の耳をおそり且は我が心にも耻思へどもおとろへしくるは今をむかしになさまほしく又いさゝ川いさゝかのたかひは此地に久しく通ひて此支にくわしき人のあらため玉へるときにあへるをなんよろこびぬる彼山中入道世になくなりて身請の支と、まりぬるかなたとひ時移りこと去とも傾城の文字有るをや身請きやくの跡たへすまつの位のちり失すして正木のかつら長くつたはり客のさまも直りくるわの意氣地を得たらん人は大空の月を見るが如くいにしへをわすれす今をさかへざらめかも

浪花青樓志目次

〔景勝第一〕	舊廓移當所紀原	近世曲輪之號	大門口并蛤門	瓢箪町
佐渡島町并大東新道	越後町并阿波座揚屋町	葭原町	新京橋町	新堀町
九軒町	佐渡屋町	木村屋又次良遺趾	蕪姫遺趾	佐渡島勘右衛門遺趾
十八公宅	串童宅	岸木宅	幸齋宅附山宅	瓢箪橋
片葉蘆	雛妓淵	流螢澤	越中橋	櫻桃宅附櫻桃井
酌子掛	高瀬庭	道者横町	瓢箪小路	觀音裏
難波裏	樽裏	觀濤臺		
〔藝文第二〕	夕霧艶翰	吾妻自畫贊	細見圖	游里未來記
雨夜問答	杜撰年代記	評判	井筒過去帖	屈文
〔歌舞第三〕	祭禮拍子曲	籬節曲	幼様踊	大會踊
〔妓品第四〕	大夫附 出世大夫	天神附 大小見世	鹿子位	和氣
新造	若衆女良附 歌妓	月	影	汐
引舟	雛妓	香車		

〔妓院第五〕

傾城屋 附忘八女良屋 茶屋

揚屋

夜見世

六頭子 附牽頭

〔行事第六〕

紋日 附表着二日着三日着

傘記號

門立

大夫天神運長持

喚迎女

七夕立花

三月花市

門出饗應

顧老江 贈小袖

阿萬膏藥

長四條

〔商鋪第七〕

大夫白粉

虎屋油

阿澤救乳 附 齋救乳

三社擲錢

信濃屋蕎麥麵

女郎饅頭

惣判形

限太鼓

上古綾出

〔故事第八〕

局門嫌

番人改人

佐渡屋町成瓢箪町支配地由來

勸進太鼓

回番

衣裳着

郭下方言

往昔雪踏替薄臺由來 附 二齒下駄

〔雜話第九〕

朝鮮人來曲輪

大内薦

夕霧伊左衛門事實

椀久事實

傾城町屏障

綿屋六右衛門

京屋阿琴事實

傾城買

捨小舟

助六事實

備前屋清川事實

丸屋小富士事實

繪屋吾妻好奇

大坂屋淺茅生語

格子見世

燕姬奇進唐戶 附 石碑

丹波屋井筒語

蓋此舉也以老師縣生所傳者爲編輯一帙也然而力不足辭不次識者其以爲簡乎豈待予言哉則踈漏所不必問焉

又次良石碑

又次良石碑

又次良石碑

又次良石碑

又次良石碑

浪花青樓志

景勝 第一

舊廓 移當所紀源

天正より慶長の比まで 御城下に定たる傾城町と云所も無之五七軒或は十四五軒つゝ所々に散在せしを元和の初より 御城下 住古下に 難波ト云に 輻湊し永代大廓と成る今の瓢箪町は道頓堀の下 西をより引來れり永世 免許の地なれば 蔓をならぶる妓院の 繁花懸花燈四方を照らし今四方妓館の上みにたつ 夙 國恩の廣大なる何をもつてか報謝し 奉るべきや恐れ慎むべし

近世曲輪之號

五十鈴川の流れ清く四海 恩澤に沐し松風の音さへ萬歳を諺ふ御代と成るに隨ひ日に増夜に添ての繁花正保慶安

の比までに當地に集合して大廓造立の許命又次郎 事實瓢箪町 蒙り往來の人同所より出入するが故に廓と號す
又此地裏尻市街の界に埋を堀らしめこれよりして曲輪の文字を用ひきたる此地根本の故實とす新に造立の市街な
れバ俗に新町と號せり

大門口并蛤門

花街造立の始までは西口ばかりなり日夜番人を置鎗戟森然として燈火耿々たり門外ハ立賣堀南裏町小濱町 俗云
山本町に接せり爾來寛永の比東口の大門 許命有て西横堀係左衛門町順慶町通りを経て往く者還者群
集をなせり享保十二年の比吉原町大門口奉蒙 許命開之長堀宇和島町南北堀江を受寶曆四年の冬立賣堀失火の
後新京橋町大門開之の 許命有て立賣堀助右衛門町北は直に大川筋までを受同冬佐渡嶋町東口大門と成り藤左衛
門町を受寛文六年午十二月八日の夜蕪堀の舊宅より失火にて其後消火の便ならん爲に諸方大門 許命有て貞享
元祿の比まで度々の絞出し有之多口を不許暫時關 了せしに吉原町始追日諸方通路自由をなし晝夜の往來十合に
満てり正徳の比は一街々々の界に街小門有享保九年の失火より小門再 造せず又蛤門と云稱は新京橋町立賣
堀の失火の時火にあふて口開し故 蛤門と呼來れり承應年中狼藉者など緘捕ためにとて長道具鐵刀等 許命有し

に享保九年の失火より東西の大門に見へず

瓢箪町

道頓堀の下モに在りしを 永世不易の 許命に依て元和の始當所へ移せり木村屋又治郎町共いふ又ひやうたん町
と名付し又又治郎母ハ木村長門の乳母にて木村氏より又治郎母へ太閤様より拜領の金の御馬印の瓢箪を賜しよ
り街の名に瓢箪を採家號に姓の文字を探りたると言ひ傳ふ天和年中役義に故障有りて斷絶す往還の通路自由をな
して通り筋と稱せり

佐渡島町并大東新道

當町は寛永十二年の比までは上博勢町に妓館在りしに其比也當所に引移り佐渡嶋勘右衛門開くによつて姓を探
て町名とす又大東新道と呼ふ所は當町大門口より半丁西吉原町へ出る路なり享保三四年の比開之依て新道といふ

越後町并阿波座揚屋町

佐渡島町の大西揚屋町二丁の古名にて街の小門有りしに享保九年失火より佐渡嶋町の支配と成りて舊名を闕たり此町阿波橋筋揚屋町より引たりと其年季不詳

葭原町

當町天満葭原より正保慶安の比引移り文字を祝して吉原町と書侍る又其比川口三軒家より引移りたる者も在りしと

新京橋町

新堀町

元和寛永の比阿波座堀より引來り一筋二名有て上ミの町下モの町と言ふ上ミ 東町を四郎衛町下モ 西ノ町を金

右衛門町と呼びし寶永年中東を新京橋町西を新堀町と改しと言傳ふ又立賣堀阿波橋筋揚屋町より引移たると言ふ説有れども不詳以上を五曲輪と稱す

九軒町

此所花街の餘地にて昔は問屋など雜居せしに四方の商客來集せし日妓女を招きけるに揚屋勝りたるとや思ひけむ問屋より瓢箪町へ相頼み東の行當に往還の道を開き揚屋町と成る時代不詳右之故に當時にいたりても町役なり又九軒町と言ふ事九軒有し故名付たると見ゆれども往昔問屋十二軒在りし時よりも此町名有りや未詳又故町といへども五曲輪年寄の下知を受ること右のごとし

佐渡屋町

當所は九軒町の西に接て餘地なるを凡慶安の比高麗橋筋佐渡屋某拜領の地にて町名分明なり其比立賣堀穴喰屋次郎右衛門入道宗甫隱居家舗にもとめて支配の吏又次郎へ頼まれしより今に瓢箪町の支配と成る穴喰屋ハ立賣堀

に橋名のみ残せり

木村屋亦次郎遺趾

瓢箪町東口より三丁目北側當時堺屋某龜屋某の居住地なり享保九年失火より宅を配當せり其已前は主人替といへども壹ヶ所にて相續す

蕪姫遺趾

右西隣當時大竹屋某居住の地なり蕪姫の寛文の比新屋清春といひし尼なりし家貧しく元朝雜煮の餅の代りに蕪を入れて祝賀を収納せりとよつて稱せり其末今は亡たり

佐渡嶋勘右衛門遺趾

佐渡島町東口より一丁目十字街西北隅より二ヶ所目の家 今大坂 屋東隣 にて門幟に富士の山を畫けり町にて佐渡島勘右衛門と呼べども何時なく富士屋と呼ならへり正徳の末享保の始の比斷絶す

松宅

新京橋町土橋筋西へ往く北側灰屋某宅 今京屋某隠 居家鋪と成 に名高き松樹有高き壹間餘蓋凡二十間餘因て松やしきと呼ぶ此松正徳元年四月八日立賣堀助右衛門町竹屋失火に焼ぬ世俗竹屋火事とも四月八日焼ともいふ或説に云く瓢箪町吉野屋の松ともいへり 未詳

串童宅

又優宅トモ書共同

右松やしきの南西隅引廻し水道の側までの宅也賣永の比茨木や某尻を切て賣りたるとて串童宅と名付當時東側三ヶ所と成る

岸木宅

右優宅の向ひ東北隅 松やしきの の宅なり昔ハ横町にて出入ありけるに依て岸木宅といふ

幸齋宅附丘宅

吉原町大西 佐渡島町茨木屋四郎三郎 有能舞臺は少々東に有 別に入 是より西行當りまで假丘なるが故に山やし
十字街吉原町行當入口有 口有
きと呼ぶ庭中佳景 任 侵 康 樂 展 口 不 及 談 目 不 及 瞬 假 丘 之 景 最 美 乃 里

瓢箪橋

寛文十二年西横堀順慶町通りへ瓢箪町より此橋を架故に當町の名をもちゆ新に開きし街なれば新町と呼ぶ因て俗
に新町橋と稱して諸國の通稱とす今に至て新町も修構を待る

片葉蘆

新京橋町南側水道惣て片葉蘆を生ず一本も片葉ならざるハなし享保九年の失火に焼ぬ元祿の比一大家より探索し
玉ひし事有り其生る地を考に夢の浮橋 米屋町筋心齋橋上ル筋 の流れを轟の橋 上難波町仁徳天皇御廟の裏御 え引
堀江の川へ接き流れて大海に行くの中途支流なり此蘆求れば今もまゝ有 門石橋有ばくらう町筋門也

雛妓淵

瓢箪町東口より壹丁目十字街西南隅今の丸屋某宅の軒の下なり 但ひやうたん町 享保二年の冬近江屋某抱の林屋
寒夜に懷手して軒下を歩行せしに眠りて大きな尿桶に入陥死す此よりしてかぶろがふちとよび來れり

流螢澤

此名昔上博勞町に有し時より有しにや今指所は越後町西の横町西側の水道の側に傘匠有此宅の裏といふ又佐渡嶋

町當所へ不移前に呼たるに當所へ移たる節は此處塵塚成るに濕氣蒸せて螢と成り飛たるによつて舊名を用ひて此名附會せしと言ふ説も有

越中橋

瓢箪(箆)町通り今龜屋某宅の尻水道の向ひ九軒町水道の石垣の側にわづかの礎有れども追々地を築たれば今地下に埋れあるなり昔又次郎抱の大夫越中門ト立の比はひやうたん町通り群集をなし往來成りがたきによつて裏より橋を架出せしと故に越中橋といふ

櫻桃宅附櫻井

元祿の比までは近江屋某宅身幹にて十抱ばかり有し櫻桃有て櫻桃宅と呼ぶ此さくらの下に堀たる井にてことに清冷なる水にて世人櫻井といふ信に氷井臺にも勝り此櫻桃笑を帶時賞する人多く幽艶の詠筆紙につくしがたし惜かな此櫻桃正徳元年立賣堀竹屋失火に焼亡す漸井へ今に有之當時瓢箪町大竹屋宅の裏なり大坂三ヶの名花の

内にて見つけとなればあるしのさくらとも呼びしと故老かたり侍りし

酌子掛

新京橋町東行當り南へ瓢箪町へ出る片側の横町也或人云攝州能勢郡杉生村の後に酌子岩といふ名石有行當りて曲るといふ意にて名付侍りし故此に擬しての名なりと云非なり當所濫觴の比より向ひへ板堀にて片側町也水を仕向ふの板といふ縁語より酌子掛と云至て古名なり

高瀬庭

吉原町東行當りの入口に高瀬屋某宅庭中の假山川摸寫して風景美なる方地なれば高瀬の庭と呼ぶ正徳元年竹屋失火に残りて享保九年の火に焼亡し其名をかたり傳ふのみ

道者横町

瓢箪(箪)町東口より一丁目十字街南へ入よこ町也享保七八年の比までは東西の兩側ことごとく局つぼねなりしに諸國道者滔々たうたうと入込いりこみしによつて斯名有今漸やうやく四五軒残り

瓢箪(箪)小路

西口大門入ると其ま、左り側かほの露路ろぢなりひやうたん町始りの比よりの露地ろぢなり

觀音裏

右瓢箪(箪)小路向ひ合せの露地ろぢなり其由緒不詳予幼童の時祖母かたり聞せしには元祿初の比此裏にて石佛の觀音堀出せしに怪異の事數多度なれば或修驗者乞求めて安置せしと聞傳ふ又或人云右觀音は八丁目筋誓願寺境内觀音是なりと又此地の修驗者は大正院大寶と云明曆二年藥師堂建立成りしにいかなる裏うらにや寛文七年斷絶だんぜつす此藥師白髮町觀音堂境内に遷す藥師裏といふべきを元祿の比石佛出て玉ひしゆへ觀音裏と改名せしにや未詳

難波裏

瓢たん町東大門口下ル北側今小間物や住居の西隣の裏なり貞享の比なんばや某宅に付たる露地ろぢなれば難波裏と呼ぶ又一説當地ハ昔の下難波にて移たる時節じせつより在る露地なれば難波裏ともよび侍ると

櫓裏

吉原町天満より移せる時までは當町内三ヶ所櫓有但常芝居當時指所は宇和島大門筋より當町へ行當西へ半丁許瓢箪町二丁目の裏なり昔三箇所の櫓の内にて其壹ヶ所在たる跡の裏にて斯呼ぶ

觀濤臺

吉原町當町へ移たる比は此地低長川の潮満來て樓上の銀燭水上を照らし晝夜の景色壯觀をなせり其遺跡あせ々たる燈火ともしびに舊名を挑て宇和嶋大門通當町の行當水道の側に其影を止む

藝文第二

夕霧艶翰

瓢箪町扇子屋某 夕霧事實篇 抱にて 則艶翰を其家に所持す夕霧は寛文の末延寶の比の大夫にて死後顧老葬送を立派に行ひし故に世に高名せり下寺町淨國寺 攝陽翠談西成郡 墳墓在り花岳芳春と法名す 延寶六年午正月六日死去

吾妻自畫贊

佐渡嶋町當土屋某 勘右衛門遺趾ハ 抱の大夫にて當地身請の權輿なり往昔三百兩の價を以甚貴とす今に至河景勝篇に出たり

原藝の身請三百兩には不過當國川邊郡 順和名類聚に出 山本の里 順和名に出羣談村の部に 坂上與次右衛門と云大庄屋身請せらる 則與次右衛門遺趾當村西本願寺門下の道場西 宗寺と成る與次右衛門舊宅の中門今に在りと 自畫の一軸は表着を着て座しるる體にて其贊に云 身はなには心ハ都名はあづま

登りつめたる山本の里

此一軸は與次右衛門遺趾西宗寺に藏せりと吾妻ハ寛文の比の大夫なり與次右衛門九軒町揚屋井筒屋太郎右衛門宅にあそび井太郎の音を假借して青苜樓を製造せしめ金具の文にハ定紋三ツ柏を用ひて花清宮の契をなせり其樓今は亡たり

細見圖 一卷

此書なくんば有べからず村漢も居ながら廓中をふるべし

游里未來記 一卷

貞享の比蟻塵散人曲輪の廢するを嘆て此書を作す

雨夜問答 一卷

同人どうじんの作なせる所ところ 契短けいたんと六む十じゅうぞう との位階いはい闘たうを綴つづりて笑書せうしよとす

杜撰しせん年代記 三卷

何人なんひとの作さくをまらす杜撰しせんの甚はなはだしきゆへに斯呼かくよぶ歟

評判

每書數まいしよをまらす深かく探たにたらず

井筒過去帖 一册

佐渡嶋町丹波屋某抱の太夫時代不詳此書井筒曲輪せつしもちを出る節妹女郎わがくへ吾苦界わがくせし間の変を書つらねて教訓けうくんとなし侍りし書なり今は亡ほろびてなし

屈文

漂客へうかく無便たよりなきや倡門うかれにさまよひ外ほかの妓かを買かんとす先せんの馴染なじみの妓かへ今の妓かより其由よしを告廓中つぐやくちゆうの例艶辭れいえんじ綺言きげん千變萬化せんばんくわの妙めうあり

歌舞第三

笛節曲

承應明暦時代じやうおうめいれきのはやりうたなり寛文十二子かんぶんじふにし年扇屋夕霧京あふせりより當所あたところにくだり船中せんちゆうの佳景かけいを時花曲ときはなぶくとなさしむ其ふし

は今の都半大夫といふ曲に彷彿今の絶たり

幼様踊

其はじめ不詳盛に行れしは天和貞享の比にして元祿末に絶たり是は紙二枚かさねの木偶人切抜其合せ紙の中へ馬の尾を引通し雙方の端を持膝の上に置哥に合せて手拍子拍毎に其紙木偶人踊るなり
木偶のまづ
是をや、さま
おどりと稱す
に青銅を付

大會踊

往昔大よせ踊といふは八月朔日より同十五日まで客の尊卑により三五十人乃至七八十人末に至て五六人程ツ、日を約して揚屋の座敷にて打込に踊を催し二十人程ツ、入替踊りをなす出立地踊には野郎帽子さらし帷子黒羅の羽織の裾を腰に巻付印籠巾着からぎなど指て踊り侍る仕組踊は十四五人廿人ほどづ、思ひくゝの物好奇の明衣なり佐渡嶋傳八金澤五平次等其替手の風流を付今宵は何屋の大寄翌の夜は何屋と毎夜々々の大よせにて一夜も

闕如なし又門ト踊は壹丁内の兩十字街の關には太夫長持をもつて人を押その路中は燈燭闇夜を畫の如くにして東雲までに思ひくゝの支度美麗夜明しの踊なれば長持をもつて人を押かすば知らぬ男おうな所せきまで入來あやまちはかりがたし享保九年大火に太夫長持焼失して門踊も絶たりあかし享保の末元文の比まで偶には太夫長持を雙べ關となし一二軒ツ、組合踊有しに往來の口論はかりがたく近頃娼房妓家うちより明地有りちを幸に踊場をかまへ侍りてうちこみの踊とは成りぬ然るに入口の群集往來の先後を争其場千燈萬燭雲をこがせる有さま此地の一景成り志に何なることによ近年中絶せり志かしながら當寶曆八年久々にて再興し侍りて紀原の年にまさりし繁花筆紙につくしがたし例年あらまほしきは此一事なり

三勝唱歌

當時廣橋勾當より世に行れし三勝の唱哥は元祿の比ひやうたん町住吉屋某踊の音頭に作せる所なり能哥成とて其比某檢校手を付て艶哥とは成ぬ茨木屋某が白絲の半太夫ぶし悪口營搔の類當所出作の物繁をかりて其一二を擧て餘は略し侍る

祭禮拍子曲

享保十二三年の比當所より六月晦日には例年住吉大神宮へ御迎の花燈五十晝は光琳様の松を寫しめ出せり其比當所に名細氏とて堪能の人有りて亂の譜に文句を附三絃に寫し鉦太鼓様の物にて囃子往たり此を大坂中祇園拍子の權輿として諸宮夏祭禮の花燈いさゝかの小壇尻まで拍子方を附るやうになれり松の花燈數十漸残るといへども爾來囃子の沙汰絶たり

妓品第四

太夫附出世太夫

醍醐御宇江口白女一條御宇蟹嶋當時用加嶋 又香嶋文字宮木後一條御宇蟹嶋如意同立牧江口小觀音同中の君神崎河孤姫鳥羽御宇嶋上千歳同若の前高倉の御宇神崎戸根黒後鳥羽御宇江口の桂本同妙棕橋龜菊等當國名高き遊君にて姫と呼び君と呼び本庄安塔して殊に堂上に召出され難有も御同席にしての詠哥代々の勅撰の集に載是より相繼て名高き君有れども末代と成りて身を賣業と成りけらし太夫の稱不詳所始後世名妓の稱となれり按に職原抄に彈正尹大納言の漢官御史太夫と謂太夫カミと訓じて頭といふの意よりなぞらへ呼び來れるにや又出世太夫といふは昔より今につたへて時に遇り昔は秀才を撰で太夫とせしに近代ハ艷色のみをとりにて太夫とす誤りといふべし天職の中より大夫になる亥大なる美事とす職原抄に謂下從五位下敍内階載入内勅文假令近衛將監掃部助ハ六位也五位に敍すれば左近大夫掃部大夫といふ古ハ位田といふ事在て五位の敍爵とて大きな規模として侍りしと出世大夫此意にもたとふべし又寛永の頃南都春日の社家當所に來り能を教遣與となせしにより能の縁語より大夫の名出たりといふ甚非なり猿樂家の哀傾城に附會する事笑ふべし或云樂舞に依て大夫といふ説無きにしもあらず秦准士女表日明の初までは女妓樂官に列なりて縉紳大夫の宴に侍せり此説日本雅樂寮にて稽古する神樂朗詠歌舞催馬樂鼓笛五音六律義同し其事ハ似たれども意味相違せり又下賤の詞によらば假令河原藝芝居の中に艶なる者を一家の頭となして大夫と唱へ大夫本と呼ぶ惣て遊女の司さなるによつて大夫と呼ぶといへり松の位といふ亥は始皇の敍爵世人普く知る所なれば姑舎不

天神附大小見世

五々の價數に依て此品目をなせり當時少異有れども舊名を不改大小見世は其價數の次第によれり

鹿子位

其義不詳圍の文字によりて諸説有れども探に不足

和氣

古銀壹錢目ニツにして價の異名とす故に分なるを和氣と文字を替或云鬱を散せしむるを業とすれば醫家の姓をとりて和氣と書と世俗五分取といふ

新造

船に依言葉より出たるなど書なせる事も有れども非なり粧あらたに造るといふの縁語に引れて新造とは書侍らんかし又李白詩に借問漢宮誰得似可憐飛燕倚新粧これによつて此を見れば新粧と書ても苦しかるまじき歟

若衆女郎附哥妓

寛永の比ひやうたん町大和屋某抱に市之丞といへる傾城有髮卷立に結白齒表着無しに見世に出世に若衆女郎といふ其より相繼て阿波座上の町今の新 錢屋某抱内藏之助杯名高き若衆女郎なり天和貞享の比百舌屋近江屋などいへる傾城也若衆女郎の表着無きによつて三絃を彈女郎を置二人の香兒を付て出せり此かぶるに舞などまわせ右女郎哥曲をうたふ夫より已後紙屋某の抱の香兒勝之丞といふあり生得居語せりふなど能によつて舞子となし右の如く藝女郎を添て出せり客の心にまたがひ其ほどハ時宜に隨へりこれより相繼て諸家に三絃を業として客心に隨ふ女郎出來たり藝女郎と呼びしに何の比よりか藝子と呼ぶまとは成りぬ當時數を知らず

月

影

汐

一二三の價數によりて此名興れり近代絶たり

引

舟

大船進退を助するの義より出たるにや

雛

妓

往古六波羅の所縁なり吾付添ふ妓を音信來る者有ればヲ、と答則應の字也妓の遣ふ紙なども元文の比までは
鑰の緒にて緘懷に入れ歩行しに近年ハ猥に成胸様物にてく、り故實を廢失す此鑰ハ故代長持又は簞笥挾
簞などの鑰なり小天神已下月影汐の類ハ局に簞笥挾箱鏡臺までを鏝更專とする故小天神已下付添ふ雛妓ハ此鑰

なり約束の日柄にて出る日の妓に付添ふ雛妓ハ使に出るといへども道中の時のごとく後帯にて使をし主人の内に
住居の日ハ雛妓の使前帯にて出たりこれらの故實近比廢失す

香

車

妓院辨要の婢をいふ義未詳

妓院第五

傾城屋附忘八女郎屋

傾城の文字普く世人知る所なれば注釋を待す忘八と書ハ按に類書纂要云忘八言人入于花柳之業者其心已

忘却 孝弟忠信禮義廉恥之八字 矣とくつわと訓する始なり又同書に鶉兒を出せり注鵝乃山中之鳥有雌無雄
專與別鳥 □ □ 言娼家多與外人 □ □ 正如此鳥女郎屋といひ習ハせしを考に往古娼と呼び君
と呼びし由緒あれば上藤の音を假用ひたりと聞へたり又郎力當反官名と釋を下 許免の地の遊女なるがゆへ
に女郎と呼んで不苦歟

茶屋

傾城町草創の時より今に相續寛文九年 奉 蒙 許 命 貞 享 三 年 株 の 數 九 五 に 相 定 め ら る

揚屋

揚屋町と指所は越後町なり阿波座上下九軒町なども古代より有といへども先越後町をさす年季は景勝篇にて可參
考し

夜見世

萬治寛文の比迄は三月朔日より十月晦日限にて霜月朔日より翌年二月晦日迄夜見世なし十月廿日より同晦日まで
年中夜見世終として繁花成りし夏なり正二月の夜見世毎年極月願へり然るに延寶三年依 許命 元日より十月晦日
まで夜見世相續侍り霜月朔日より極月晦日まで晝ばかりにて暮より大門關了せしに年中夜見世と成りまは享保
九年大坂火後 奉 蒙 許 命

六頭子附牽頭

類書纂要 云生理を不務 人人家の處子を牽引花柳中の頭に入て行走と牽頭の文字此に見ゆ様だいこまちだいこ
といふ類なり當所六頭子の權輿とすべきは一九郎 茨木や喜 二九郎 法名 説 經 語 なり其外名高き牽頭あふむ吉
兵衛だまれの茂右衛門すいの太四郎 甚名高し宇治屋喜八雪駄屋春日筆や藤兵衛正下元方勝師忠左衛門柳吉兵衛
等也筑後節には竹本頼母鼻祖として千二左馬太夫までこれに繼物真似には板屋喜右衛門同彦右衛門あやめ八郎兵
衛名高し筒井山城等なり上代は座料といふ事なく客より録賜りしに近世ハ拍ぬによつてならぬやうに成り無是非
浪花青樓志

座切の花代を記得するやうに成りぬ嗚呼古格の廢失する事をや

行事第六

紋日附表着二日着三日着

紋日に三説有其是非未考紋日を通用の文字とす歲中行夏の日を指ていふ
許命の遊女なれば禁色を着禁色は織物なり表着に用る夏傾城町の規模とす又二日着三日着といふは五節句カタの
日柄の内にて二日め三日めといふ意に志て此カタを約せし顧老の方より好事の衣裳を製せ馴染の妓に送る其衣裳
毎日上下着替同衣装着ぬを其妓の全盛とす此のみ今古不易なり

傘記號

長柄の傘は官家の物にして傾城町の是又規模とす晴雨の別有りて道中の時さし懸るなり主人の紋にて其家を別
てり

門立

天和貞享の比まで有りて元祿末絶たり

大夫天神運長櫃

傾城町草創の時より傳來せしに正徳元年四月八日竹屋火に焼ぬ其後享保二年再造せしに同九年大坂大火に絶た
りさしかへと貫のわから長櫃運バす下人口傳有り

呼よび

立たて

字面じめんにて分明ぶんめいなり

喚よび

迎むかひ

女にょ

五節句ごせつぐに不限かぎりなし臨時りんじに 突出とつしゅつしの新造しんぞうな 道中みちちゆう有時あるときハ粉娥ふんが終はれば兼約けんやくの娼家やどやへ雛妓ひなぎ來りて上かみの女にょに案内あんないす此時このとき上かみの女にょに
も支度しだくまで妓院ぎいんへ迎むかひに行い其そのくくに上かみの女にょとも馳集はばあつまつ附添つきぞひ倡門やぐそくのこらす回終めぐりはりて供ともしかへる是上かみの女にょの勤やくなり今古こんこ
同どうぎうす

七夕せつしち立りつ花はな市いち

承應しょうおうの比ひまでハ例年れいねん七月七日しちがつしちにち衆妓しゆぎ自指みづからさして星ほしの手向たむけとす甚賑にぎしく々敷事しきじ成りしと語傳かたりふ寛文くわんぶんの比ひ絶たへたり

三月さんがつ花はな市いち

瓢箪ひょうたん町東口まちひがしぐちより一丁目いちぢやうめ十字街じゅうじがは左右兩側りやうりふはとも櫻桃おうたう花手はなてまり花はななど毎年まいねん花はなの市いちをなせり凡明曆おおよそめいれきの比ひより例年れいねん三四月さんしがつの
間賣あいで來り千もの雪ゆきを見ては吉野山きちのやまを斯こゝに移うつすかとあやしみ昔人むかしびとの名哥ななうたを感吟かんぎんす

門もん出で饗けう應おう

此こゝ一件いっけん今古こんこ不易ふえきの風俗ふうぞくなり身請みうけハもとより苦界がうがい首尾しゆび克よくつとめて曲輪まがらひを出いる斯こゝを門出もんいでといふ妓ぎの時宜ときぎに隨したがひ傍輩はろばい
妓ぎなど集會しうかいして饗應けうおう出いる事ことなり又傍輩はろばい妓ぎより其々それぞれの餞別せんべつ和哥わがの贈答くわうたふ端書はながき有りて發句はつく様の物ものにて祝賀しゆがを伸駕のぶかの
花麗はなれい主家しゆけの富貴ふき次第しだいにて差別さべつ有あり

願ねが老らうね贈おく小こ袖そで

往昔むかし青木村屋越中あおきむらやえちゆうに田漢ひな兩夫りゆうぶ有あり歸國きこく前まへよりたがひに日柄ひがらを請持まがて歸國きこく後あとまで餘客よかくをつとめさせじと鬪爭あうしゆう出來いに

ければ雙方何れへ往ても客の輕重（せうじゆう）によるといへる人口難（じんこうがた）斗濁衣（たうたつぎぬ）の二布縫目より解紐付て兩夫（りゆうふ）に贈り重て上坂（かみざか）の節（せつ）可見今般は濁衣を吾と思し身に添たバひて歸帆有れとて何れへも不見無是非兩夫ハ件の濁衣犢鼻禪にかきて歸帆（きはん）す此よりさて越中犢鼻禪（えちゅうたつびせん）の紀原（きげん）と成る更に越中の國の製にあらす當時に至て下着（したぎ）縞絆（じょうばん）やうの物新に造裏（つくら）に離別（りべつ）の詠哥（えいか）など誌（し）て送る事とはなりぬ又回文書（わいもんしょ）とて總妓（そうぎ）白筆（びやくひつ）の和哥（わか）文章（ぶんしょう）などかゝしめ帖（てう）となしおくる又色紙（いろし）短冊（たんさく）などにも書（か）む其外折（そほ）などその尊卑（そんひ）によりて差有併進物（さありあひしんぶつ）に餘物を贈る夏昔（なつむかし）と差（さ）といへども時々（ときどき）の風不及（かぜにたらず）是非（しぜい）

商舖（しょうぶ）第七

大夫（だいつ）白粉（びやくふ）

瓢簞（ひょうたん）町通筋貳丁目京極左近製す大夫（だいつ）の名寄定紋（なよせぢょうもん）までを改刊行して粉匣（こなびら）中に納て賈（あきな）よつて昔よりこの名よび來

れり

虎屋油

瓢たん町東口大門左リ隅招牌（かどかんばん）に虎あり光家（みついえ）と名を誌（ま）粧器（まけり）一切賈（あき）筑紫（つくし）の方にまでも名を知られたり

阿萬膏藥

天和の比佐渡嶋町伏見屋藤左衛門といふ醫道（いだう）に通達（つうたつ）せし者有其比般實家の招（まね）に應じて病を療（れう）ぜり藤左衛門没後未亡人の秘方（ひはう）を傳へて疔（てう）を愈（い）す膏（かう）を練賣（ねり）り阿萬が時に發行（はつかう）する故に阿萬かうやくと呼ぶ遠邇（えん）買來者（かいかたものちや）日夜數（にちや）を志（し）らす

長四餅

佐渡島町大門口の傍（かたはら）に饅屋長四郎といふ者製して長四餅と呼ぶ天和の比より相續（さうぞく）して近き比までだんごや傳右

衛門とよび來りしに當代たへたり

信濃屋蕎麥麪

(簞) 瓢箪町三丁目東隅志なのや某とてそば切を業とす寶永正徳の比盛にして享保九年失火後斷絶す

女郎饅頭

(簞) 瓢箪橋 俗云新町橋 西結に小店を構賈世俗新町橋のよねまんぢうといふ寛文の比より賣來るといふ

阿澤菽乳

佐渡嶋町東より二丁目十字街西隅寶永年中八百屋佐兵衛といふ菽乳を能製する者有異名類の佐兵衛と呼んで鬚菽乳とも呼ぶ妻阿澤其業を繼で阿澤だうふと呼ぶ甚能製て夫に勝れる所故に澤が名を高くよべり其子嘉兵衛享保

の末没て其名も共に絶たり

三社擲錢

(詰) 新町橋西結なげざん三社と世俗呼ぶ修驗者有名は清勝院と號一錢を投て吉凶を占高名なるゆへ斯に附す

故事第八

局門幷

賤妓の店を局といふ変を考に一書に云く其戸に裏所の門幷往昔ハ官家の免許を得ざれば裏裏不叶彼家より出

門幟柿染の布尺四尺三幅縫分二所に柑子革の爪結有り中比末代不易の許命を得て自分裏 裏とは成りて法式を
 廢失して紺染となす此謂にして新造に出る也
 許命の妓の部に入るによつて染膠れる紺染の門幟に紅絹の爪結をつけ來れり又紋日など門幟をとどめて翠簾に
 代平日にても兼約の日柄此に同うす

惣判形

例年正月十八日古代より此例として瓢箪町會所に餘町不殘合集して判形を取なり木村屋又次郎は大庄屋なるに
 よつて當町え曲輪中不殘集り判形するなり此を惣判といふ往昔は判形終て樂舞などありて賑々敷々ともなりと

限太鼓

寛永の末までは亥上刻をもつて限太鼓うちたりしに夜にまし日に益の繁花自然と深更に移何となく亥下刻子上刻
 とは成りぬ古代は霜月朔日より極月晦日までハ晝見世ばかりにて夜見世なし 故に暮に限太鼓をうち大門娼家こ

とくく行燈をとり入門戸を關了す局には火鉢を置寒夜を凌しに顧老忍來歸去せん 亥忘失すよつて其人を追出せ
 との知らせに鉦を撃此時入込客不殘去これを限とす享保火後火の用心惡しとて炭火を禁じらる瓢箪町頭町なる
 により當町より限り太鼓撃初と其音を聞傳へて餘町追々限の剋限を告

上古絞出

元祿の比までは折々有絞出に付様々由緒有倡房主家に心得べき作法有由

觀進太鼓

瓢箪町三丁目十字街より西口大門の外立賣堀え出るまでは觀進太鼓あるひハ川原戲場の替太鼓などにも打止由
 緒あり竹本義太夫戲場の太鼓撃久兵衛といふもの壹人古格を守てうち止通るなり餘は舊例を知らずやはり撃通る
 なり

回

番

上古繁花の時誼誑口論なと有たるに棒を持出て其論を鎮止す舊例によつて今に至り酉戌亥子の四尅に回これを回り番といふ

番人 改人

瓢箪町東西大門并諸方大門平生妓雛妓門外に出る支を改に付肩輿にて往還する者門内に入るは差置とも出るに肩輿の垂を卷上通るこれ肩輿拵の作法とす他所の肩輿同之

佐渡屋町成瓢箪町支配地由來

町名景勝の篇に出たり佐渡屋忠兵衛所持已後立賣堀穴喰屋某求めて隠居屋鋪とす此時木村屋又次郎と親子間なれば支配を頼まれしより今に至りて瓢箪町支配地となる寛文の比とかや穴喰屋ハ立賣堀橋名に漸殘而已

瓢箪町通不立端午幟由來

故傳諸説有て未決姑置而不論

衣着 裳着

例年臘月下旬の比毎妓院にて行衰なり是ハ改旦妓に着する衣裳を着せ大夫より以下雛妓まで次列して其品を見る衰にして作法ハ家々の風有て其論不一同故を以てこゝに贅せず

雜話第九

朝鮮人來曲輪

寛文中崎陽より湊屋正方といへる人當所新堀町に移居

新堀町ハ今の阿波座下之町民屋某住居地正方の跡也

此正方が妻者中花清門某の

遺腹成として兩耳（たまたまき）に環（たまき）の孔有（あな）此故にや其比來朝（らいてう）の朝鮮人（てうせんじん）正方が宅（たく）に訪（とまひ）て正方が妻を拜（は）此時新京橋町（けいけうきやうちやう）今（いま）の阿波座（あはざ）上の町明石屋榮壽宅（あしひやえいじゆうたく）に入（い）て食事など仕（つか）しと其後朝鮮人來朝といへども正方が妻存生の間傾城町（けいけいちやう）の大門（かど）關（かん）了（れう）て異國（いこく）人の往來を禁ず正方が妻没後（しよくご）當所大門關了（かんれう）の沙汰なし

郭（廓）下方言

元文寛保の比まで（こ）古風（こふう）遺（い）て茨木屋（いばきや）をどうじ扇屋（せん）をせん風吉田屋（ふうきちだん）を兼好京屋（けんかうきやう）をみやこ住吉屋（ぢきや）を明神大和屋（めいじんたいわ）を和州山口屋（わしゅうやまぐち）をさんこうなど、よび用ひしに今は家名の頭字（かづな）と主人（しゆじん）の頭字（かづな）と取合（と）て呼（よ）やうになれり當所（たうじやう）の故風（こふう）にて顧老（こらう）をつとめる女（に）を上の女（かみ）といひ勝手回（はたら）を勤（た）者（ら）を下（した）の女（に）といふ近年（きんねん）町遊女（ちやうゆうにや）の場所より下女（したにや）ども奉公（ほうこう）に入込（い）學（まな）とは無れども顧老（こらう）の方（かた）よりも下女（したにや）を中居（なかつま）と呼ぶやうに成りて古語（こご）を失類（しつるい）牧々（まけまけ）變易（へんぎ）するといへども繁（ま）によつて暫洩（しば）し侍（ま）る

往昔雪踏替薄臺（むかしゆきふみか）由來附二齒下駄（ゆらいふたつは）

妓女（か）の履（はき）も昔（むかし）は雪踏草履（ゆきふみくさぞうり）などにて有（あ）し（を）元錄（げんろく）の頃（ころ）茨木屋某所（いばきや）由有（ゆ）りて薄臺（うすだ）今（いま）のべつたりと言（い）の草履下駄（くさぞうり）に代（か）又新造（また）など長（なが）の高（たか）からんやうにとて二齒（ふたは）の下駄（した）を踏（ふ）しむ近頃（きんころ）は異體（い）の仕出（し）下駄（した）發行（は）して年數（ねんすう）の多少（た）によらず身（み）の高（たか）低（ひ）の差別（さ）なく二齒下駄（ふたは）とは成りぬ

傾城町屏障

元錄（げんろく）年中（ねんちゆう）新京橋町京屋某收藏（けいけうきや）の屏障（かたし）一邊有（あ）其比江州滋賀（けいしゅう）の郡三井寺（ごん）より求め來りまに不讓（ふ）即（す）一邊は三井寺（さん）に有（あ）て傾城町（けいけいちやう）の屏障（かたし）と呼ぶ由名譽（よし）なるゆへにこゝに載（の）す

綿屋六右衛門

瓢箪（ひょうたん）町西口大門（ちやう）少々東南（しやうしやう）がわ綿（わた）を打業（うち）をする綿屋六右衛門（わたや）といふもの有（あ）何成事（なに）にや六右衛門（むさ）とよんで人知（ひと）らず右衛門六（むさ）といひて通稱（とうしやう）とす

大内 蕪

佐渡嶋町二丁目北横町蕪屋源七といふ者瓢箪町貳丁目街頭小店を構匂ひ入りの蕪を賣元來葉色好金線縷の如し世人大内たばこと呼び世に發行す大坂中大内蕪の權輿なり享保の末元文の初まで當所に住せしに諸店大内蕪賣るやうに成るゆへにや當所を退て今の住所不詳

夕霧伊左衛門事實

夕霧に附會せし藤屋伊左衛門といへる人の戲場の劇文に書て實に人なし劇文哉又吉田屋木左衛門方にて阿波の願老に兩説有依て畧之川原伎にせしハ伊左衛門に初代坂田藤十郎成りし由

椀久事實

椀久といふ別の人有戲場に作りしわん久は瓢たん加志久を附會し作たるものなり此ひやうたんかしくといふは或

助六事實

般實家の果にて散髪にて法衣を片膚脫懸杖の先にひやうたんを結び付門々に立て食を乞下女通れといふより何通れとは君といひつゝ、内に入輕口せりふなどいひて渡世とす除夜の豆うちせしは玉屋庄七とて茨木や長左衛門 後名 幸齋 方の願老なり附會せしは戲場作者の發明なり椀久と別人なり

名氏不詳 觀場の劇文なるべし

備前屋清川事實

佐渡嶋町備前屋某抱清川は鷹金文七より名發す實は清瀧とて卑品の妓なり名を作り替て川原伎に用ゆ清瀧ハ元祿年中の妓なり

京屋阿琴事實

元祿比佐渡嶋町京屋某抱於琴といへる天職有遁世して浮屠に歸依す其比富家より齋非時に招きしに膳下けて於琴

が食せし箸を、試に箸の先八歩より以上不濕時人育による支を志る

傾城買

夕霧を川原伎に取組坂田藤十郎伊左衛門に成りて紫縮緬のほうろく頭巾を着たり川原伎に傾城買の役をつとむるものほうろく頭巾を着權輿とす

捨小舟

元文の比までへ引舟雛妓上女大門口まで顧老を迎ひに出る事を平日とすまた機嫌悪敷顧老陽氣に往をつける支有此支近代絶たり或宗匠の口ずさみに
きやくつけに虎屋の店の捨小舟

格子見世

大夫の通號を格子と言ひ小天神已下見世といふなり

丸屋小富士支實

實永正徳の比丸屋小富士といふ大夫あり道中に出んと立出しに馴猫小ふじが衣裳の裾に嚙付不離小富士ハ悶絶し志ばらく有て生氣付て直に狂氣と成終は淺増して非人の形勢と成る料紙硯など出して和哥艶翰を書しむるに尋常に不變意遣に顧老より贈答の和哥連歌の附合など催して還て興不興に成りてきやくも三舎を避程の支なり狂氣にても吾好道には斯も精神止るにや

丹波屋井筒語

丹波屋井筒 天和貞享の比の妓 がいひし一月揚結の客ハかならず一年立ぬよし今に妙語とす

繪屋吾妻好奇

繪やあづま享保元文は異風を好髪ハ嶋田時畫の解櫛紙子仕立の衣裝雛妓に書籍持せり近代の異妓なりとす

大坂屋淺茅生語

大坂や淺ぢふ元文が言ひし至盛を好妓ハ自ら客に惚て逢ふべしと甚妙とす

又次郎石碑

下寺町淨國寺に有

蕪姬寄進唐戸附石碑

右淨國寺本堂の唐戸ハ蕪姬の寄進にて新屋清春と誌す

拾遺蛙

沼

寛文六年鎌田氏日記云元和初比又次郎許命有りて郭地見分の砌池中より大なる蛙出て又次郎ニ先達て案内とす其跡に文字残せり又次郎與風見當判けるに大郭造立の文字なり依此地に造立せしめたると右日記幸乍得落掌遅きを恨みて今爰に附す指處ハ佐渡屋町より瓢箪小路の邊なり

浪花青樓志 畢

みまぼく

解 題

一 『みをつくし』は、寶曆七年(我が二四一七西曆一七五七)八月の開板。天地四寸六分。左右六寸八分。原本八十丁。新町遊廓の町小名の由來、名所古跡、年中行事、その外、花街の故實、古例等まで書いたもので、都島原のことを書いた『一目千軒』よりは、後れて世に出たものでありますが、新町遊廓を書いた最初の單行本であらうと思ひます。

一 著者は『李秀』と巻頭にその號を署してゐますが、その傳記は不明です。どうかして知りたいものです。

一 寛政板の『みをつくし』を見ますと、その奥付に、寶曆七丑年(我が二四一七西曆一七五七)御免。明和六丑年(我が二四二九西曆一七六九)再板。天明三卯年(我が二四四三西曆一七八三)再板。寛政十年年(我が二四五八西曆一七九八)再板。と書かれてゐます。これで見ると、寶曆から寛政に至る四十餘年間に四たび刊行され、それがその度毎に増補訂正されたものと考へられます。

一 本叢書刊行會は、今次この『風俗篇』に『みをつくし』を加ふるについて、寶曆の初板は南木芳太郎氏の愛藏本。寛政十年板は三宅吉之助氏の愛藏本を底本とし、寶曆板に附加した點を寛政

序
 柳也難波と云ふは
 云比と云ふは花朝と云ふ
 其中新町といふは花柳
 あつてまゝをみり野のまゝ
 をつとみ。襦袢の綿と
 まぶさゝかゝる松の葉は
 あるは柳の白ひえを
 云は柳のまゝは一まゝ
 親あつてはと云ふはと云ふ

素波の
 水は
 今流るは

月
 又ふかしの月
 月にかゝるぬきのか
 うは深く深き事か
 うとんと深き事か
 号
 中秋
 李秀

何の
 何の
 何の

板で補ひました。本冊『みをつくし』のうち、『増補の分』以下が、即ち夫れです。 六

一 寶曆の初板には、板元は江戸鱗形屋孫兵衛、京八文字屋八左衛門とありますが、寛政板のは東都須原屋茂兵衛、京都野田藤八、大阪富田屋七兵衛、河内屋嘉七、藤屋徳兵衛と書かれてゐます。

凡例

- 一 大坂新町惣名寄の事ハ元祿年中に色三味線また色甲案内といへる書に顯し其後寶永年中に懷洗濯と號し改正しける其以後 改 忘しに此四五年類に思ひ立 新 改正して 委 撰今新町といへる已前の方角より 考 出し町小名の由來迄記し廓中名所古跡年中行事其外花街古實古例等まで 考 合 詳にす
- 一 和漢柳陌の通號稱號などの事ハ都寫原一目千軒といへる書に 委 記し置けれバ爰に畧し勿論和漢引用書目錄ハ書のせずこれハ本文の連面にて知るへし
- 一 諸國に花柳多しといへども當津の揚屋に勝りたるいなし結構廣さ中々筆にも書つくしがたけれども遠國の諸客にちらしめんが爲この奥に百分一の繪圖を顯し侍る
- 一 昔より當所に名高き大夫多しといへどもなかなづく諸國へ名を發したる分ハ大夫の品といへる奥へ名をかきおせ其因縁をくはしく出たとへバ夕霧あづまのたぐひなりなを故實古例其外此書にもれたる事ハ追々考出し増補をくわゆるもの也

大阪新町
細見之圖

澤

標品目

廓紀原

新町開基并町小名因縁

柳陌格式

新町橋年曆

東西大門濫觴

土地方角考并門々開發

花街名所古跡

蕪鳴吉例

越中橋最初

櫻屋敷春興附櫻井清冷 松屋敷

枝折 觀音裏隨緣

道者横町杓子掛來由 高瀬庭佳境

山家敷勝景 螢澤水嬉

花柳年中行夏

揚屋無雙

同座敷畫圖

茶屋員數

里詞篇

太夫品并一夜妻辨

遊女解一附越中總

角 夕霧并引舟初發

吾妻 松山

傘印

長持運送并調度通用

仕着行粧并二日着

三日着

身請門出

天神位階并小天神

店天神

鹿子位部類附月影沙相當

牽頭女郎情并藝子風俗

籬節一曲

局暖簾差別

和氣稱號

禿由緒

呼迎女古實

勸進芝居太鼓不打由縁

夜見世繁花

限太鼓作法

價諸分

紋日定目

方角大畧圖

惣名寄人別

同定紋

曲輪名物

以上

大阪新町
細見之圖

澤

標

廓

紀

原

當津の柳陌へ往昔天正慶長の比より諸所に遊女を抱渡世のもの有しを寛永年中に今の土地を下しおかれ諸所の遊女を一所にあつめ一廓の内に軒をならべさせ其比木村亦次良といへる浪人者に右廓の庄屋年寄を被爲 仰付永くけいせい町と成今寶曆七年までをよそ百三十年餘になる也

新町開基并町小名因縁

前にいふごとく新に町となりしより世人新町とよぶ惣名なり又當津にてハ中といふ

新町のあかしのふねか汐干潟 香稻庵竿秋

澤 標

瓢箪町 但南組

通り筋なり其已前道頓ほりにひやうたん町とて有所の一町元和の比此ところへ移せり又古老の曰元來伏見浪人に木村又次郎といへる浪人ありし由此人元木村氏の御乳の子にて故ありて豊臣家御馬印の瓢箪を傳來して所持す故に小名と成たるよし元和寛永の比木村をかたどり木村屋又次郎と名乗廓七町の惣支配して女關にハ武器など鋳りおきしに二代目又次郎に相成り天和年中に役義に障りありて庄屋年寄の役斷絶すそれまでハ新町通すじを又次郎町とよびけれども其後より改めて瓢箪町といひならへせりこれ新町橋を越て通りすじ也

其南ヲ 佐渡嶋町 但南組

天正慶長の比より上博勢に有之佐渡島與三兵衛といふ者相續の地なりしに寛永の比今の地に移り一廓の内に與三兵衛開發の縁によりて佐渡島町とよぶ此西の一町を俗呼で越後町といふ此事ハ佐渡越後と並の國の縁をとりて佐渡島町の次を越後町とよぶ也

其南ヲ 吉原町 但北組 片原町也

北天満郷に吉原といへるところありそれより移す故名づくといふ寛永年中に今の所にうつる又通筋の北を阿波座

といふ

上ミヲ 新京橋町 但北組

下モヲ 新堀町 同斷

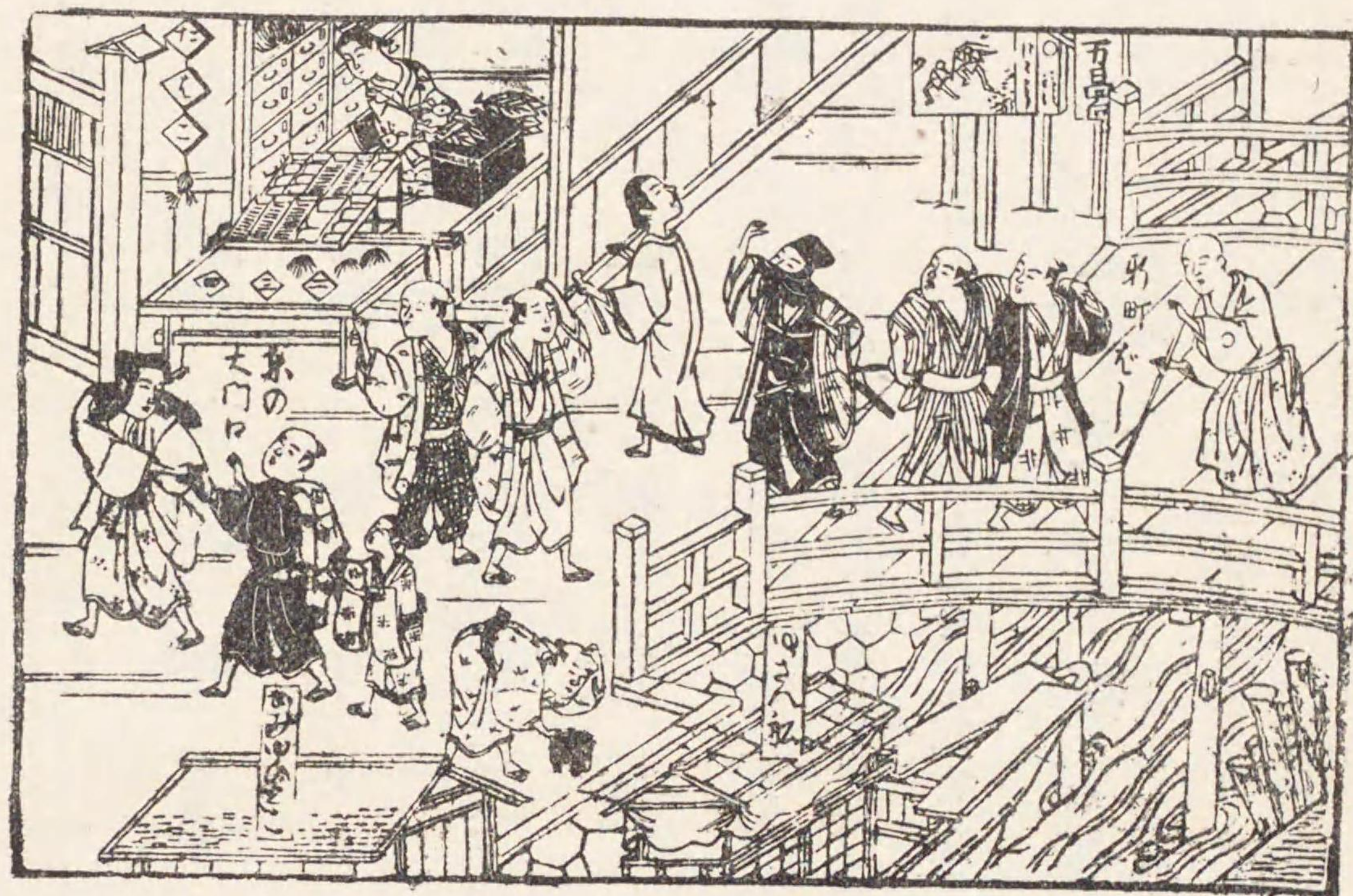
これいにしへハ阿波座にありしを慶長年中に此ところにつつさるなり

其西ヲ 九軒町 但南組

此所揚屋ばかり居る也此廓始りしとき揚屋九軒を取立たる町ゆへかくのごとくよぶ也又揚屋町ともいふ根生の揚屋九軒町に今六軒あり又新堀町に三軒佐渡島町に三軒合十二軒有又其外にもあまた揚屋有くはしくハ揚屋の部に出たり尤此町年寄ハ有ながらけいせい屋年寄とは格別にして諸事五人の支配を受るなり

其西 佐渡屋町 但南組

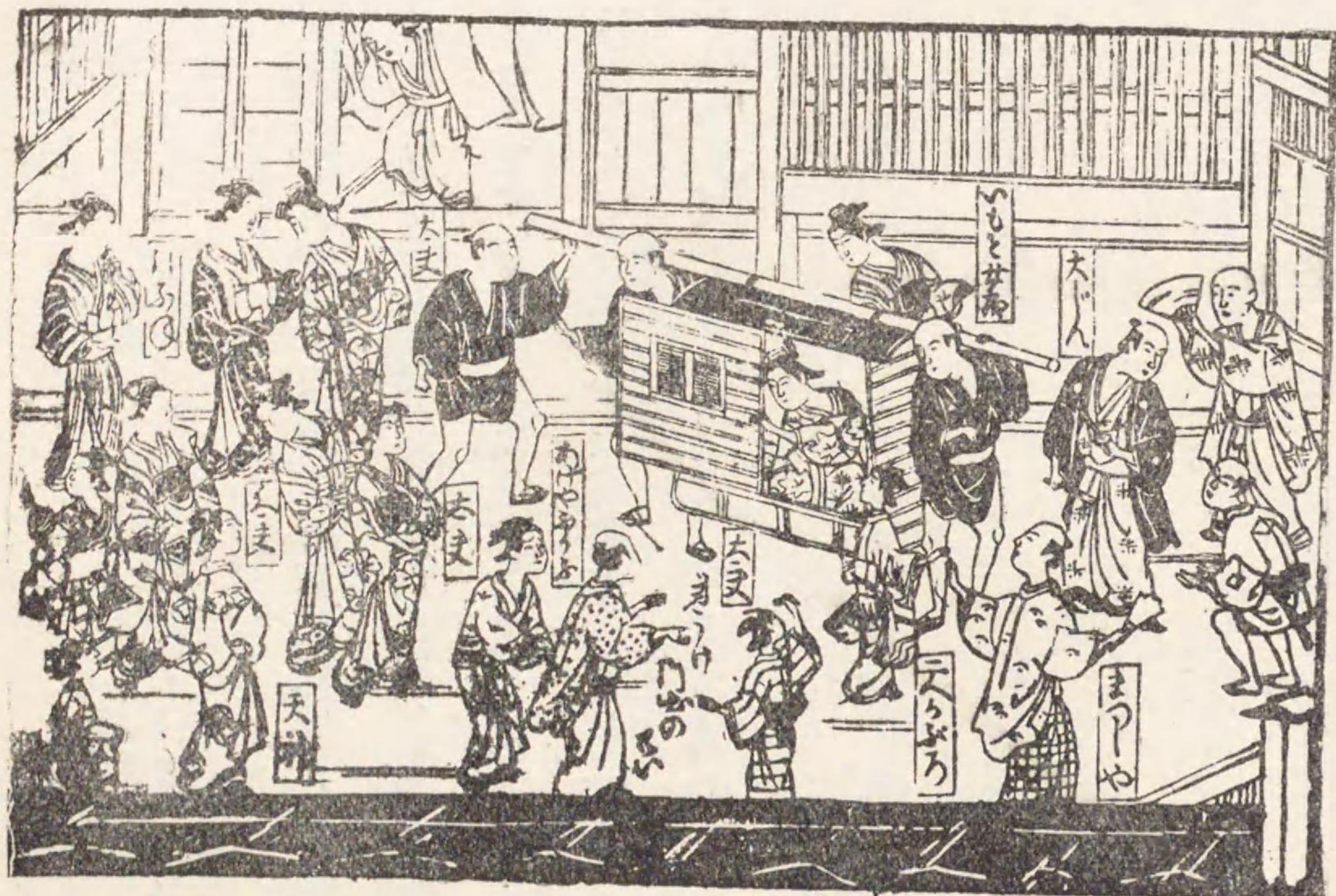
往古高麗橋すじの住人に佐渡屋忠兵衛といへる人有此廓開發のとき打あまりの地を故あつて拜領し一町一家敷となせりよつて佐渡屋町と云其後忠兵衛より人手に賣渡し漸佐渡屋といへる名目小名而已に残れり但此町年寄組



ともなし代々瓢箪町年寄見届支配す佐渡屋忠兵衛といへる人其後穴喰屋浄甫松屋宗甫といへる二人へ二ツに割のづられ又松屋より穴喰屋へ一所にゆづり今又一町一屋敷也志かれども一端二ツにわかれし故今二軒役也穴喰屋ハ四代つゞき夫より平野屋四郎兵衛といへる人買得して二代つゞき其後持主段々替り此屋しき卅四年己前享保九辰年大坂大火にて類焼して四十五軒の内茶屋商賣のもの借宅して居たりし所類焼後今に荒地と成有此廓四筋町なれども通筋の外七町ニわかりあり

○柳陌格式

惣體廓の内何ごとによらず往古木村屋又次郎庄屋惣支配の格を以今に五町の年寄下知す



○新町橋年曆

西横堀順慶町筋にかゝる橋なり往古ハ廓一方口にて有し其時分にハ此橋なし東西の門御赦免の後寛文十二子年にはじめてかゝるこれ廓繁昌の爲にねがひしゆへ廓中として懸る橋なれば新町ばしといふ則繪にあらはす今寶曆七年迄八十六年に成なり

○東西大門濫觴

東西大門口にむかしハ番所をたて置けるこれハ御用之節門々をかため入込たるものをよめ出しにする事有且又喧嘩口論あるひハ狼藉ものなどを召捕る爲の番所常ハ女郎禿出入の改所也承應年中此番所へつく棒さすまたおつてい等の用心道具御赦免ありしに享保九辰年

出火にて類焼し其後へ見えずなりにき

○土地方角考

東へ西横堀助右衛門町孫左衛門町藤右衛門町を限り西へ立賣堀南裏町南へ長堀北側平右衛門町宇和島町富田屋町かぎり北へ立賣堀南側助右衛門町南裏町を限り東西の大口口に各番所有むかし西一方口にてありしに明暦三酉年に東の大口口御赦免にてそれより東西の大口といふ其後寛文八申年に用心門五ヶ所御赦免なれども常へあけずによりしに享保九辰年に大坂類焼後吉原町の門をひらき又寶曆四戌年新京橋町北門をひらき同年佐渡島町東の門をひらきし也これによつて今へ門五ヶ所あり各番所有

○花街名所古跡

▲蕪鼻之吉例

往古此新町開發の比より通すじに新屋といふ女郎屋あり此あたらしやの末に清春尼といへる人世渡り貧して或年の暮に雑煎の餅さへ調へかねて蕪を餅のかはりに用ひ元朝の祝儀おさめけり其年より次第に繁昌して後にハ大分限者と成其例にまかせ毎年雑煎にかぶらを入れ祝儀しけるにより世人蕪鼻といふ異名せり今ハ此家絶てなし

▲越中橋最初

寛文年中新町庄屋年寄をつとめ居たりし木村屋又次郎抱に越中といへる全盛の女郎毎日揚屋入道中の刻限にハ見物の老若男女貴賤くんぞゆ大道に充滿し往來急にまがたく則又次郎屋敷の裏より九軒町へ水道にはしを懸急成ときハ此橋より揚屋入いたせし故これを號て世人越中橋と云古跡也今ハなし

寶治百首 あはれ我戀に心をかけはしのさていつまでかたのみわたらん

爲繼朝臣

▲櫻家敷春興并櫻井清冷

元祿年中まで通り筋に櫻屋敷松屋敷とて有櫻屋しきといふハ彼蕪鼻と異名しけるあたらし屋清春家敷跡に大木の櫻あまた有し九軒町あけ屋井筒屋太良衛門是を買得し持傳へけり毎年春毎に櫻咲比ハ井筒屋の櫻やしきとて花見大臣くんぞゆして甚賑はしき正徳元卯年四月八日類焼して今ハなし此庭に櫻井戸とて至て清水有其家屋敷ハ通筋にあり

家集 つねよりも花の木すへのひまなきハたちやならへる峯のちら雲

源三位頼政

▲松屋敷枝折

又松屋敷といへる有これも通り筋櫻やしきのむかひ南側に吉野屋といふ女良屋有其裏に大木の松有これも見付に成ほどの樹なりしゆへ南北の名物なりこれも正徳元卯年の出火に類焼して松さくらとも今ハなし

玉葉集

松蔭のうつれる宿の池なれば水のみとりも千代ハすむへき 俊頼朝臣

▲観音裏隨縁

萬治寛文の比通筋西大門口南側門際の屋敷に薬師堂大寶といへる三寶院派の山伏あり二間四面の堂を建守り居たり延寶の比彼薬師堂を白髪町くはんおんの地へ移す彼くはんおんも大寶所持のよし不分明右門口南側の家敷を今所の人々呼んでくはんをん裏と云

▲道者横町杓子掛來由

道者横町といふハ瓢箪町東の門より一丁目の南へ入横町也春道者多く此横町和氣取の見せ付はんおやうする故其名有又杓子掛といふは東の門へ入直に北へゆき新京橋町のひがし横町を云子細ハ和氣女郎の見せ付のむかひ水道

の前に今に至つても板の塀有是はしりさきの水はじき板に似たりとて俗に杓子掛と異名せり

▲高瀬庭佳境

吉原町の東に高瀬屋といへる茶屋の庭泉水築山いたつて絶景なりけるより諸客此所に来らざるといふ事なし名物の庭にてありしに享保年中に絶て今ハなし

▲山家敷勝景

吉原町の西の端に茨木屋幸齋といへる女郎屋の長ありし其住ける庭泉水築山樹木飛石燈籠數寄屋かこひ座敷ハ申におよばず善つくし美つくし花やかなる事どもなりしに享保三成年御咎にあひ今ハなし

延文御百首 世のうさにかへてハなとかすまさらいかなる山のあらしなりとも 爲道女

▲螢澤水嬉

五六十一年前より佐渡島町裏水道の際へ家々の庭艸を掃すて掃ためけるに右の腐艸化して螢と成うらくへ散亂して宇治瀬田の由縁をおもひ出されはじめハ廊中の人々計其比に出見物たりけるが次第々々螢おびたしく

飛かふにより大臣達もいでや見侍らんと揚屋より毛氈を取寄竹床几などかけ爰に酒宴など催したてたるとぞ水邊にてハ有闇夜の一興いふばかりなしはじめハ水邊の塵塚にて中々詠になるものにてハなかりしに今ハ一つの名所となりたり是といふも此所繁昌の基なりとおほゆ

○花柳年中行夏

正月 此里の賑ひ筆にもをよびがたし志かし大道に門松をたつる事なしこれハ御用地故通すじ町幅せまき故一統に遠慮してかくのごとし横町をはじめ隣町ハかまはず瓢箪町すじばかり故實ありとぞ

二月 初午二ノ午廿二日彼岸中此里の紋日にて賑ひしき事也

三月 毎年春三月櫻さかりの比より暮方より初夜過迄通筋辻々にてはなを賣事有櫻をはじめ山吹或ハ牡丹芍薬百合紫陽艸夏菊の時節まで賣是はなハだ賑はしく一興也

花咲て死とむないか病かな 十萬堂來山

四月 八日花摘にぎはしき也

五月 門松に准じて通筋にのほりを立赤男子有家々ハ居宅のうらに立る也これも町幅せまく御用地のさまたけにならざる遠慮也横町をはじめ隣町ハかまはずかくハあれとも紋日にて諸客入つどふ事賑々し

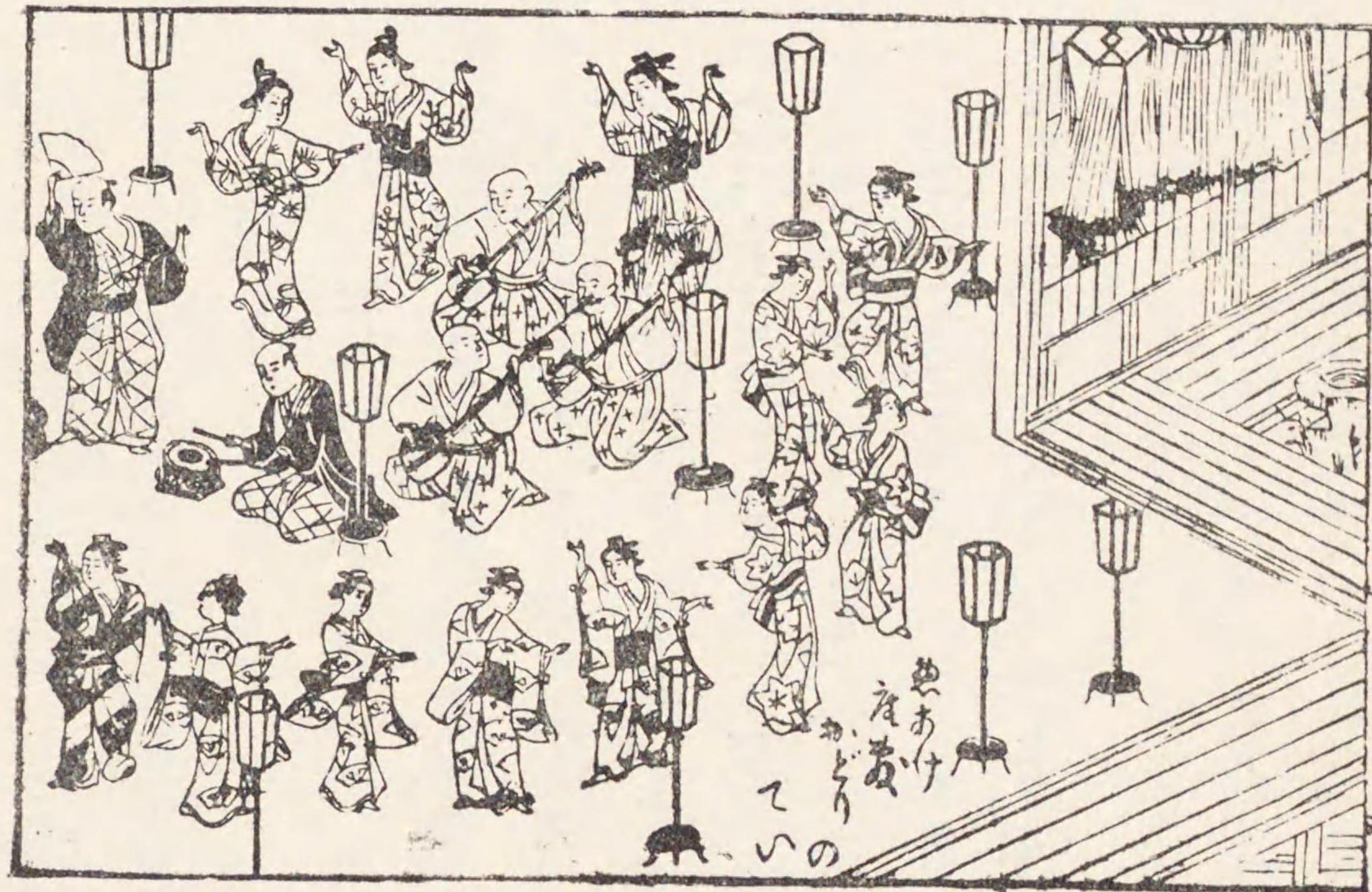
六月 當月中ハ諸所の御祓にて取置き此里の群集中にも當所の祭ハ仁徳天皇にて廿日廿一日兩日也ばくろ町にて殊の外の賑はひ諸人從横に充滿し廓中の大紋日なり年によりねり物など出てくんじゆおびたし

七月 七夕祭是くるわ中賑々し

けいせいの大勢つれやあまの川 烟舟亭移竹

例年十三日朝七ツ時より五ツ時まで聖靈會の青物市有東西の門内通筋の兩側軒下に店をはり商人出所のものハ勿論他所よりも買人來り群をなすことすまじ十四日より晦日まで大紋日なり同月太夫踊といへることあり新町太夫踊とてむかしより仕來り踊のふりも他所のと替りはなハだ風流なる事也これも例年有たるに定りたることなし年々のふりにて催す事也或ハ町々大道にて町踊の事もあり又先年佐渡寫町にて踊場をかまへ木戸を張り客一人に踊子一人宛揚させ其料にて踊入用をまかなひたる事も有此ときハ客がたの取沙汰よろしからざるゆへ中絶したりそのうち通筋にて寛保三亥年廓の内におどり場をかまへ女郎屋より踊子の世話いたし踊場雜用ハ揚屋茶屋よりいだし見物ハあけ屋茶屋よりならでハ見せず七月十五日より八朔までにて此趣方よろしく繁昌なりしがこれも又中絶す

又大寄といふ事あり八朔まで諸方賑々しけれど二日より秋のあはれを知る所を花やかなる大臣ありて揚屋座敷におるて廓中の隙なる女郎を殘らず揚切てあつめ座敷踊を催す事也今に至り大臣ありて大寄せの座敷おどり有此花

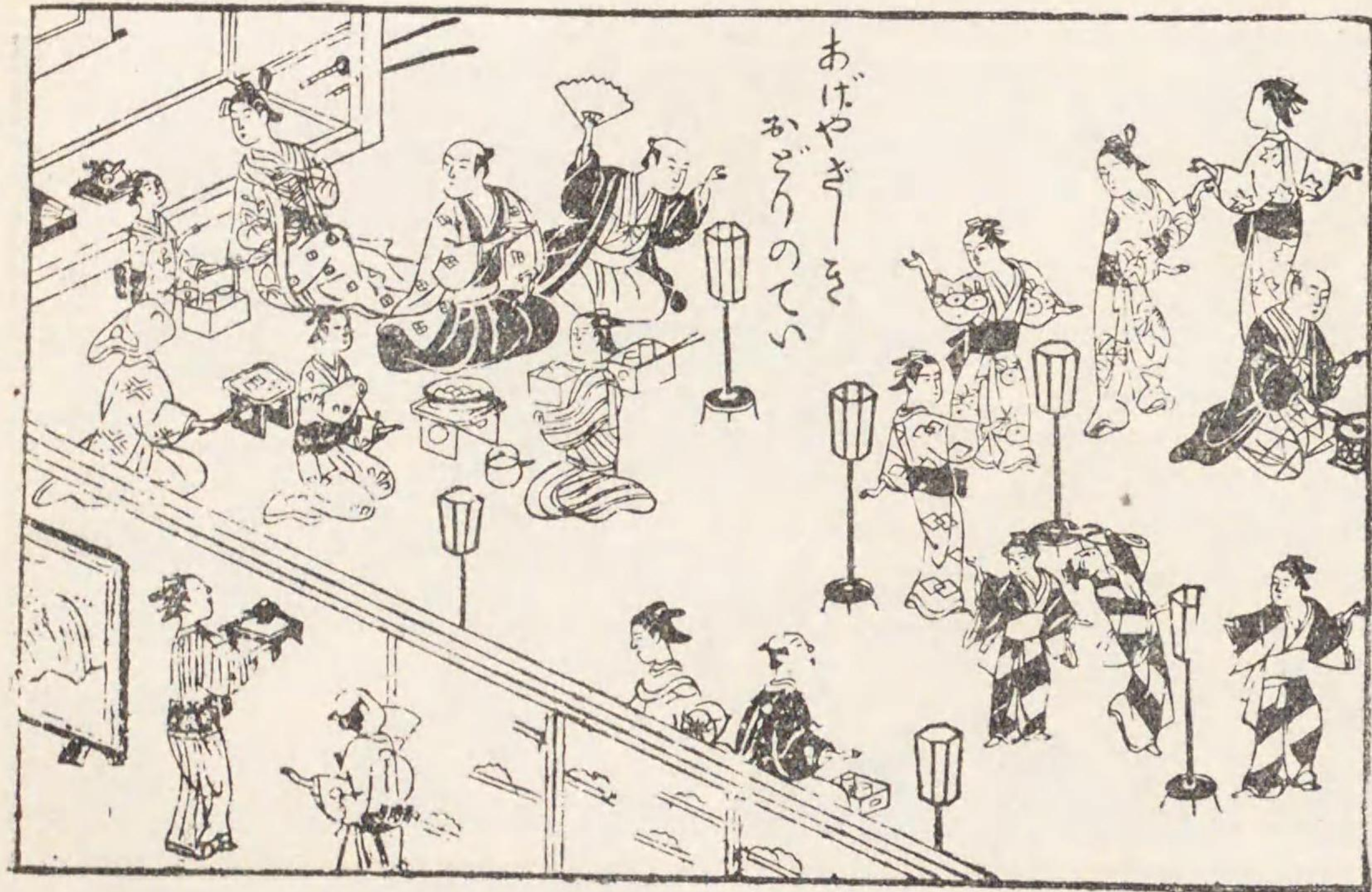


二〇
やかなる事筆にも及びがたし
又廿年已前盆中にハ廊中家々に燈籠を仕出し紙細工絹
細工などさま／＼手を盡し仕けれども此内風雅なるも
のありて餘りおもしろからざる仕出しものなりとて申
合てやみたり

八月 名月に女郎より客へもてなしとて杉折出
す事有花美を盡し或ハ御所車八景やかた舟などさまざ
まのおもひつきにて嶋臺にひとしき種々の造り物にて
つめものは蒸菓子又ハ酒さかなあるひハ茶箱に仕込み
て送るこれ最興ある事にて言葉に述べがたし

九月 後の月見八月の格式に同じ又諸所の祭あ
りて當月中ハ大紋日也六月の御祓と同日の事にてくハ
しくハ奥の紋日定につまびらか也

秋の暮男ハなかなぬものなれハ 推本才磨



十月 亥の子の祝ひ揚屋ハ甚祝ふにぎはしき
事也御影講十夜これ勿論也
十一月 此月紋日多しといへども取分家々の煤拂
これ紋日也
煤掃て寐た夜ハ女房めつらしや

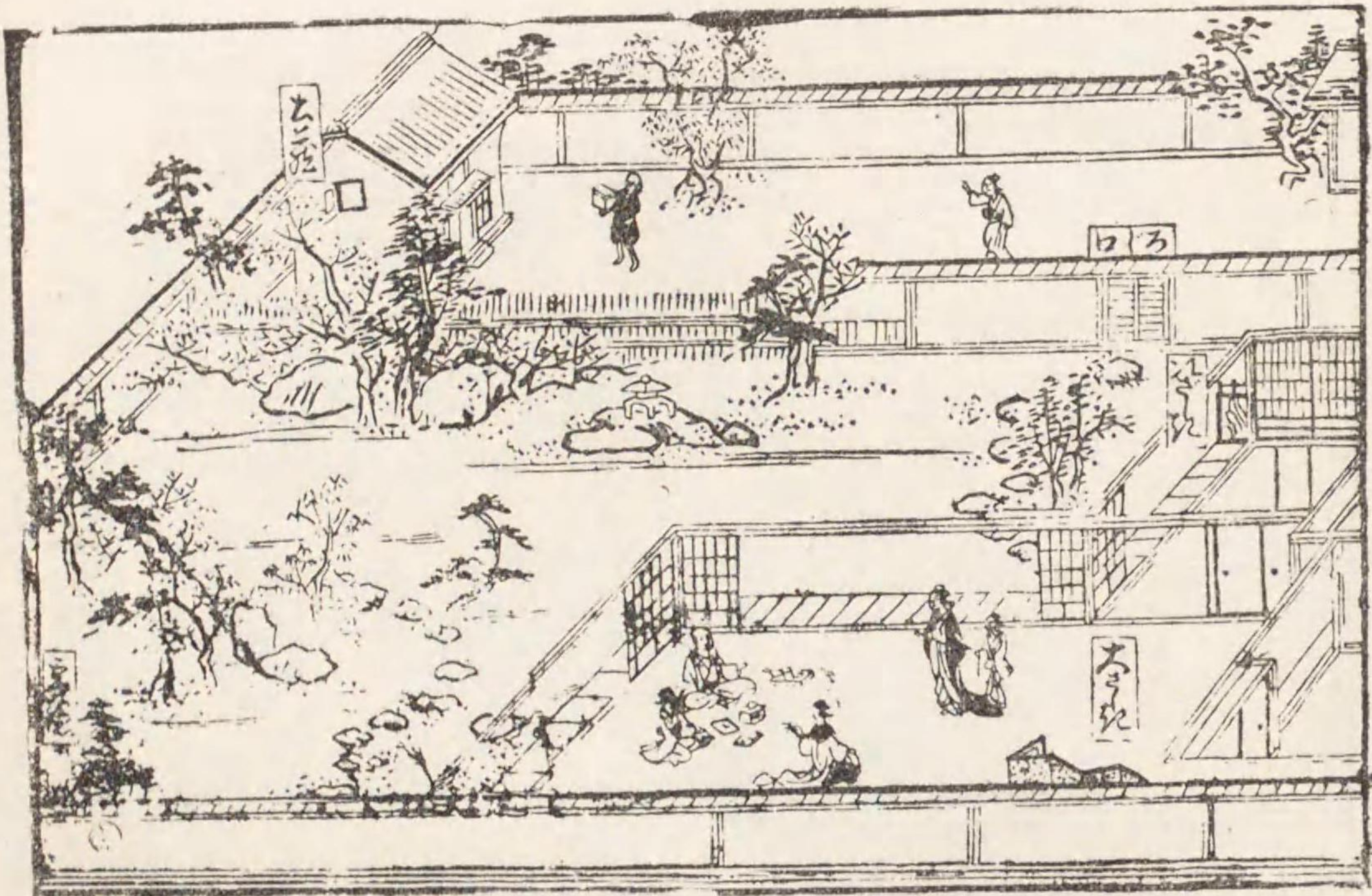
寶晋齋其角

十二月 事はじめ家々の餅つき節分これハ別して
大紋日にて廊中の大祝にて賑々しき事言に述べがたし其
餘の紋日ハ奥に日限詳也

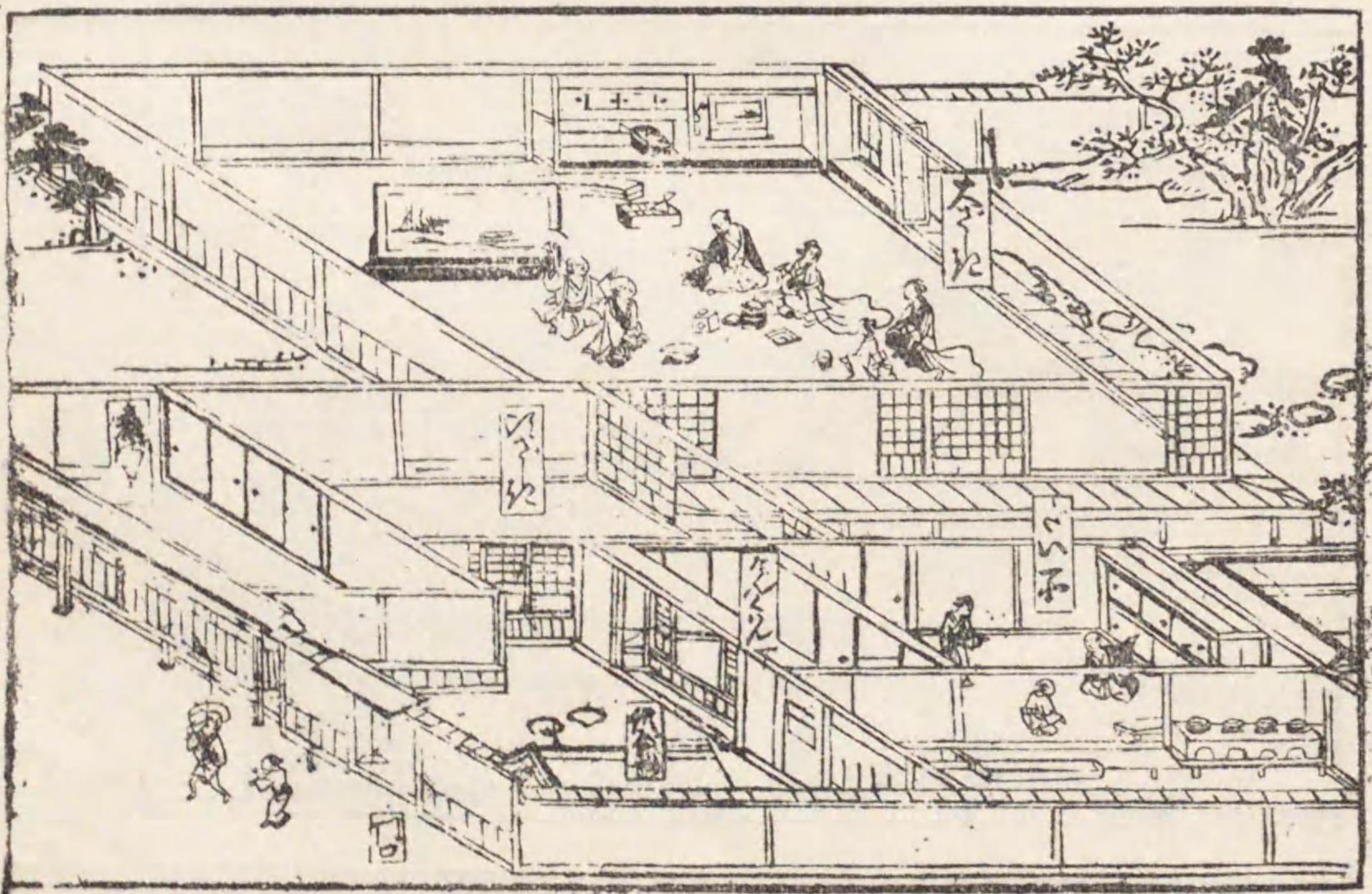
○揚屋無雙

諸國にくるわといへるもの多しといへども當津の廊至
て寛活なり殊に此地の揚屋に勝りたるハなしされバ
むかしの大臣達の金言に京嶋原の女郎に江戸吉原の張

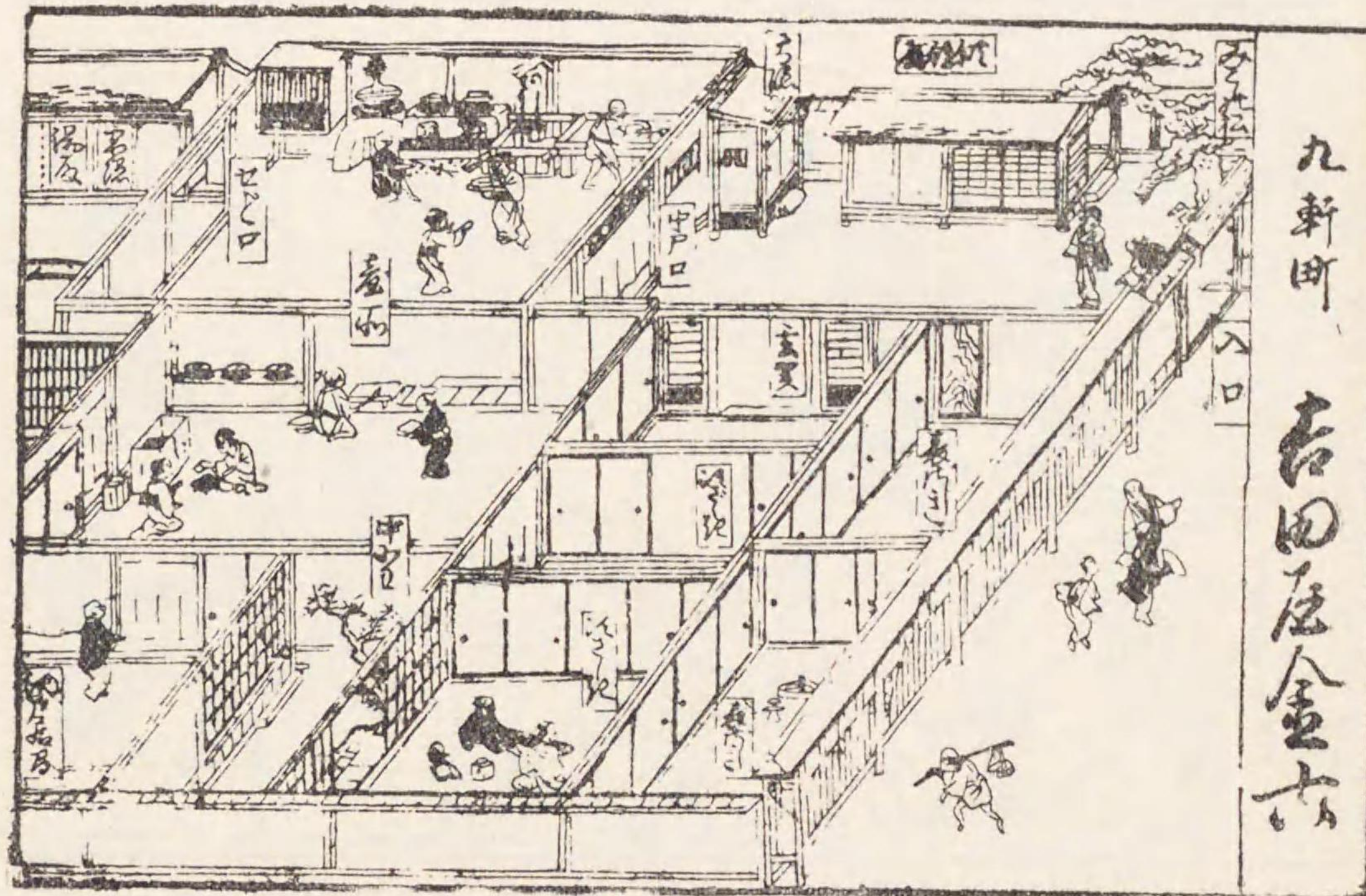
香
標



三

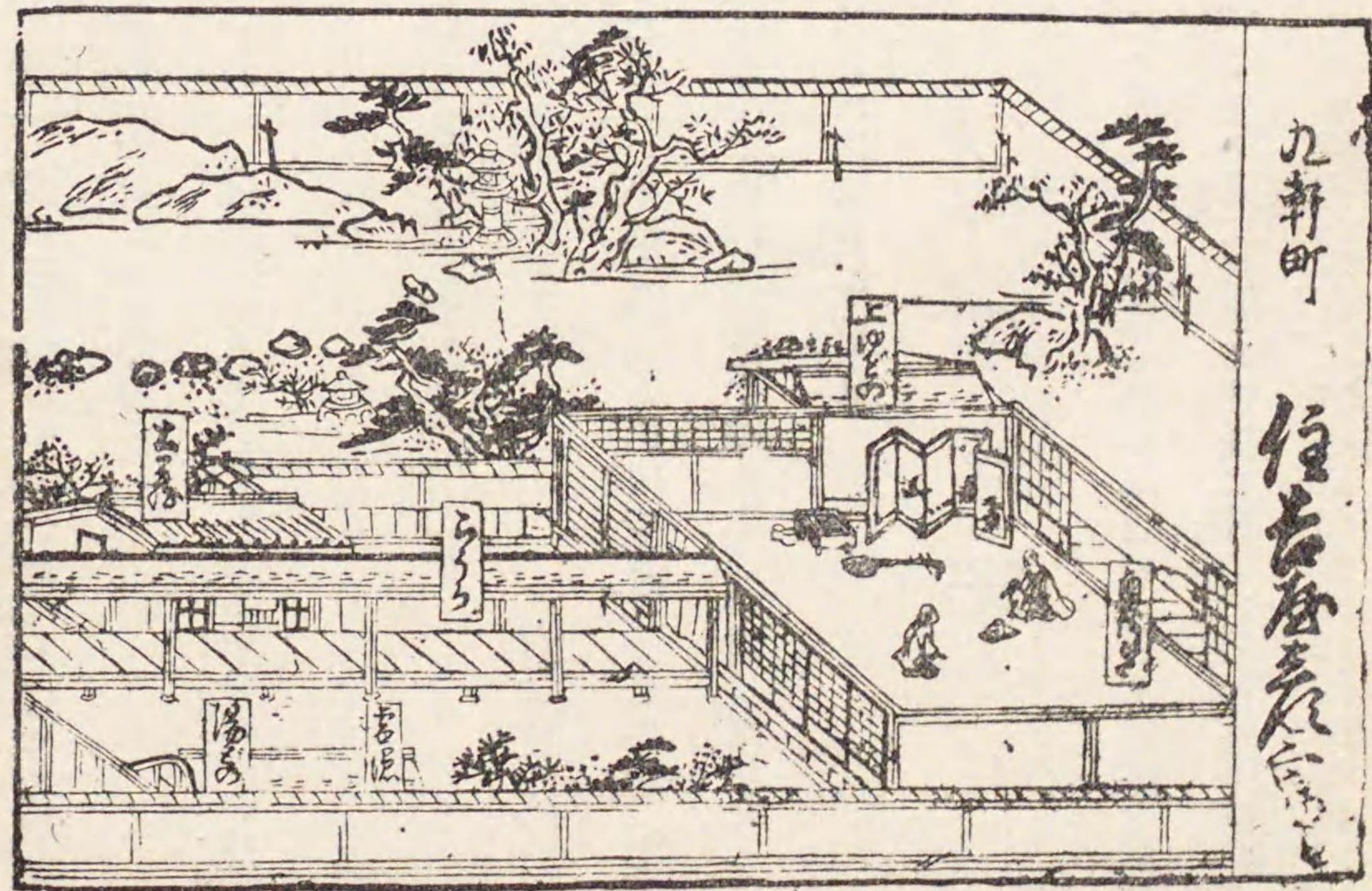


香
標



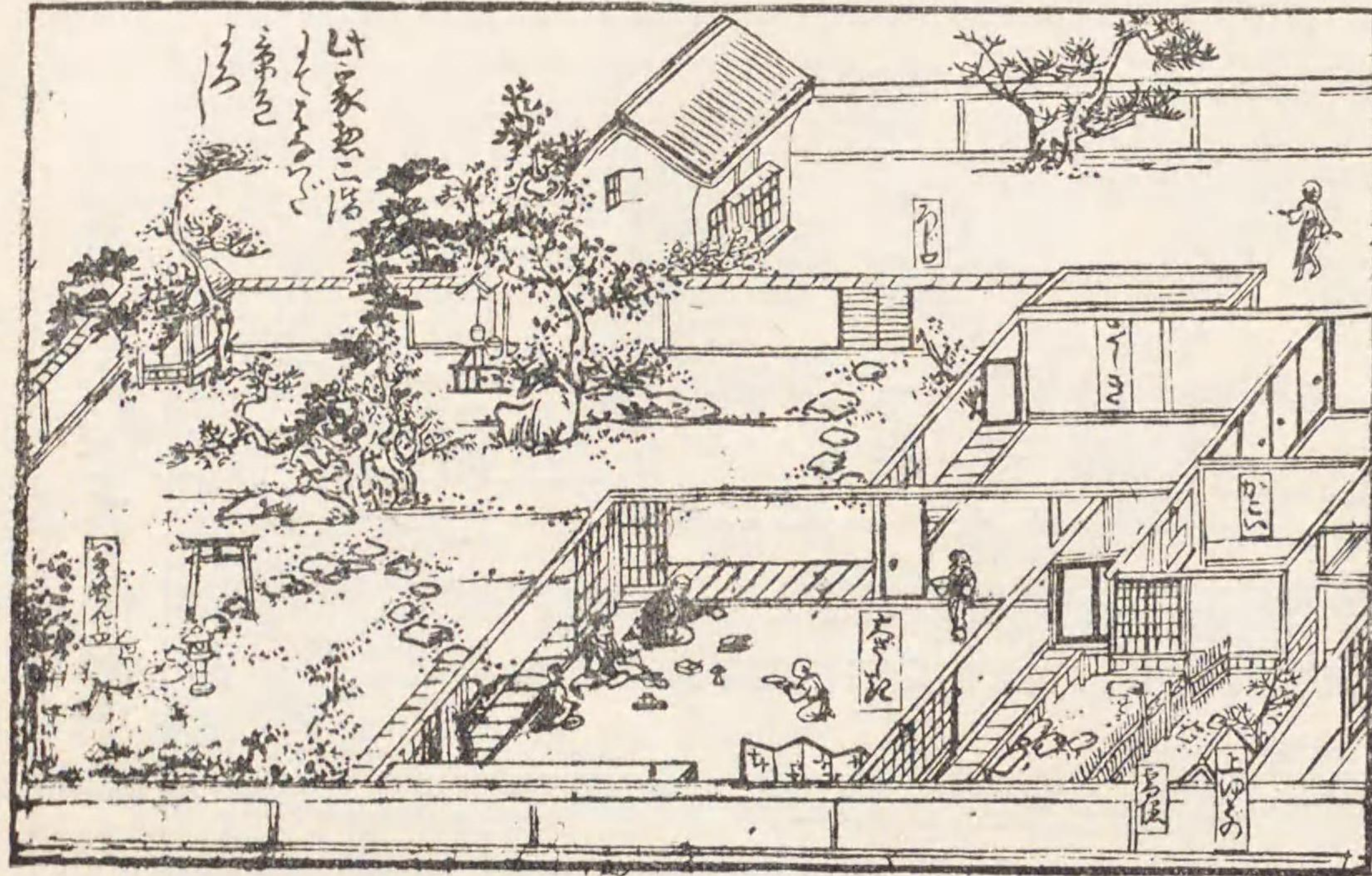
九新町
吉田屋金六

三

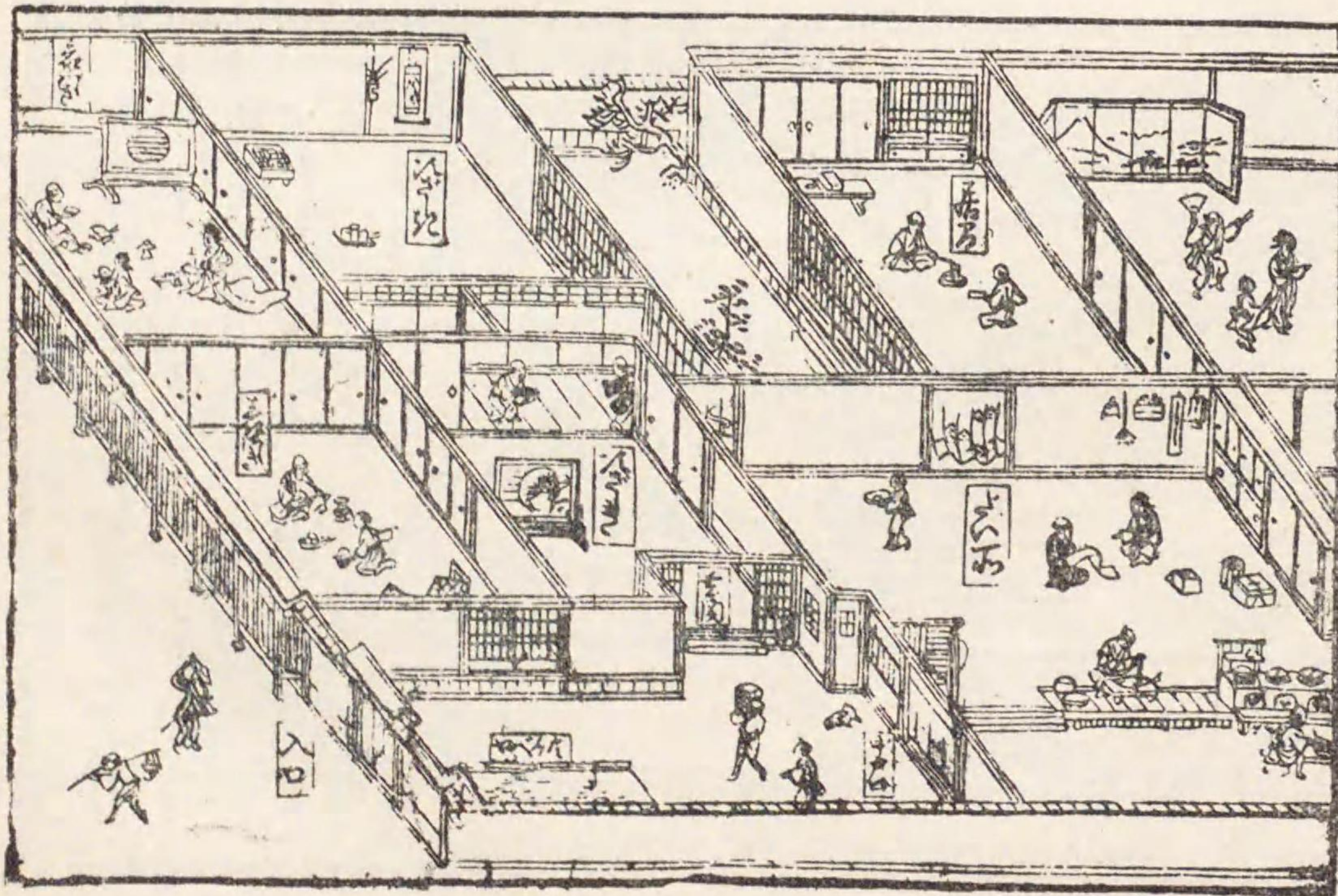


九新町
任吉屋金六

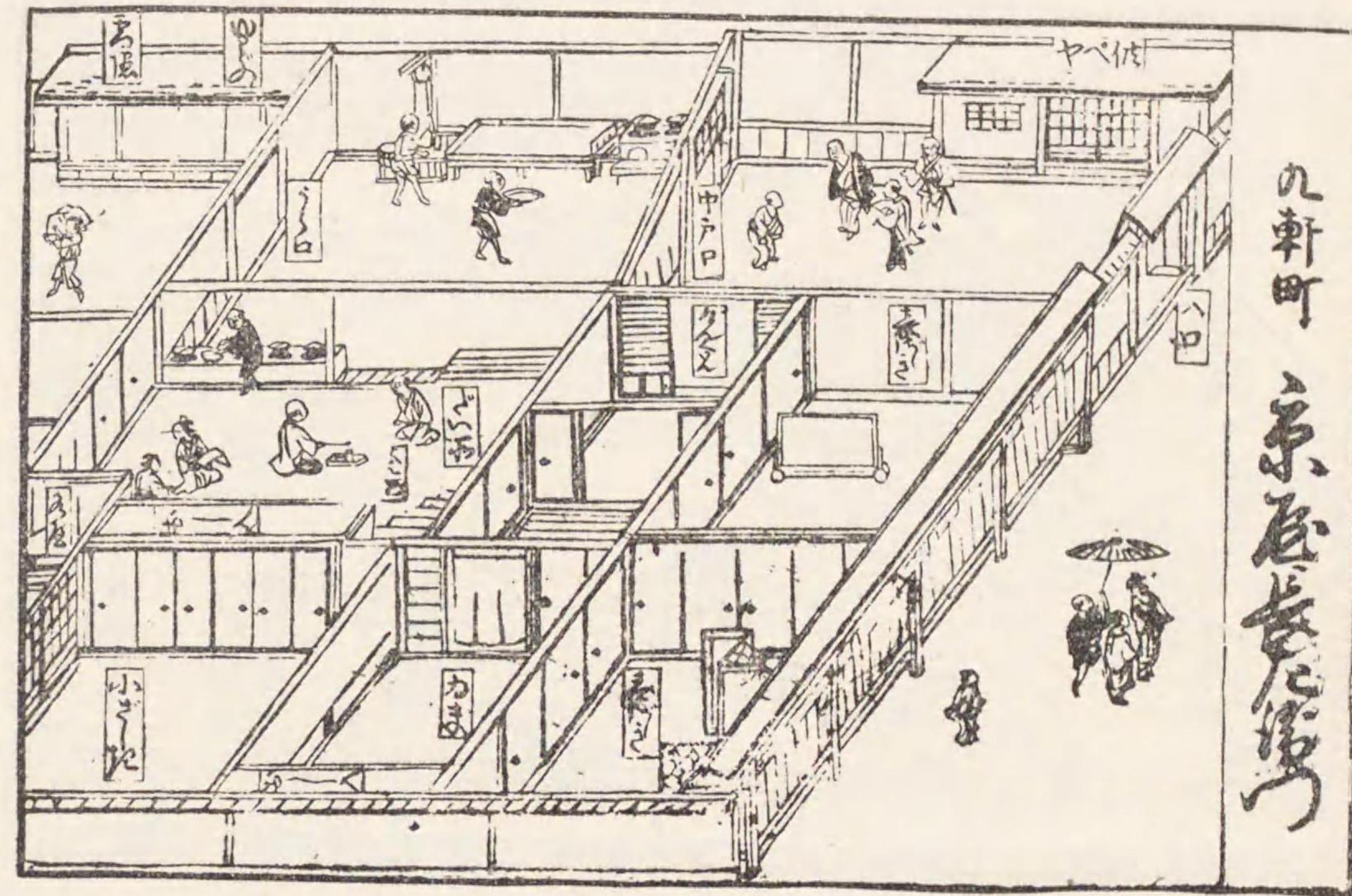
活
標



二五

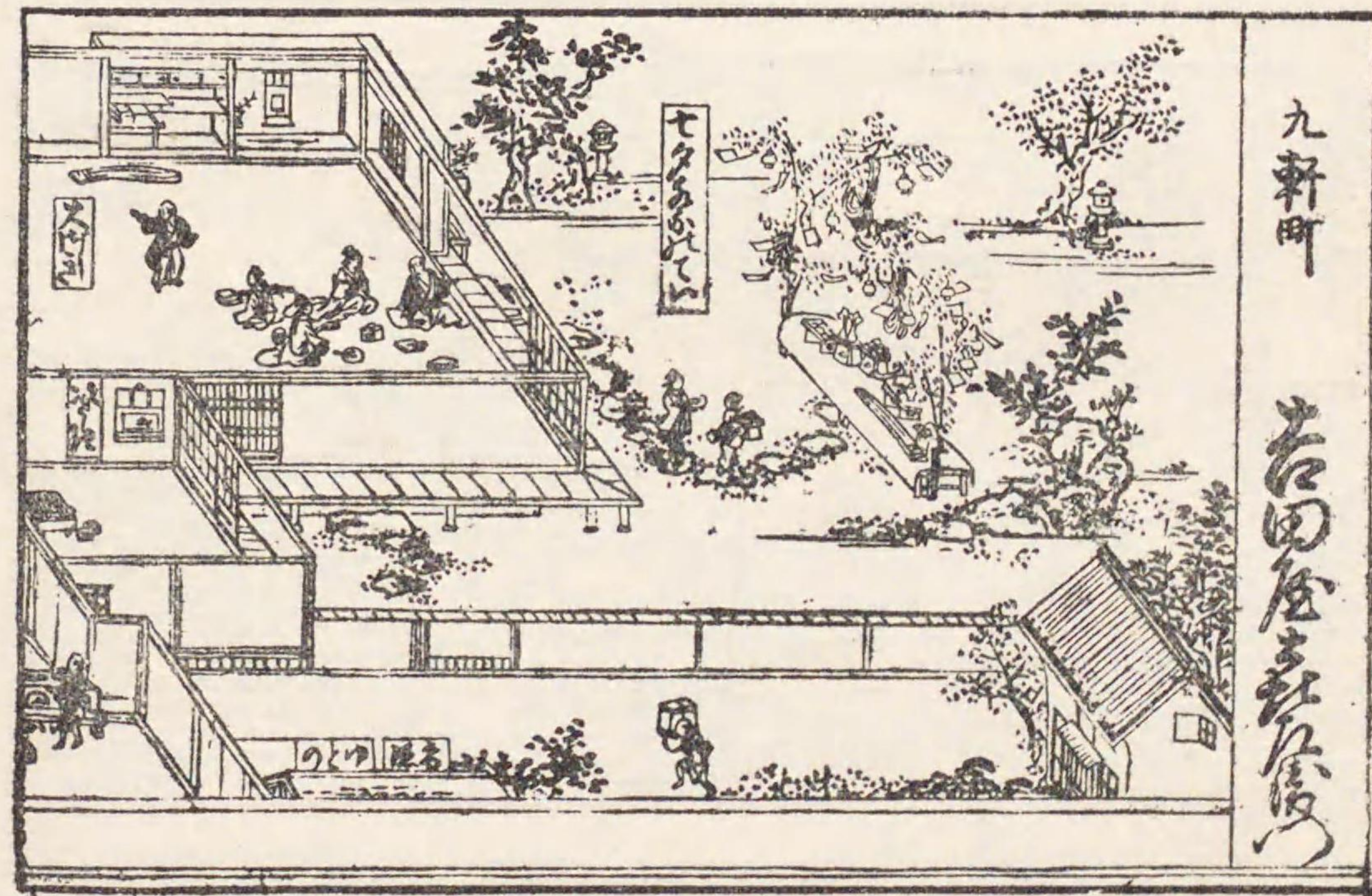


活
標



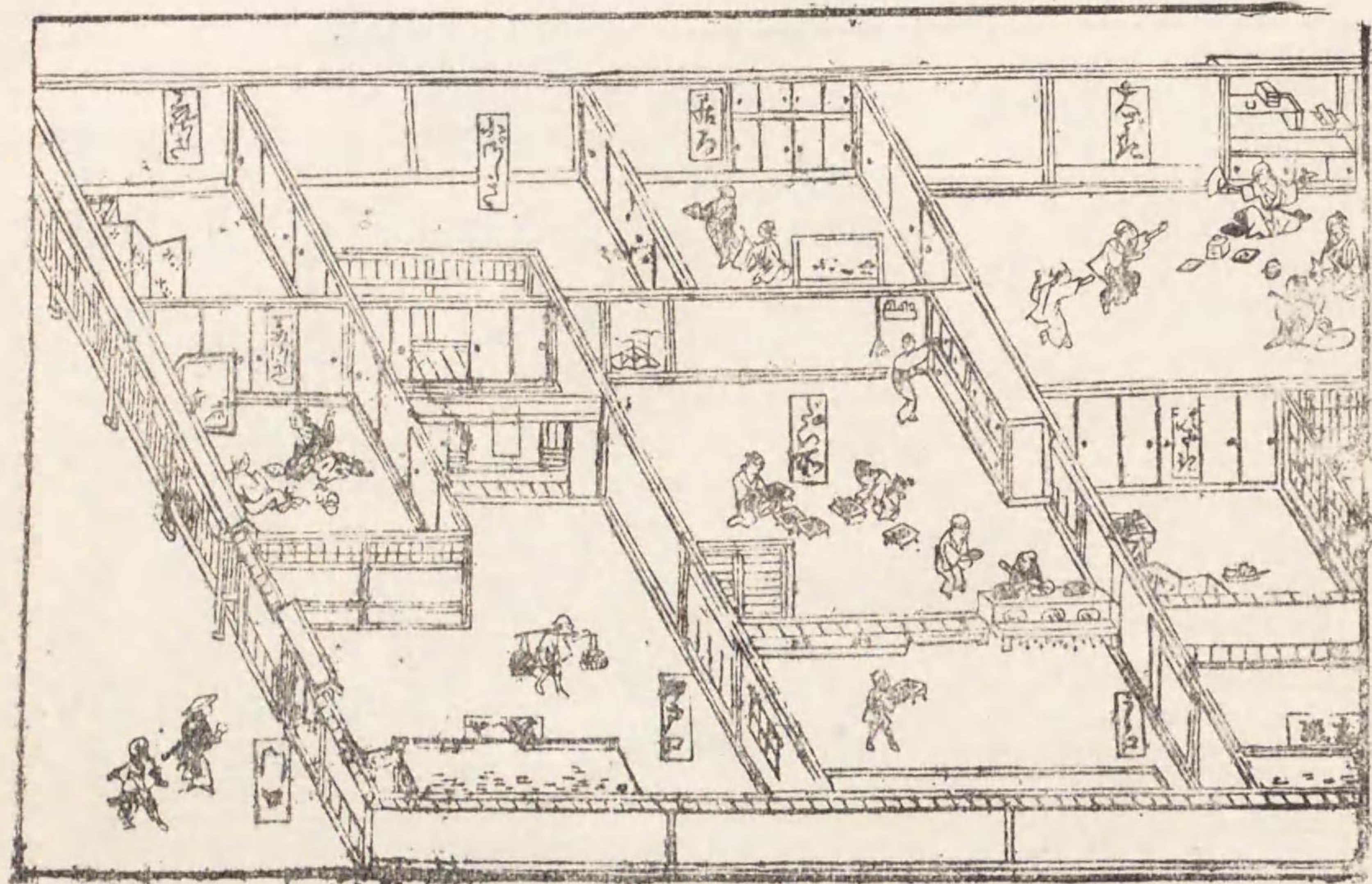
九軒町
東長尾

二四

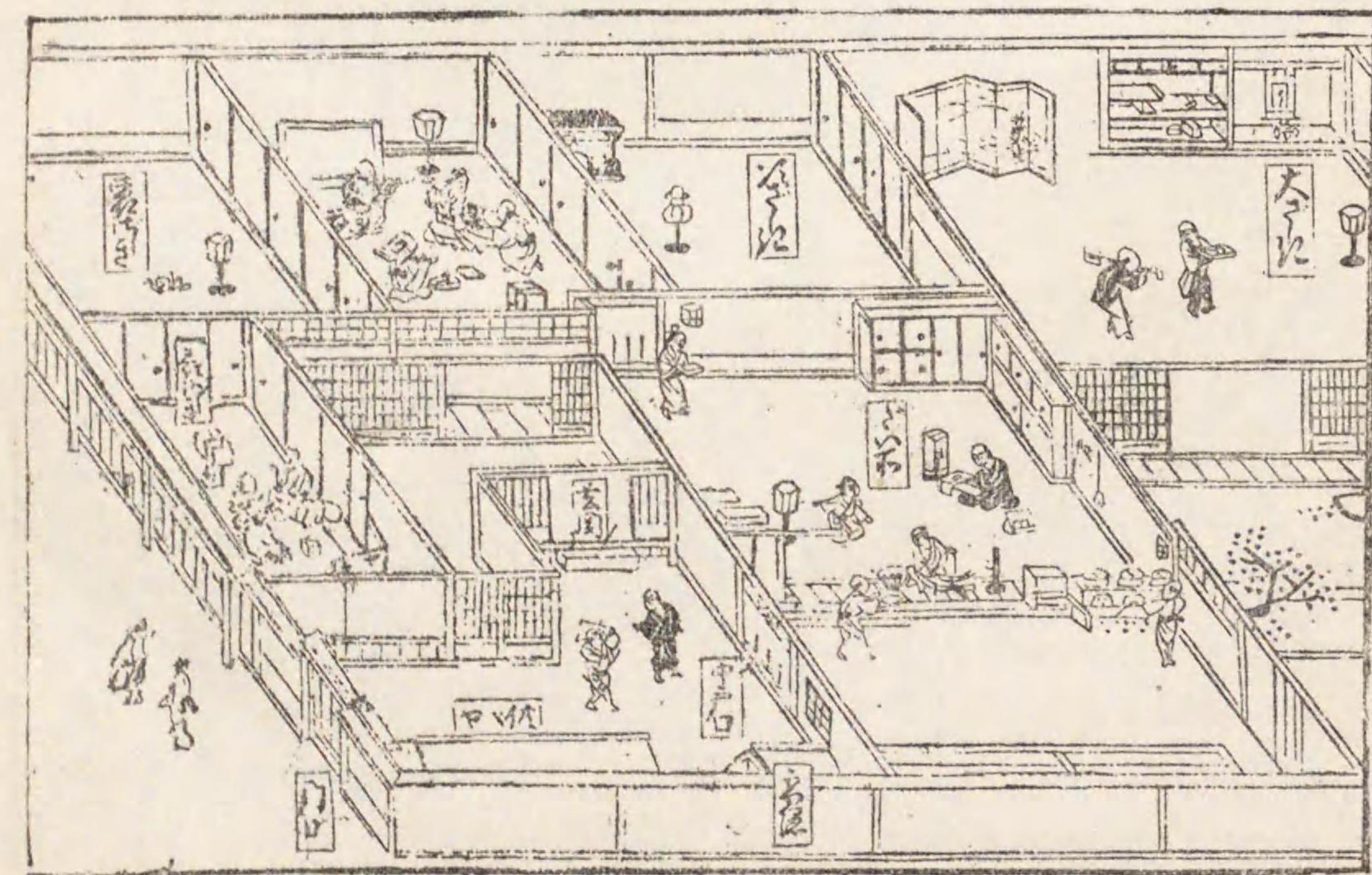


九軒町
若田屋

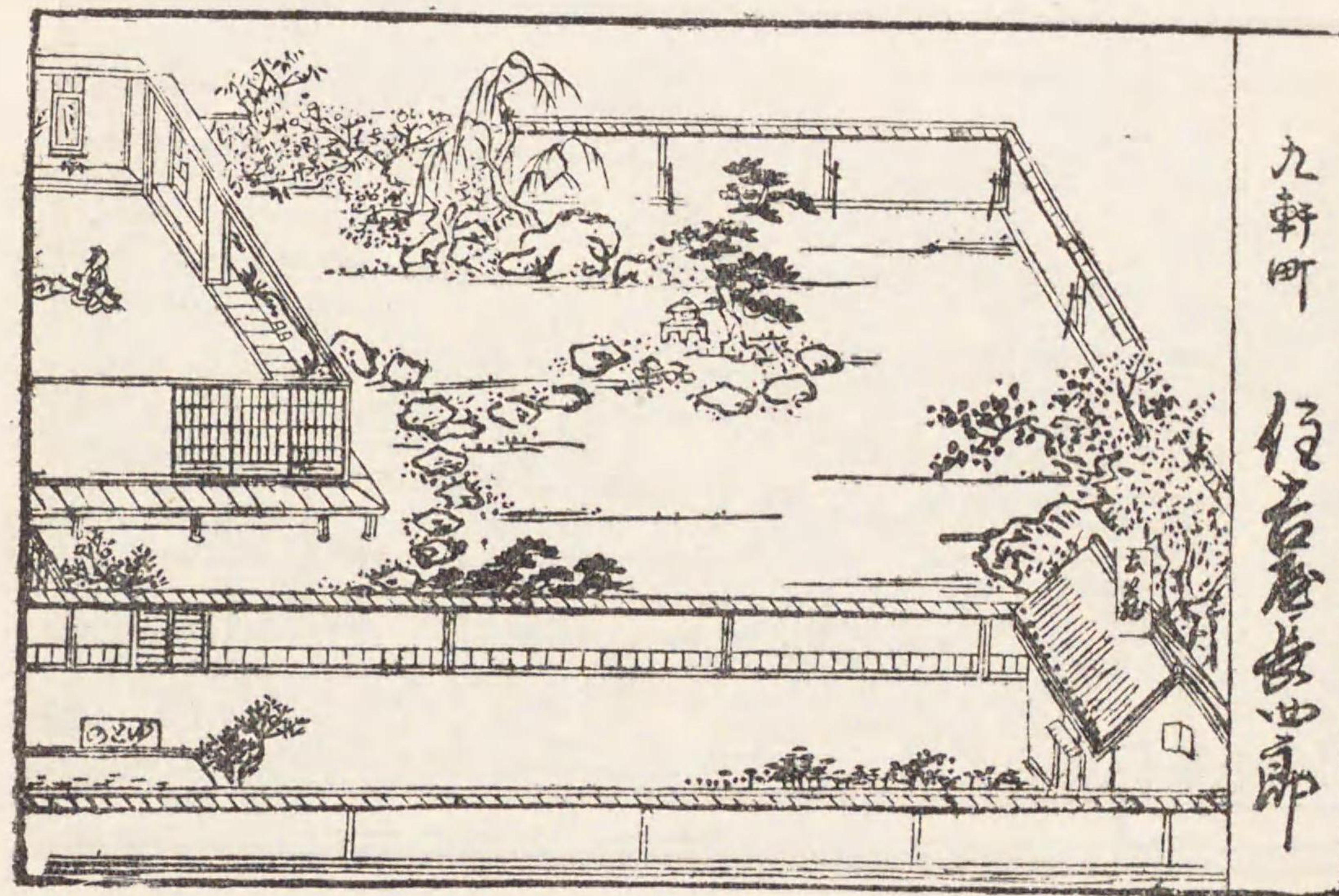
透
標



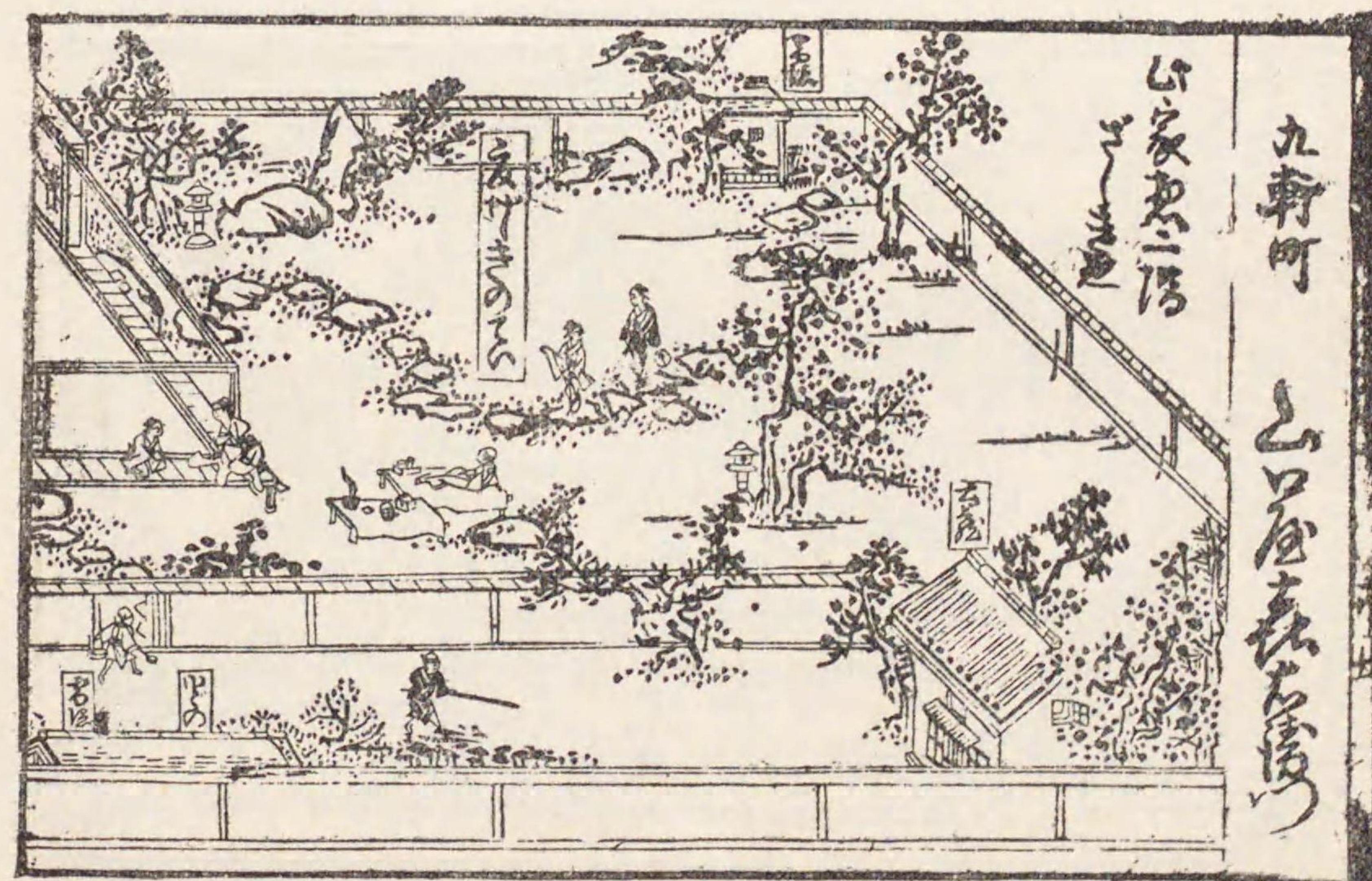
二七



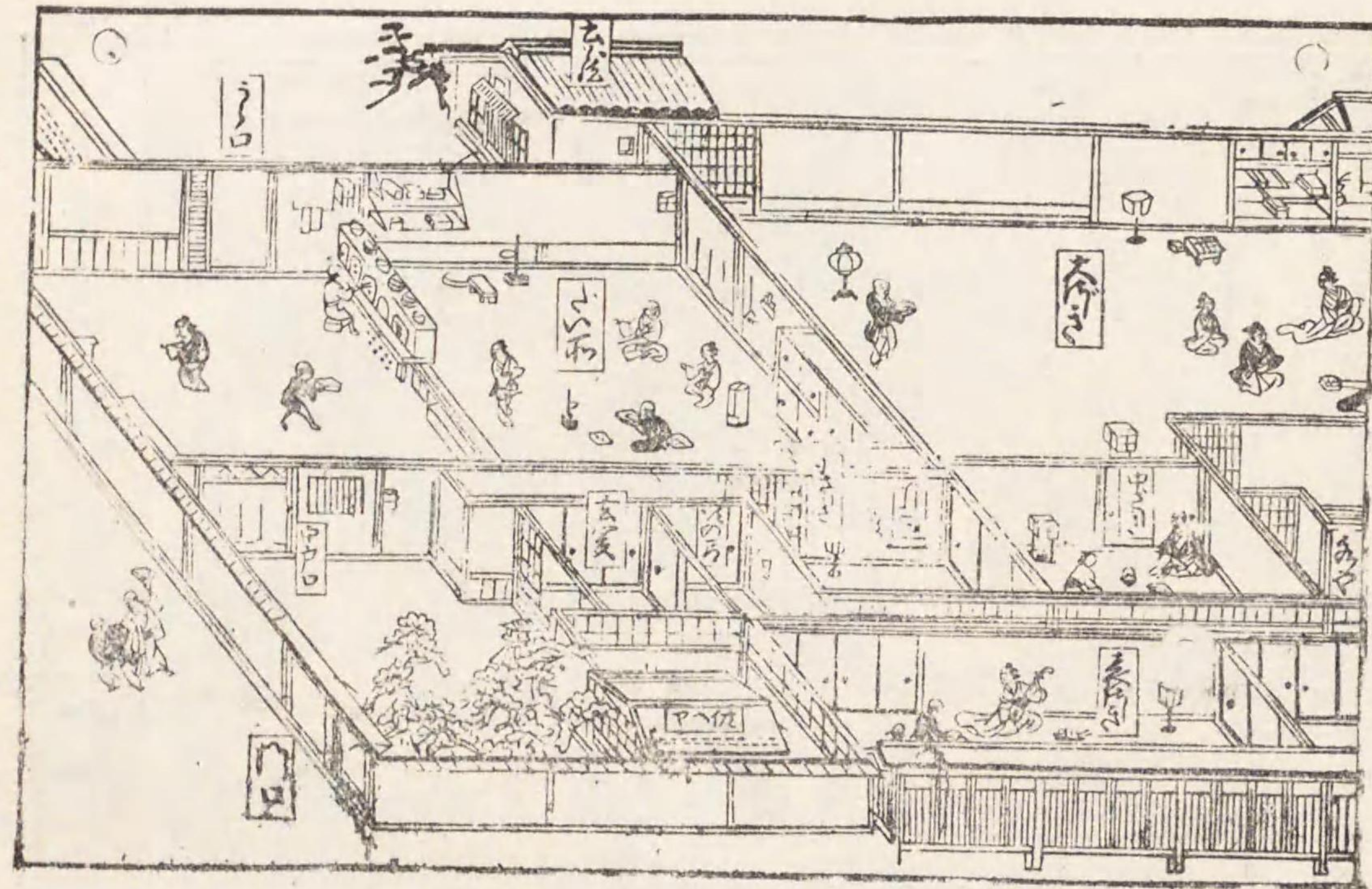
透
標



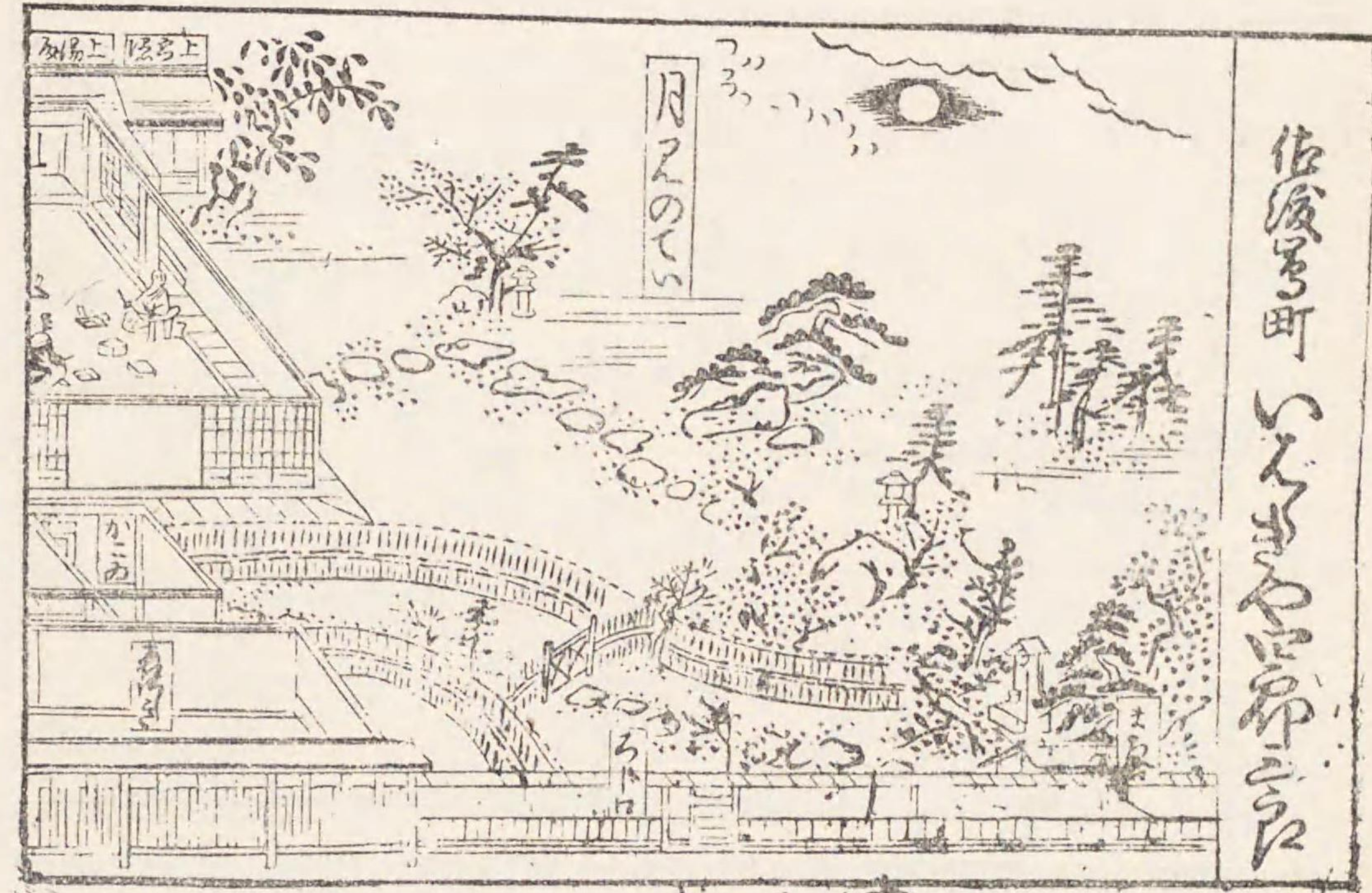
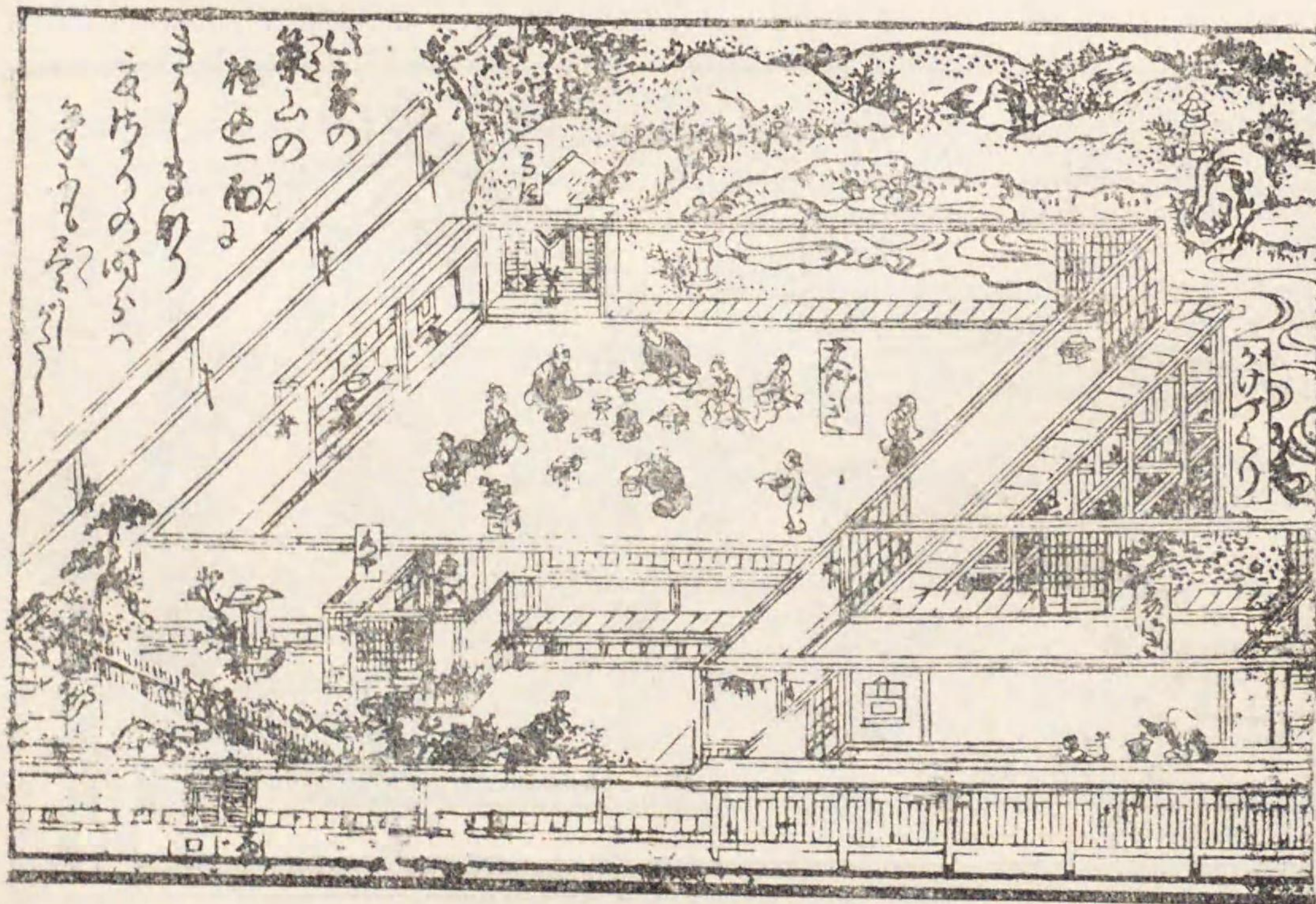
二六



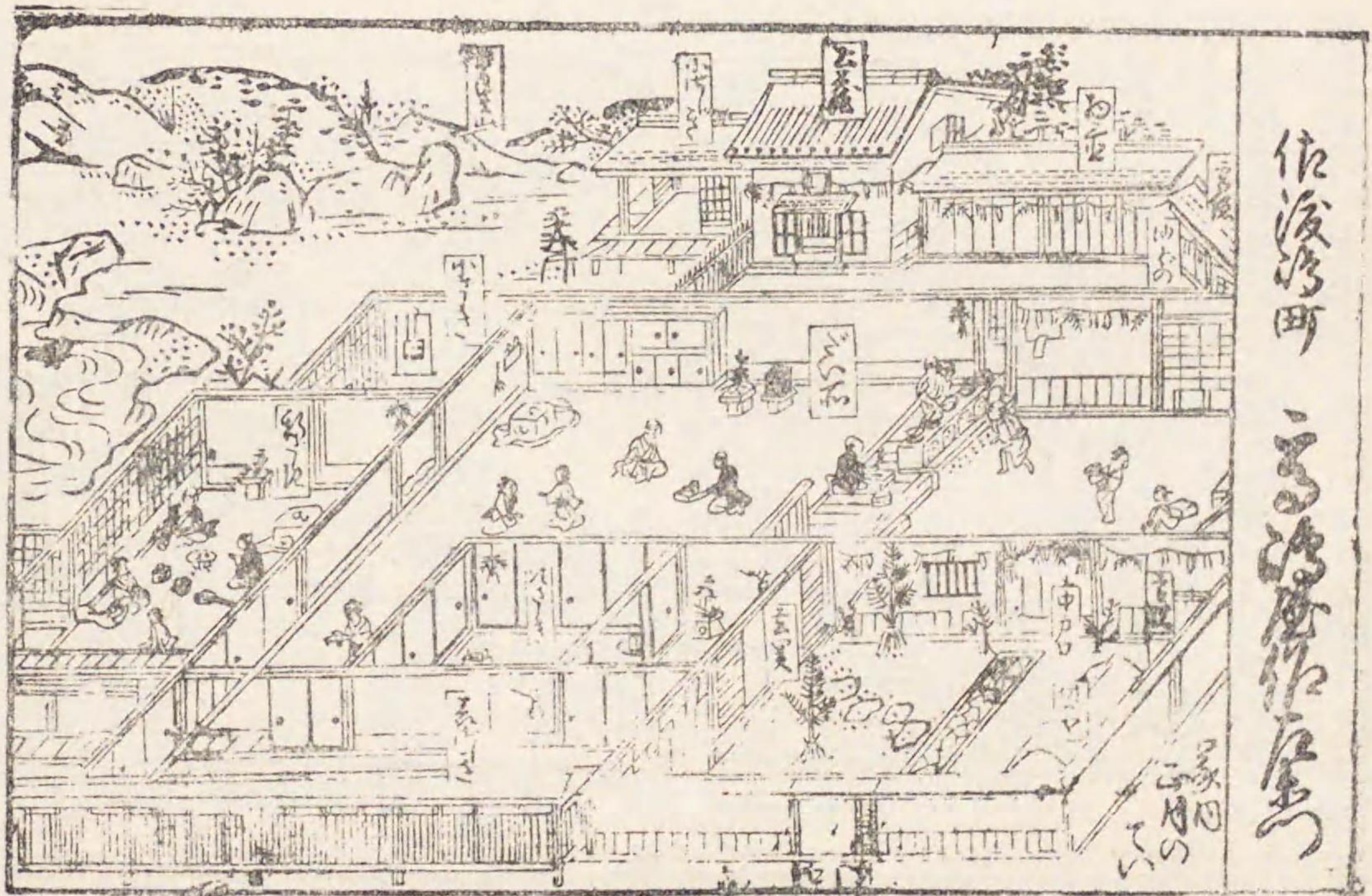
透
標



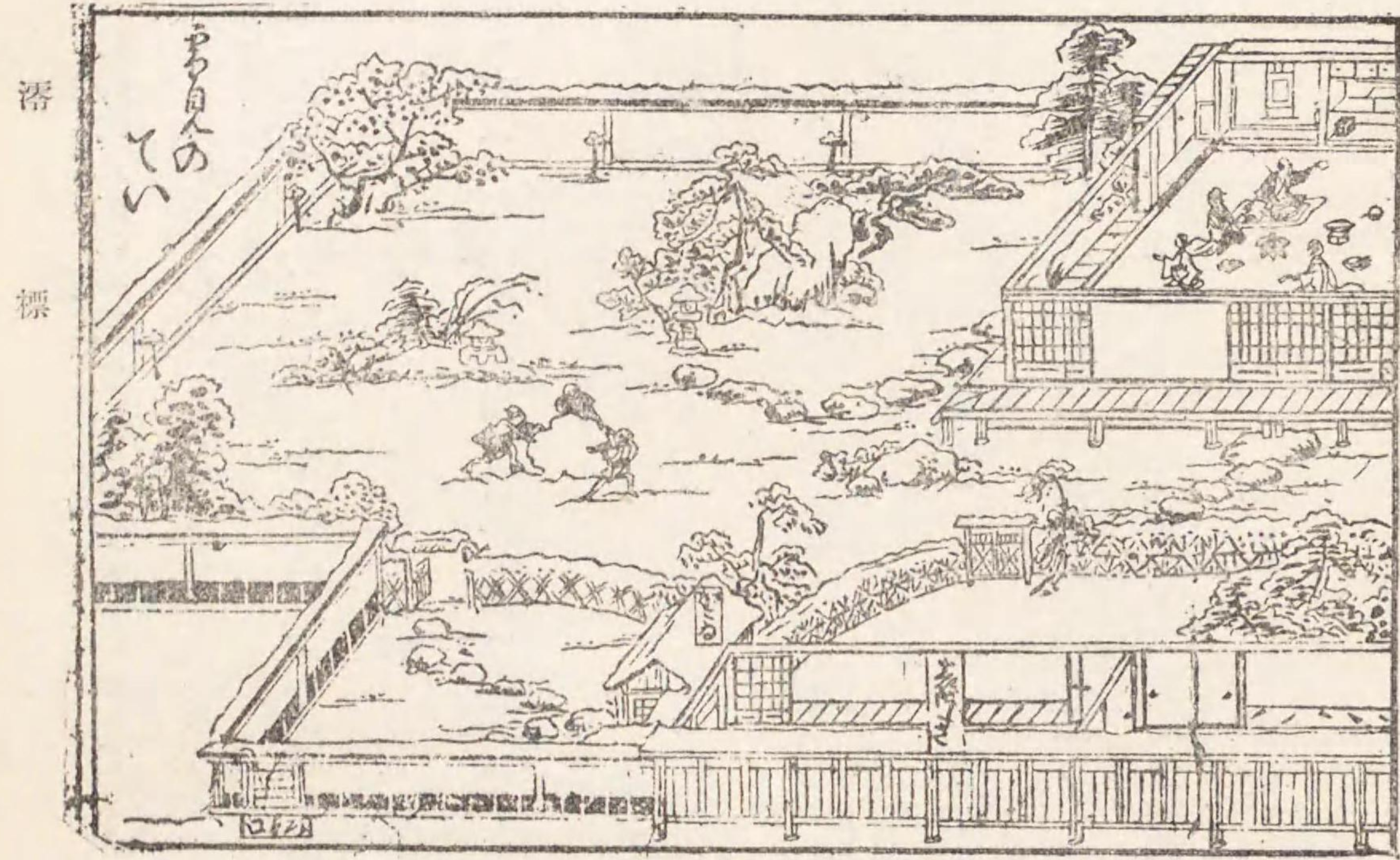
二九



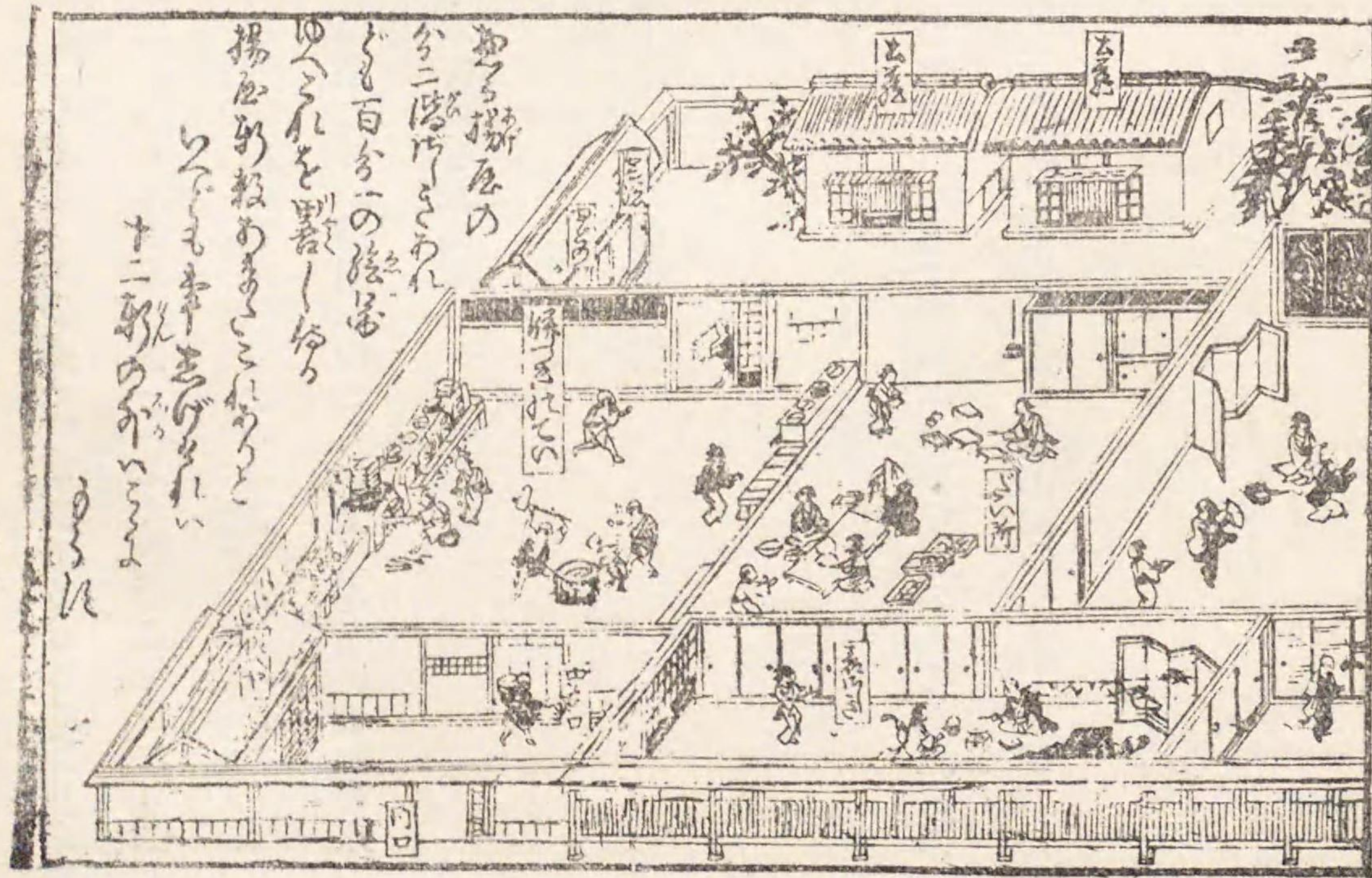
透
標



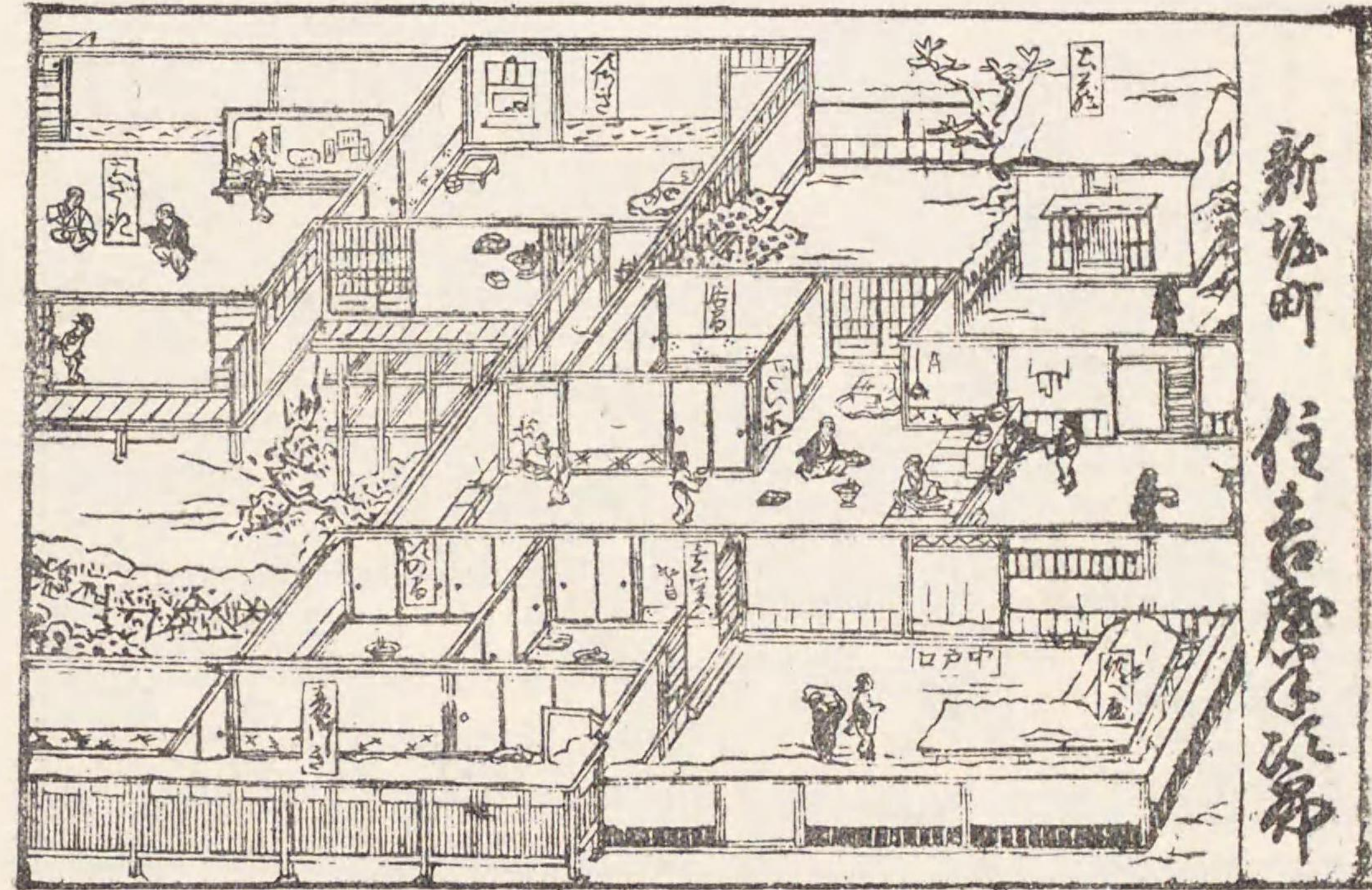
二八



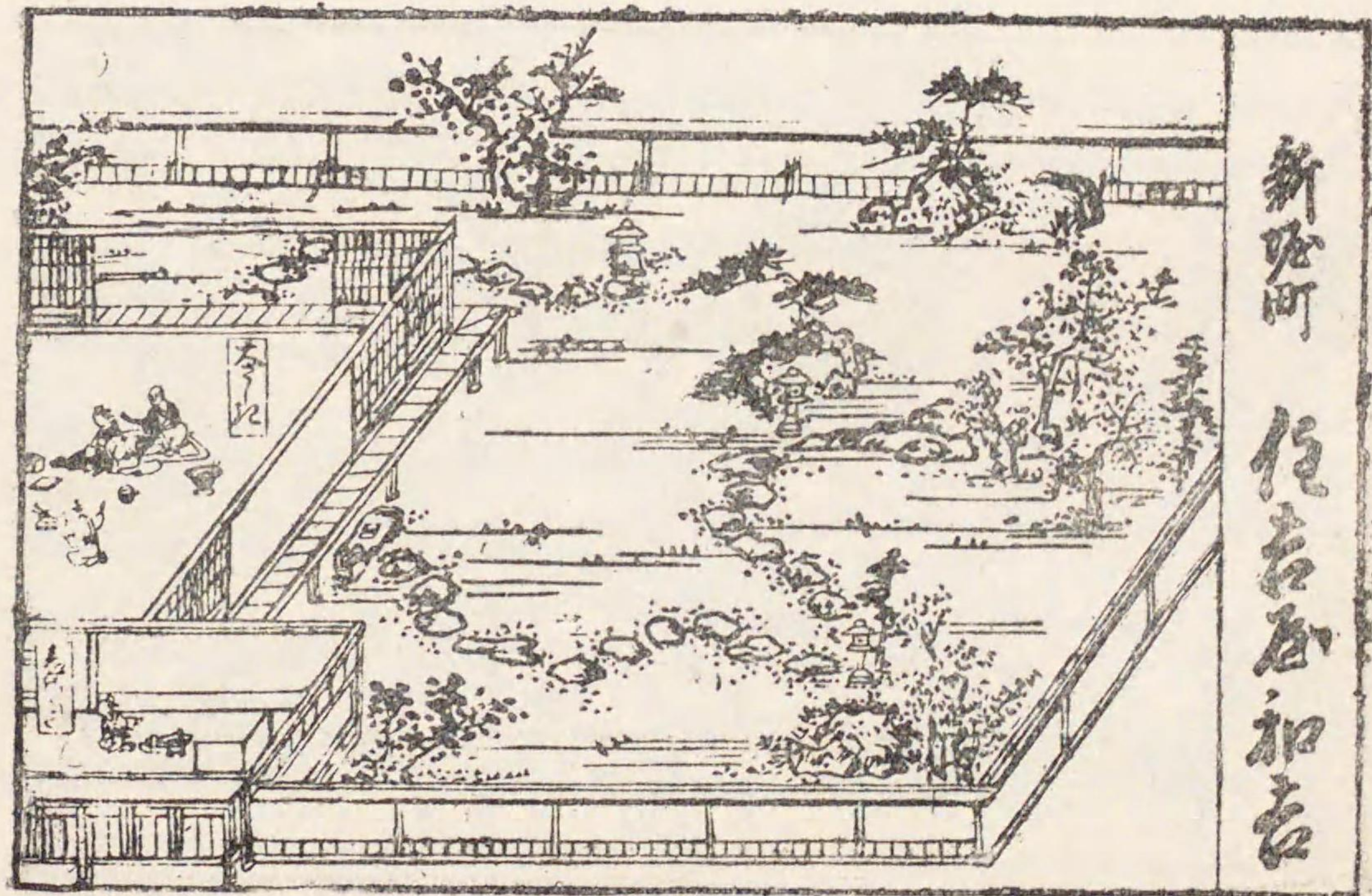
透
標



三三



透
標



三三

をもたせ長崎丸山の衣裳を着せ大坂新町の揚屋にてあそびたしといひ置たり門構先寛活にてさながら遊席の粧
 ひもつともいざぎよし唐土にて紅樓などいへるもかくあるまじとおもはるる水樓といふも此所に叶ひたり西に
 海を堰へ東に川をたなびき南北に遠山そびへ山水の致景をならべ書院庭の面の有さま中々言語にのべがたし筆に
 も及びがたけれども右のつぎに揚屋十二軒の座敷を繪圖にもらす十二軒の揚屋へのこらず太夫を始いづれも來る
 茶屋への太夫へ勿論天神迄出ず當津の揚屋軒數定なし依て年々軒數増減あり

九軒町井筒屋にて

おなしやうな情の露もみなみよりにしこそあきの色の極上

油煙齋貞柳

○茶屋員數

茶屋唐土の通號の事都嶋原細見一目千軒といへる書にくひしくのせたれば畧す新町中に茶屋といへるハ惣合四十
 五軒有是御赦免の株也他所にちがひ當津の茶屋といへるハ甚大きな構にて奇麗なる事他國の揚屋も及びがたし
 尤所の作法にて揚屋と違ひ小天神以下の女郎ハ茶屋へも出る也

夕かほや酔て顔出す窓の穴 はせを

○里詞篇

吉田屋といへる揚屋二軒有

●金六方を 吉田屋といへるニヨリ 端の兼好といふ

●喜左衛門方を 中の兼好といふ

いばらき屋といへる揚屋二軒有

●四郎三郎方を よこ町の童子といふ

●介五郎方を 新宅のどうじといふ

すみよし屋三軒有

●彦三郎方を 新すみのえと云

●長四郎方を 中すみのえと云

むかしハ長四郎西の方に住吉屋嘉兵衛とて有それゆへ中のすみのえと云此二間九軒町

●和吉方を よこすみのえと云

●京屋長左衛門方を みやこといふ

又扇屋といへる家何軒もあれども

●孫七方を 東あふぎやと云

●彌三郎方を 西あふぎやと云

いづれも風雅成異名を呼來る也今ハ山喜の高作など、家名の頭字などにて通用するとぞ前々のごとく風雅なる異

名にて呼たきもの也

○太夫品并▲一夜妻辨▲遊女解

廓女郎の内上みに立べきものを太夫と稱す和漢の通號の事へ一目千軒にくはしく述置たり昔より遊女を一夜妻といふ號あり古老の曰是今も相當せるといへるハ非也又歌の題に傀儡といへるもこれ遊女也

六百番哥合 一夜ふす野上のさとの草枕むすひすてたる人のちきりを 定家朝臣

といへるを見れば廓女郎と異かへり侍る歟長明か海道記に

矢橋を立て赤坂の宿を過むかし此宿の遊君花のかんばせ春こまやかにして蘭質秋かうばしき女有けり貌を

潘安仁が弟妹にかりて契りを三列吏の妻妾に結び下畧

又關の下の宿を過れハ色をならぶる住民ハ人を宿して主とし窓にうたふ君女ハ客をとめて夫とすあはれ

むべしちとせの契りを旅宿の一夜の夢にむすび生涯のたのみを往還の諸人の望にかく下畧

池田の宿の遊屋大磯の虎きせ川の龜菊などなるべしこれらを社一夜妻とぞおほゆれ是とても今いふ出女とハかりあかるべき遊君にていにしへの斑女花子なり唐土にて遊女といへる類ひむかしハ日本にもありて

題 寄 遊 女 戀

船のうちにさしもうきたる契りかなうらやむほどのねこそありけれ 有家朝臣

と聞え侍る今様朗詠などをうたひ舞けるとなん都ハ水邊にうとき土地故なし當津ハ水邊自由なる所にてむかしの遊女といへる類ひ今も川口などに見へ侍るまかれどもむかしの遊女とい違ひ絲竹のあらべもなく只情を商ふのみにて一口に論じがたし寛文中ハ當津の廓繁昌盛んにて名高き女郎も其比多しなかく相互に諸藝を専はけみけるとぞ古人の撰おかれし俳諧の集物にも當所太夫の發句など見へたり左に志るす

兒の親手笠いとほぬしくれかな 夕ぎり

秋の千種のあはれなる中に

櫛さすに力なきこそすゝきなれ ながと

男なき寢覺ハこはひ蚊帳哉 花ざき

すみうかりける廓の今さらになくして

(杜) 牡若いつ見んことそ澤ながら あふあう

白雨やいとしる時と憎いとき ちつか

桃の節句を

柳まけ去年のおとこのとつた髪 もろこし

其外のこれを畧す今も前々のごとく何事も風雅なる夏のみあるや近比へ聞へ侍らす當津の太夫といへるものの中
々にしへの遊君などにもおとらざるもの也尤さし掛傘あり天神より以下傘ハさしかけず太夫に限る也又いにし
へハ引舟つれたる事ハなかりし也

夕霧の事 并引舟初發

都柳町を許命せられし原三郎左衛門といへりし浪人ハ京嶋原の内女郎屋の長となり今に至つても相續して其家
筋有今一人の林又市郎といへりし人是同廓に居て女郎屋と成天正年中より相續し來りて扇屋四郎兵衛といへり
同所枯梗屋意得といへるもの廓中と意味合ありて大坂へ引越ける此あふぎやハ廓中と譯もなかりしが意得と懇意
なる故おもひ立一所に大坂へ引越ける比は寛文十二子年也此夕霧下るといふ噂大坂中の沙汰にてけふ下るか明
日ハ下るかと毎日々々川すじの見物おびた、し夕霧ハ勿論京女郎の下るといふ哥を作りて當津名物のまがき節を
付諸人廓中に入込み揚屋の遊びを催ふしたりか、る事なればいづれ京女郎の分ハはんおやうなりし中にも夕霧ハ
聞しに勝りて美艷なる事誠に芙蓉の露を含るがごとしと其比もてはやしける其上萬藝に達し行義發明言語にのべ
かたしと或書記に見へ侍る全盛日々にまし一時に方々の揚屋より大臣のまねき繁ければあまりつとめがたくて毎
日鹿子位女郎を一人宛自身より揚て召連あるき諸方より一時に客來る時此かこる女郎をさきのあけやへつかハし

座を持せ置其間に初に來りし座敷を見合又其所へ行つとめけると也夫より前當津の太夫職二人禿ハつれたれども
引船女郎を連たる事なし此夕霧より引舟女良を一人宛連る是はじめなりか、る全盛の果にあひける夕霧なれども
壽命は是非もなきものかな延寶五年の秋の比より病氣にて醫療手をつくすといへども甲斐なく貴僧高僧を請じ大
法祕法を盡せども露あるしなく諸所の佛神に祈をこめけれども天命の限りにや翌延寶六年正月六日といへるに
病床に死す時の人おしむ事松を離るる鳥かづらのごとしかくても有まじければ翌七日西寺町淨國寺に葬りける
法名

花岳芳春信女

と號今に淨國寺に件の石塔ありて扇屋一統絶ず年回を執行する也

源氏物語ニ 山里にあはれをそふるゆふきりに立出んかたもなき心地して

扇屋四郎兵衛二代目をあふぎや三郎右衛門と云それより段々相續して今の扇屋孫七扇屋彌三郎兩家元祖林又市郎
末にて遺所ある家筋なり

藤屋伊左衛門 阿波鳴戸
扇屋夕霧

といへる音曲の作り物有此伊左衛門といふ事跡かたもなき事也此趣向の内に阿波の大臣といへること有此阿波の

大臣とさすことは由縁ある事也其比の大臣に大坂阿波屋某とて大分限の人あり此夕霧にふかく馴染病中も殊の外深切なる世話をよそながらして死たると聞よりなをく厚恩をかけけるとぞ則九軒町揚屋吉田屋喜左衛門方の客なりよし其比かぶき芝居の立役元祖坂田藤十郎同年二月三日より夕霧名残の正月と云外題にて則藤屋伊左衛門に藤十郎なりてけいせい買の狂言にて大にはやりけり同年に右の夕霧狂言を四度出し翌年正月二日よりまた夕霧一周忌といふ狂言を出し三年忌又七年忌十三回忌十七回忌とてくり返し延寶六年より坂田藤十郎死去せし寶永六五年迄夕霧狂言を十八度出せりことく大當りにてありしとぞ是全く夕霧が威徳と藤十良が妙手なるべし此事委ハ耳塵集に出たり

夕霧が廟にむかふ

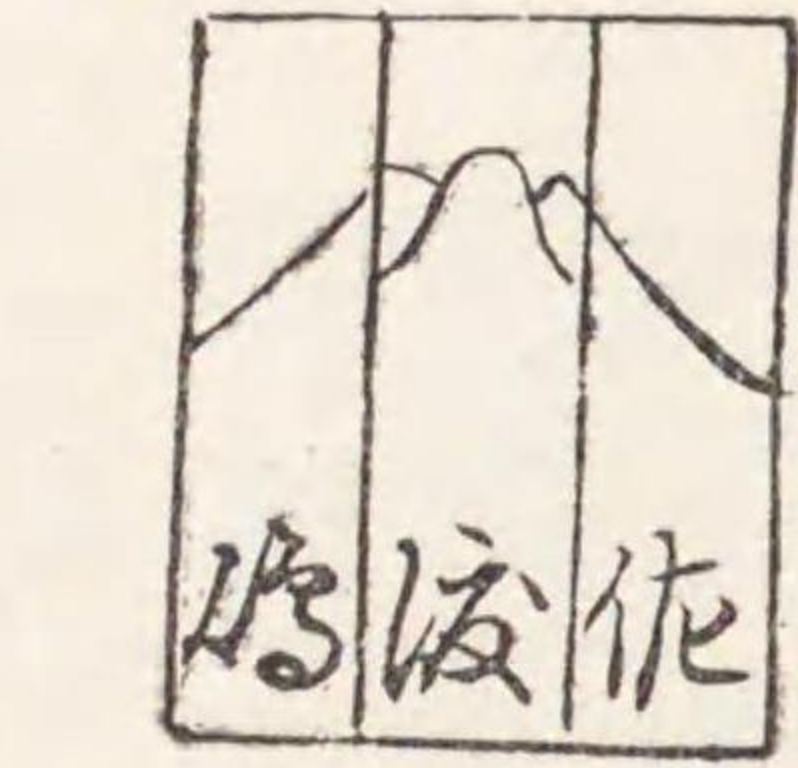
此塚ハ柳なくともあはれなり 伊丹鬼貫

▲越 中 の 事

延寶年中木村屋又次郎抱に越中といへる太夫有容色いふ斗なし此太夫道中の節ハ廊中見物のくんおの押も分られずよつて前にいふごとく急の揚屋入にほうら道より水道に橋をかけて通りよし橋に名を残せし程の事也又ある時あけやにて我相方の客風呂へ入らんとせしとき下帯まではづしていらんとせし時姿見苦しとて俄におもひ付湯

具の紅ぢりめんふたのの二布をとときはなしそれに紐ひもけて與あたへしより此風を越中禪といふ越中禪ハ越中國より始りしとハ大きな俗説なり誠まことに其時の大臣ハもろこしの花清宮の歡樂くはんらくもかなふまじと推しやられるれ其外此太夫につきさまく名に残りたる因縁あれども事繁しげきゆへこゝに畧す

▲あづまの事



佐渡寫與三兵衛家代々暖簾のれんにかくのごとく晝ありしゆへに誰がいひ初しや終つひに富士屋と家號がごうに呼びし也よかれども町にてハ佐渡寫勘右衛門と申たるなり寛文中此家の抱かへに吾妻といへる太夫ありて越中夕霧にもならぶほどの全盛ぜんせいにてありし器量きりやうすぐれ天性位高く其上絲竹一通いつとくはいふに及ばず萬藝ばんげいに通じ諸國の群客ぐんかく我一とまみゆる事を争あそふ其中に攝州山本村に坂上與次右衛門といへる有徳人うとくありけるとき此津つに來りあづまの名高きにひかれ九軒町井筒屋太郎右衛門が方にて此あづまにふと折およく逢初あはしより晝夜足を爰あにとゞめそれより馴染なじみをかさね揚話あやうのあそび井筒屋の座敷を建直しやりけり此大臣與次右衛門定紋三ツ柏がしにて有けるより太郎右衛門が座敷の針かくし残らば柏のかな物を打したり結構の家造筆にも及びがたし此井筒屋太郎右衛門といふ揚屋廿四五年以前絶はて今ハなし與次右衛門建立のさしきも終つひに水上の泡あはと消きうせたり大臣山本村與次右衛門を世に山崎與次兵衛とぞいひかへたり其比にも珍敷事めづらしきにてあ

りしにや哥を作りあづま請だせ山崎與次兵衛うけだせく山崎與次兵衛そつこで請だせ三百兩と諷ひしなり其比女郎の身の代三百兩といへるへめづらしき事にて今云千金の幅よりもすさまじかりし此あづま坂上氏になじみて後我すがたを畫て望望まされければ

身ひなには心ひみやこ名へあつまのほりつめたる山本の里

と書付送りしよし今に攝津國河邊郡山本村某に件の一軸傳來すと也

壽 門 松
在 所 駕

などいへる作り淨瑠璃文句もみな少づ、由縁あること也その外よしのやあけまき又ハ松山などいへる名君達あまたありしなれどもこれを畧す遊女に取りてハ當津ハ四神相應の地なるかや昔より日本に名をあげたる女郎多しあけまきに馴染し萬屋助六ハ何國の人や其來由未詳松山になじみし椀久を元日金歳越といへる淨瑠璃文句に作りたるありさまを見れば節分の夜升に壹歩豆板を入れて揚屋さしきにて蒔たる事有是ハ元祿年中大坂玉屋某といひし人越後町いばらきや長左衛門方 今助五 邸家なり にていたされたる事也又其比有徳人の果にて殘髪に十徳を着し竹の杖に瓢箪をく、り付門々に立かる口をいひて物を乞し瓢箪かしくといひし隠者ありたりそれと二品をひとつにして作りたるハ作者の發明也其餘ハ事繁きによりこ、にもらす

源氏物語

あけまきにながき契りをむすひこめおなしところによりもあはなん

後拾遺集

契りきなかたみに袖をふほりつ、すえのまつ山波こさしとは

清原基輔



印



○長持運送并調度通用

- 一 太夫ハ 大長持
- 一 天神ハ 中長持
- 一 引船ハ 小長持

右大中小三通り有をのく女郎屋の定紋を志るし内ハ夜具并料紙筒筒箱其外手箱等の物品々々入女郎極りたる揚屋へ女郎屋より持せやる也此長持往古より有來る事なりしに享保九辰年類焼して今ハ大風呂敷に包み揚屋へ通ふ也

○仕着行粧并二日着 三日着

正月
三月
五月
六月
七月
九月

浴 標

四三



御被

右仕着の家々の格あれば爰に畧す外に二日着三日着などいふ事あり是れ此里の一風流にて客方よりつかはす事也衣裝の結構のおもひ入次第數も定りなし二日着と云る名目へ親方よりの仕着へ式日當日に着て出る也二日目同じ衣裝着て出るも見苦しとして二日目の衣裝はれ着なればこれは客方より到來の衣裝にて出る三日着これにおなじこれ全盛の女郎の花とす

○身請門出

身請定り門出の日揚屋茶屋親方の親類知音の銘々へ樽肴或へ絹織物等相添祝儀となす又もらひたる方よりもそれくの届事は其後門出名残とて家内一門一家寄あつまり料理に結構をつくし盃事ありて揚屋より迎ひ



來る乗物持せ來るも有かるき竹輿被すけ笠さまあり夫より揚屋にて又盃事有此時なじみの女郎達おもひく寄あつまり見送の事どもあり門まで賑々しく見送りはなやかなりし事どもいふ斗なし此義式へ大臣の威勢次第にて花美かぎりなし

○天神位階并小天神 見世天神

此天神といへる職にも段々譯ありて先天神と計いへるへ大天神なり太夫について揚屋斗出て茶屋へ出す此位の内に端小天神といふ有價も少々下直にてもつとも半夜といふにも切て出るその次に見世天神といへる有いづれも價の奥に委し天神に三段あるなり當津へ京嶋原と違ひ天神職に日傘なし雨天なれば天神も長柄のかさをさしかけるなり享保九辰年類焼以後追込と名



附不殘大格子へ出るなり但小天神已下局に壹人も出る也よつて端小天神といふて端女郎兼退也

青柳の額の櫛や三ヶの月

寶晉齋其角

○鹿子位部類并月影汐相當

當津にてハ鹿戀とハ書都とハ違ひかこひと端とハ同部ながら其中に差別有此位にすこし宛あたひに諸分有都嵐原にて鹿戀といふハ格子女郎の内にて端女郎より格式よし當所のはしハ小天神に號有かこひハ又引ふねと少々混雜したり志かし當津の引ふね今にてハ都と同格なり又むかしより此位のうちに月の位影の位汐の位と譯ありて價の高下有いづれの由縁より此位出たるとおもへバ月ハ一ツ影ハ二ツ三ツ汐といへる松風の諷よ



り案出したりときこゆ尤局へ出るときの相當なり

○牽頭女郎情并藝子風俗

たいこ女郎といへるものハ揚屋茶屋へよばれ座敷の興を催ふす爲の者也琴三味線胡弓ハいふもさらなりむかしハ女舞などつとめしものなり享保年中より藝子といへるもの出來たりこれハむかしのたいこ女郎とハ譯ちがひ三味線をおもてに立てうらハ色をおもとする也さるによつて美女はむかしのたいこ女郎と違ひ容義ハすぐれたる有つとめかたハたいこ女郎と同じさまなり

○籬節一曲

昔のうたひものハ朗詠變じて今様となり又ハ志ほり萩といへるものなどありて白拍子遊女などこれをうたひ

舞かなでけるとなんそれよりはるか後さま〜と作り唱哥出けり中興泉州沙界に日蓮宗の僧隆達其妙を得てこゝ
ハ山中森の下蔭月夜鳥のいつも鳴といふ文句をみづから作りうたひ出しけるより又大ひにはやり花柳ハ勿論町方
にてもこれをもてあそび他國までも隠れなかりしとかやされバ俳諧の發句にその文句を立入れて趣向に迄なした
り

秋ハもの、月夜からすハいつも啼 伊丹 鬼貫

明曆年中都嶋原にてなげぶし江戸吉原にてつきぶしといへるもの大にはやりけり萬治年中大坂新町まがきといへ
る女郎一風流のうたひものを作り 自節を附てこれをおこなふ此女郎生得妙なる音聲にて一曲なしけれバ誠に
梁の塵を拂ひけるとなん廓中ハ勿論諸所町々にてもこれを諷はぬものハなかりしよしこれを世に新町のまがき
ぶしといふ元祿寶永の比迄是を相傳してありしに正徳年中より中絶していにしへの程ハ行はれずなりにき今も當
津廓の内に此唱哥に妙を得たるもの有それに聞侍りしに都の嶋原のなげぶしと江戸半太夫ぶしとの間のものにて
幽玄にて面白歌なりされバ都嶋原のなげぶし江戸吉原のつきぶし大坂新町のまがきぶしとてこれ廓三名物也

○局 暖 簾 差 別

都嶋原の局むかしハ官家の免許をるすのうれんかくること叶はずのうれんハ柿染の布長さ四尺三幅にて縫分に柑

子革の爪結あり中比より末代不易の免許を得て當時ハ自分にかくると有是嶋原の古實也當津の暖簾 古ハ柿も有
空色もありし今紺染ばかりなり紅絹にて爪結あるハ新艘女郎といふふるし也此事そのはじめハ天台僧の衣の爪結
よりおこりしといふ説もありとかく今ハ新艘のふるしにハ紅絹を付る也

○和 氣 稱 號

むかしより分といへる君有是も十分にあまりてハよろしからずとて分て價五分宛に定ありし近代和氣と書す今に
てハ價も鳥目にきハまりたり奥にくハし

○禿 由 緒

當津の禿ハ都嶋原のとハ少しの譯ちがひあり往昔平相國清盛六波羅に在住のとき拵ハたまふ三百人禿の餘風にて
いにしへの禿ども 甚權式高かりしに今ハ昔ほどの威勢ハなけれども其餘風故揚屋茶屋より呼むかへに来る呼立
女にチウチウと答る也これ古代の權の残りし所也といひつたふすべて何國とても新艘の女郎ハ此内より段々太夫
職までにす、むもの也新艘出るとき嘉例ハ廓に格式ありていはふ事也

○呼迎女故實

正月 三月 五月 七月 九月式日禮日又臨時に新艘出る日其揚屋茶屋より向ひ女子とて女郎一人に中居一人宛向ひに来るなりこれも往古ハ毎日々々此格なりしが今ハ漸々道中日斗になりし是當津のくるわの古實也

○勸進芝居太鼓不打由縁

芝居のかはり或ハ勸進能相撲等大坂町中太鼓打て廻る此類のたいこ通り筋西の大門の手前より打やめ立賣堀へかゝるまで打す此義大坂中太鼓うつもの、習にていはれある事とぞくハしくハ所の人に尋ねべし

○夜見世繁花

此廓開發の當座夜見世なし晝斗なりしに延寶年中より正月より十月晦日まで夜見世御赦免にて霜月極月二ヶ月ハ暮限に東西の大門閉居たりしにその、ち享保年中に又霜月極月二ヶ月も御赦免ありて今ハ年中夜見世ありて白日

をあざむき繁花なるけしきおもしろし

○限太鼓作法

當津の廓に時のちらせを夜の亥刻に曲輪中たいこうち廻る宵より入込る人々を此たいこを相圖に残らず追出し大門口をあめる也此太鼓を限といふ也此太鼓うつ迄の廓中揚屋茶屋の諸客ぞめきの人々のにぎひ軒々の懸行燈の光白日に等し

鹿の角先一ふしのわかれかな

はせを



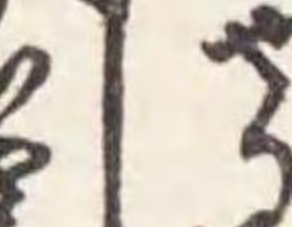



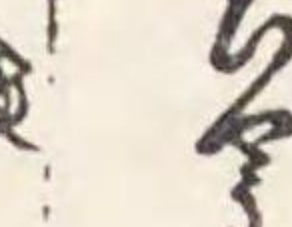

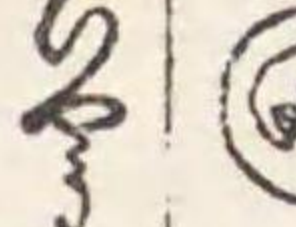

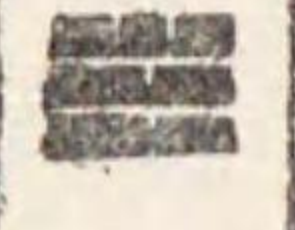


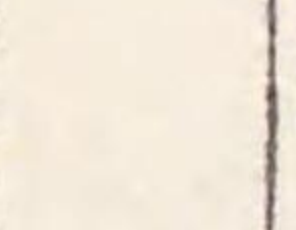
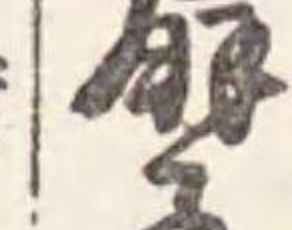



○價諸分	○右丈 六拵九丈	○天神 四拵五丈	○小丈神 三拵三丈	○小丈神 夜賣とつ附	●朝より午附と 拵五丈	●午附より暮と 拵五丈	●暮より天明と 拵五丈	●又見世あそびとつひく拵五丈とつひく
------	----------	----------	-----------	------------	-------------	-------------	-------------	--------------------











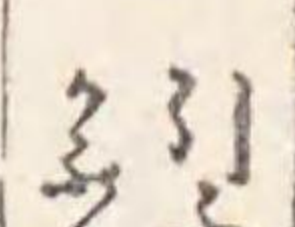
又第...
 一 夜 三々五分
 一 切 三々五分
 ○見世天神 抄拾七文
 ・右深夜 拾五文
 朝 拾五文
 見世あまひ...
 ○唐子位 抄拾四文
 ・但深夜小天神月日 三拾三文
 ○... 三拾三文
 ・但深夜小天神月日 三拾三文

○級日定目
 正月 三々日 四日 五日 六日 七日 九日 十日 十四日 十五日 十六日 廿五日 廿八日
 二月 朔日 初年 二午 十五日 廿二日 廿五日 廿八日
 三月 朔日 三日 四日 五日 六日 七日 十六日 廿五日 廿八日
 四月 朔日 八日 十五日 十七日 廿一日 廿五日 廿八日
 五月 朔日 五日 六日 七日 八日 九日 十四日 廿五日 廿八日 晦日
 六月 朔日 七日 十四日 十四日 十五日 十六日 廿一日 廿五日 廿八日 廿九日 晦日




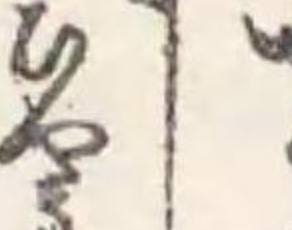







○... 七百文
 他尺せ...
 朝版料理代 揚屋 三々文
 月 拾料 六々文
 月 拾料 三々文
 出供... 月 三々文
 右の可...
 右之の可...
 中の...
 但之




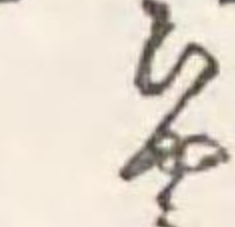


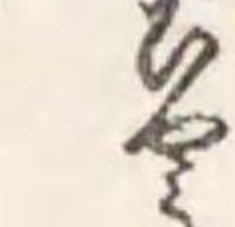




七月 朔日 七日 十日 十四日 十五日 十六日 廿一日 廿五日 廿八日 廿九日 晦日
 八月 朔日 十四日 十五日 十六日 廿一日 廿五日 廿八日 廿九日 晦日
 九月 朔日 九日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 廿一日 廿五日 廿八日 廿九日 晦日
 十月 朔日 六日 十日 十一日 十二日 十三日 十四日 廿一日 廿五日 廿八日 廿九日 晦日
 十一月 朔日 八日 十三日 十四日 十五日 十六日 廿一日 廿五日 廿八日 廿九日 晦日
 十二月 朔日 十二日 十五日 廿五日 廿八日 廿九日 晦日
 但之 庚申年中改日也

									
ふせや	あなめ	いー	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや
									
ふせや			ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや
ふせや			ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや	ふせや

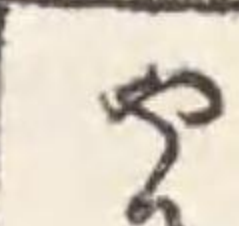
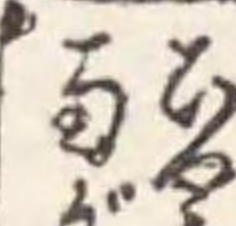






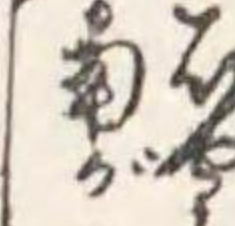
									
まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま
									
まごま									
まごま									




									
おんま	おんま	おんま	おんま	おんま	おんま	おんま	おんま	おんま	おんま
									
おんま									
おんま									


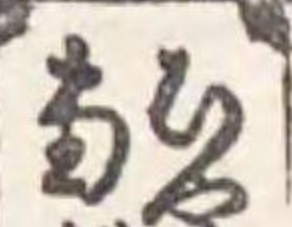
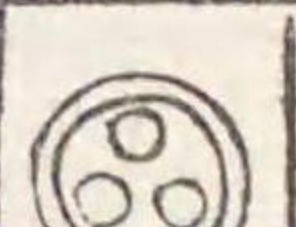



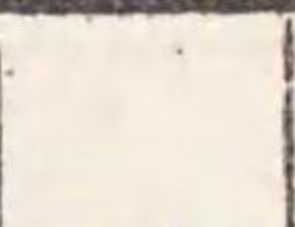

									
まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま	まごま
									
まごま									
まごま									











	丈	さし	さう	りの
	う	さ	木	
	さ	て	う	め
	か	こ	お	
	あ	は		
	い	ろ	う	
	か	め	く	
	小	天	神	の
	み	ち	を	
	さ	ん	ざ	
	花	ざ	ん	




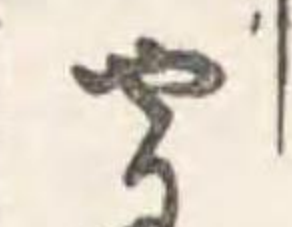





	志	ら	ら	の
	い	ら	ら	
	ま	ら	ら	
	あ	ら	ら	
	あ	ら	ら	
	あ	ら	ら	
	あ	ら	ら	
	小	ら	ら	
	ま	ら	ら	
	ま	ら	ら	
	ま	ら	ら	

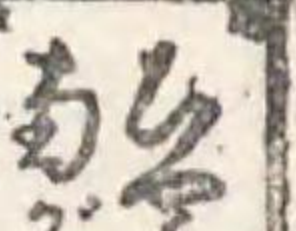



	や	う	て	
	○	小	天	神
	ち	が	と	
	う	す	ま	
	く	ふ	ご	
	さ	ら	ら	
	さ	ら	ら	
	○	小	天	神
	か	い	木	

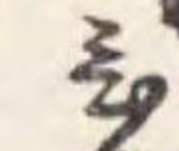



	あ	ら	ら	
	○	小	天	神
	さ	ら	ら	
	さ	ら	ら	
	さ	ら	ら	
	さ	ら	ら	
	さ	ら	ら	
	大	跡		
	大	ま	き	
	小	ま	き	

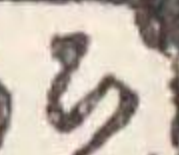



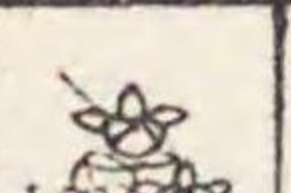
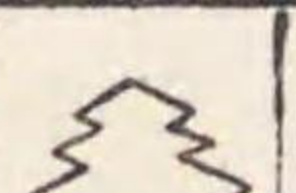

	ざんまかえ	やうて	むえ
	あざん町とど	車座	あそ
○小天神の分			
	みうれ	まろ	まめの
	んらとせ	まろ	まめか
	んらとせ	まろ	まめの
	みらとせ	まろ	まめの
	やうて	まろ	まめの
あざん町とど			
○小天神の分			
	とーり	まろ	まめの









	たにまげ	まろ	小言
	たままき	まろ	うの
	まろーは	まろ	まめの
	まほのお	まろ	まめの
	大とど	まろ	まめの
	小じとせ	まろ	まめの
	こままき	まろ	まめの
	やうて	まろ	まめの
あざん町とど			
○小天神の分			
	よーの	まろ	まめの
	やうて	まろ	まめの










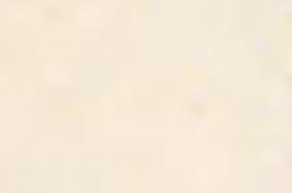




	さねま	まろ	いその
	あつは	まろ	らうら
	万とせ	まろ	まめの
	やうて	まろ	まめの
あざん町とど			
○小天神の分			
	んらとせ	まろ	まめの
	まろーは	まろ	まめの
	んらとせ	まろ	まめの
	まろーは	まろ	まめの
	んらとせ	まろ	まめの




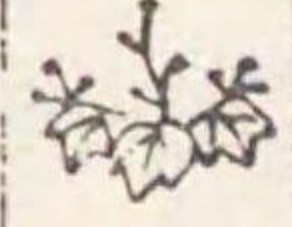

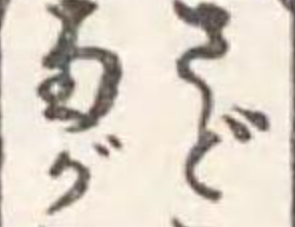
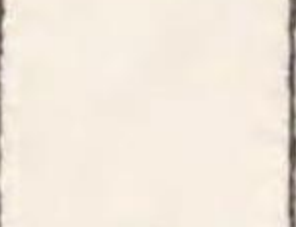




	おまの分	まろ	小言
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの
	まろま	まろ	まめの


	りやん町やど	洋巻平衣
○小天神の分		
	あふよ	うろこの
	あやめ	うろまつの
	うしろえ	うろた友
りやん町やど	平野屋小三郎	
	らぶら	うろこ
	ごもん	うろこ
りやん町やど	うろこ	
	なご	うろこ
らぶら	うろこ	
らぶら	うろこ	

	りやん町やど	洋巻平衣
	うしろえ	あやめ
りやん町やど	扇屋友九郎	
○小天神の分		
	かいら	うろまつの
	うしろえ	
りやん町やど	源本屋ごら	
らぶら	うろこ	
	かめご	うろまつの
	あらま	うろまつの
	あやめ	うろまつの

	らぶら	うろこ
	みん	うろこ
りやん町やど	うろこ	
	あふよ	うろまつの
	あやめ	うろまつの
	うしろえ	うろた友
りやん町やど	平野屋小三郎	
	らぶら	うろこ
	ごもん	うろこ
らぶら	うろこ	
	なご	うろこ
らぶら	うろこ	
らぶら	うろこ	












	うしろえ	うろまつの
	かめご	うろまつの
	あらま	うろまつの
	あやめ	うろまつの
	うしろえ	うろた友
りやん町やど	源本屋ごら	
	かいら	うろまつの
	うしろえ	
りやん町やど	扇屋友九郎	
○小天神の分		
	みらく	うろまつの
	あふよ	うろまつの
	あやめ	うろまつの
	うしろえ	うろた友
りやん町やど	平野屋小三郎	
	らぶら	うろこ
	ごもん	うろこ
らぶら	うろこ	
	なご	うろこ
らぶら	うろこ	
らぶら	うろこ	

										
ぬげ	見ろ	むらぐえ	とらふ	やうて	とらふ	とらふ	とらふ	とらふ	とらふ	とらふ
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら



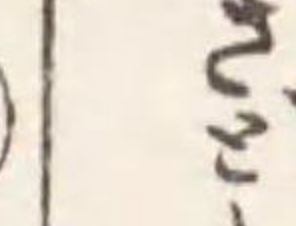
										
りん	る	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら

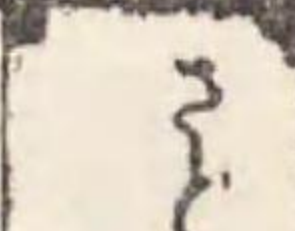



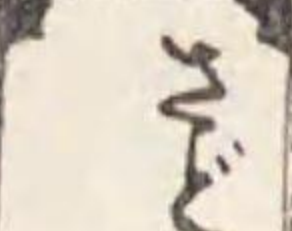




										
花	十	み	志	○小天神の分	ろ	あ	ろ	ろ	ろ	ろ
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら






										
ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら
まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら	まら








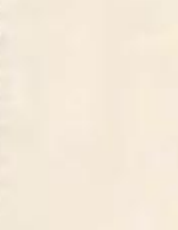
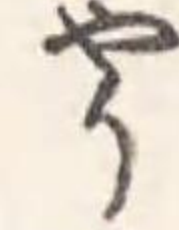
	きぬえ	きぬえ
	くろえん	くろえん
	なごころ	なごころ
	ふらふら	ふらふら
	くろふら	くろふら
	やて	やて
	大和屋	大和屋
	おん	おん
	おん	おん
	おん	おん
	おん	おん






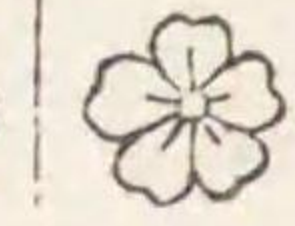
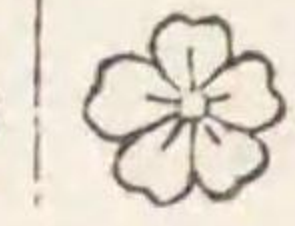


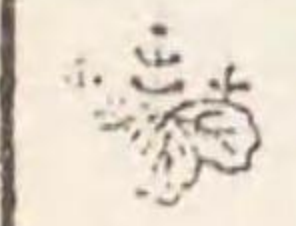

	ほろ	ほろ
	おの	おの
	おの	おの
	おの	おの
	おの	おの
	おの	おの
	おの	おの
	おの	おの
	おの	おの
	おの	おの


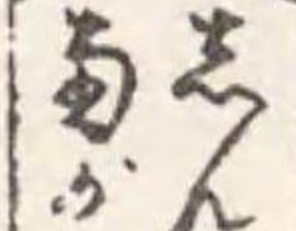

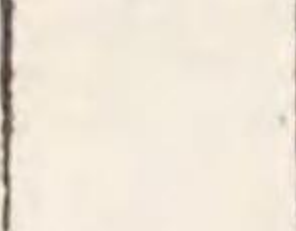


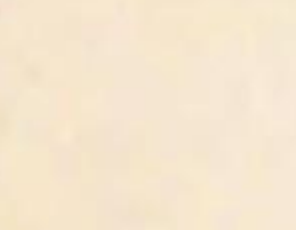

	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり







	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり
	りり	りり




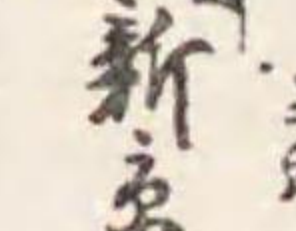

	くしん		小せん
とよみ野	丸屋を介		さみの
	くろと		さみの
とよみ野	おとわ		さみの
	おとわ		細屋八五郎
とよみ野	おとわ		金屋五一
	おとわ		和泉屋三郎
とよみ野	おとわ		


	新がう町ゆい	垣屋彦舟
○小天神のち	そのんら	さる
	小志まぶ	さる
	えんじま	さる
	くしん	さる
	小じま	さる
	みろの	さる
	たまご	さる
	ふふの	さる
	ゆづが	さる

	いろは		とらひえ
とよみ野	から		とらひえ
	ここよ		きんご
とよみ野	とらひえ		清水屋小右衛門
	とらひえ		ちく
とよみ野	とらひえ		とらひえ
	とらひえ		伏見屋彦舟
とよみ野	とらひえ		










	とらひえ	さる
	とらひえ	さる
	とらひえ	さる
	とらひえ	さる
	とらひえ	さる
	とらひえ	さる
	とらひえ	さる
	とらひえ	さる



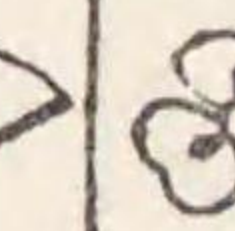

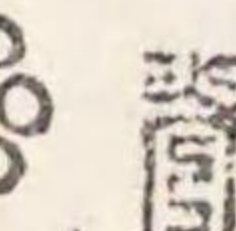
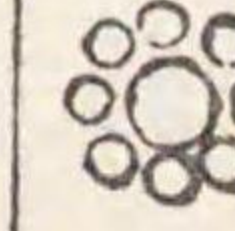

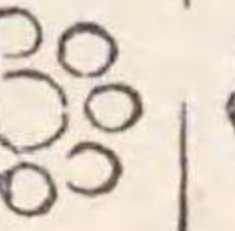
	あらぶ	あら	あら
	久	久	久
	久	久	久
	花	花	花
	玉	玉	玉
	お	お	お
新	中	中	中
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ














	久	久	久
	久	久	久
	久	久	久
	久	久	久
	久	久	久
	久	久	久
新	久	久	久
新	久	久	久
新	久	久	久
新	久	久	久

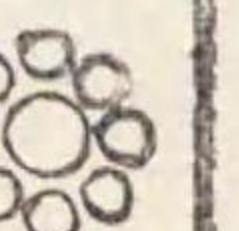


	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ

	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ
新	あ	あ	あ

	いりり
○ 女部屋之分	
○ 執事町九二軒	
	二部屋跡之良
	東屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	木屋定七
	仔細屋松平
	二部屋跡七

	二部屋跡之良
	近江屋久七
	本屋跡之良
	二部屋跡之良
○ 作渡河町五軒	
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	白米屋跡之良
	大和屋跡之良

	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良
	二部屋跡之良

	和泉屋跡之良
	紀伊屋跡之良
	紀伊屋跡之良
	井筒屋跡之良
	大和屋跡之良
	東屋跡之良
	本屋跡之良
	和泉屋跡之良
	井筒屋跡之良
	丸屋跡之良
	朝屋跡之良

	佐治屋本
	四 ころも
	○佐治屋本
	河内屋本
	四 ころも
	兵庫屋本
	四 まくら
	三浦屋本
	四 まくら
	堺屋本
	四 まくら

	大坂屋本
	四 まくら
	長門屋本
	四 まくら
	堺屋本
	四 まくら
	大津屋本
	四 まくら
	兵庫屋本
	四 まくら
	三浦屋本
	四 まくら
	堺屋本
	四 まくら

	越後屋本
	四 まくら
	和歌山屋本
	四 まくら
	辰巳屋本
	四 まくら
	○新玉屋本
	四 まくら
	磯屋本
	○茶屋本
	四 まくら
	○新玉屋本
	四 まくら

	四 まくら
	佐治屋本
	四 まくら
	長門屋本
	四 まくら
	堺屋本
	四 まくら
	大津屋本
	四 まくら
	兵庫屋本
	四 まくら
	三浦屋本
	四 まくら
	堺屋本
	四 まくら

茂原石	井原石	福山石	沼石	富石	沼石	河内石	山城石	木原石

新原石	民原石	沼石	廓石	虎原石	東原石	沼石	沼石	沼石

沼石	沼石	沼石	天沼石	沼石	沼石	沼石	沼石	沼石	沼石

跋
 たるもの子母の底
 乃とくさるは深
 流竹と取敢とさ小
 集ひ生ひの清の
 主はさへき君母
 願市先見る月小

君粧俚評
 途中之式 座敷之容儀 呼立之太夫
 禿之利發 引舟之掛引 藝子牽頭之容儀 仲居
 取持并ニかしぶりの呼出 遊客之幽趣 粹之辨
 中古好衣裳 夕霧の文并衣裳 家々珍雅名物
 里詞篇 遊女門出之故實 揚屋茶屋名寄 商
 人名物名寄 已上
 君粧俚評

京の女郎に江戸のはりをもたせ長崎の衣裳をきせて大

増補之分

法國廓想名寄
 宝真後改
 史考へおぼひ
 新改は
 月千軒 全一冊
 八月廿五日
 系統を所通

坂の揚屋であそぶべしと古ひ云傳へなり尤揚屋の
 無雙はいふも更なり餘國大坂の上にとん事かたし又
 女郎の心ばへも京の弱なめのよだれをなめず江戸の剛
 張を離れ長崎のばかり敷俗好みをきすやつはり大坂
 の女郎に大坂の衣裳で大坂の揚屋であそぶべし元來大
 坂の氣性變化早き土地にしてめづらし事のうつり早く
 又質直の片氣有ツて離れぎわすみやかなる地也よつて
 太夫の氣性もおのづから京江戸の中庸をとりて情深く
 おもしろし是粹客の愛すべきこと、の事なるべし
 深さ知れ水の淀みの白蓮花
 笥 深

すかくまひ救ふのせりふも有しよし是等ハ格別の情にてまゝ有まじき事なれども壹人是をおこなふ時ハ萬人其情を感じ移さぬ事もあらじまかし猥に雑色事をせぬゆへ此廓に心中じやのイヤむり殺しのといふ沙汰なし餘の里に異なり雲上の情おほきがゆへなり

七夕や切ツた小ゆびほどの星ぞ 田 勢

途 中 之 式

太夫途中にて逢ふ時ハいかほど懇切なる客也ともみちをかたよらす只アとばかり云て引ふね禿のうちを客に付ケ揚屋迄送り我は行べき所へゆきやがて事すみて客の方へ來るべしむさとまたしきことばをいださず威有ツて猛からず片頬の笑の其味みはいよゝ一念のおこるものなり

雨の梅日和の柳わらひく 巾 絲

座 鋪 之 容 儀

太夫座敷へ通る時ハ餘の里に異也藝子花車に席をゆづらず上座して客に付そひ温潤含蓄の體相ハ餘の里の美君に比れば玉と水晶のちがひありたばこつぎすひがらあけるまですべて穢たらん事ハみづから手をやらす禿を遣ふて

是を辨ずいとうやゝし九夏炎熱の頃も汗かゝすみづから團つかはす禿あふけハ仰まざりなり立冬素雪の寒き

夜も火鉢にすりよる事なしよくも身を持せしものなり座敷にて牽頭辨慶のおかしき戲多しといへども大にわ

らはずまれにいさゝか片頬にゑみをふくむ事也ゆへになれくならぬ新客ハ扱もつんとしたものと心に不興もあ

らんかあばらくこらへ給ふべし席酒 園に及び錦茵鴛鴦のふすまの中に打てかへての私言身をまかす感通に虚

々實々のまこなしにいかなる孔門の徒なりとも□□□打ぬかすべきものなり揚約束の泊りにハあゝめ

きぬくもむかひ竹駕にせかれす曉のむつごと今更にたつふりとくひたるもの也

美人不相答 一坐爲金錢 莫謾愁呑酒 閨中自有傳

月夜とハ別のものかや月今宵 巾 絲

呼 立 之 大 法

太夫日柄約束有て揚屋に居るを外の揚屋の客よりかりに來る事有時ハちよと耳おかしなど私言ハ引ふねを跡へ殘し外の揚やへかしに行てひまどる事あれバ約束ある揚屋の小める呼立に行なりあるひハ爪木野太夫さあ衆衆大吉くくくこわた大吉こわたよばしないはあななどいふ太夫の名一聲禿の名五聲引船の名二聲と定たり答へハをくくとばかり云此呼立の聲聞ゆれば禿太夫に音なひ歸ることをすゝむ此時お客の心もち殘多しと夕鹽の引と

めん袖もあら浪の立かへる跡はまつかぜばかりや残るらんく

いぬめりの春ぬめらすなうなぎ魚梁

香 園

禿之利發

幼より姉女郎の世話と成り文の小使ソレ下駄なをせかんばり聲で古いはやり哥うたふて歩行をたのしみ行違ひになぶり事いへば其返答の利發さへ禪宗の小僧と棒の折る對物なりやがてお傾城と成る御出世のほうふり蟲が蚊になるとハ格別の事なり

交りを紫蘇の染たる小梅かな

秋色

弓となる筈ハ別のそだちかな

去來

引船の掛引

素顔に島田わけ黒繩子の前帯はさつはりと風俗よきもの也新艘太夫の進退のかけ引する故引舟と號る也太夫に壹人ッ、付添襟裾のつくろひより客方のかけ引まで萬事引ふねの役なりもし揚の客早く歸りし夜ハ禿ハ三更を限りにおき屋へ歸り後朝迎ひに來るなり太夫ハ引ふねと揚屋にて寐る也

短夜を二階へたしに上りけり

來山

藝子牽頭之容儀

藝子牽頭ハ座席の興を催ふすものゆる三味線役者物まねあるひハ舞維興の馬からより二疊廻り迄時によりそうくしき事といへども兼て此くるわハ花やかにして古風有たいこもゑり裏に紅かけるいやみもなし別て近年妙林坊ハ其黨の長老にて高名なりしが念佛道に入天王寺一心寺に草菴をむすび行ひすまするたる

名月や釋迦の牽頭は五百人

渭北

仲居之取持

此くるわにてハ初ての客人ハ太夫を借て見る也此時仲居壹人づ、太夫の名を呼て盃をす、める事あり何べん見ても見あかぬ古雅に優美なるもの也すべて仲居も姿ハ花やかにおとなしく酒もよくのむなり座敷の切上床入の時分を考へはたらき多きものなり又起番として一夜に壹人ッ、をき番して夜中客用を辨すなり諸客無氣にすて歸るべきにあらす身仕舞部家の評判に大極上上吉上吉の沙汰に預るべし

早かろがやかましかろか齋かな

立嶋

又大夫仕合あつて身請相濟夫からいづくの横町いづくのうらに住べくと妾宅のふしん造作の間揚居に預られ二枚櫛も改めてままちりめんに後帶臺所の片隅で琴花お茶よりぬひもの習ふ有様の天人の五衰にあらでどこやらおとなしく水ぎへの立様體のほめに言葉なし夜ごとく一雙の玉手千人枕半點朱唇萬客嘗とうかりしつとめも引かへて宵から寢次第今宵の旦那の見えやすくと松の戸さでさうがにのくものふるまひもそれかとまつ心ねへ早里はなれし心ちかも早う住所の出来よかしと待らん心へ

假の浮世に揚屋ひろすぎ といへる古誹句によく似かよひしもの歎

遊 客 之 幽 趣

初ての客人權威我慢の鼻を高ぶらせ阿彌陀も閻魔も山吹の花色ころもでうなづかせんとすべからず夫も牽頭末社にハ請よき事也されども全盛の大夫の目くれぬ事とてそらさぬ顔でぬしやたれとへどこにへす口なしにしてふつてふつてふり付るもの也又諸客大度にてれぬやうにすべし前々より傾城買と灰吹の青を賞翫することく床柱にもたれたり扇を心かけべしとかくきたなぶれたる悪づれ嫌ふ古誹句に 祇園町まで我からだぬすみ出しといへるいましめありて豪傑のする所にあらずぬきもの青梅でちよこくばしりもゆるさぬでなけれども願くハ衣服もあらため箱ちやうちんで通ひたきもの也又此くるわにまわし男などいへる風狂ハなし是等を相手に臺所

酒香氣の粹遣ひハ逆も床柱づれにハなるまし伊左衛門が紙子着て来たハ大あそびの鹽ふんで来た故なるべし粹ハ推にておしはかりおしおよほすを吉粹と云里遊の萬客此心を眼目とすべし

粹 の 辨

粹ハ字彙ニ須允切音ハ歳不雜也易文言純粹精也ト云々ざつならずとも云くわしとも云へり萬くわしきを以て粹の骨張とす粹が川まの川をはじめ粹を解事おほけれハ爰にあけず又佛在世にも粹あり大通知勝佛ハ三千の御佛の中にして獨悟るまし成佛の因位を得まじと願をたて給ひけり是大に悟るとやいはん粹とやいハんよつて粹に大通の字あり爰を以て推す時ハ女もべにおしろいを飾らずしておのづから分明なる男もいやみを飾らず太平樂をいはずして萬くわしく解さばけ自若の體なるを粹とやほめん又仁者ハ樂山といふ所にもうつるべし

法華經二十八品之内人記品を

法眼源承

我ねがひ人の望をみつしほにひかれてうかぶ浪の下くさ

とよめるも粹の所へ引見るべし又大通佛の悟りを

開かぬも花の名はありハツ手花 田 勢

されバ花を好みて實を好さるハ粹の所へと、かす手嶋流の本心々々と沙汰有も粹の場なり

Handwritten text in cursive style, likely a letter or document fragment.

中古好衣裳

太夫の着類當代の質素を守るといへども中古其好みの風雅なるあり一
二を記す武藏野に金物の燈籠ひまたるうちかけあり又金目貫盡しのぬ
ひ有是等着用し立居のせつ金物ゆゑすれ合鳴音しておかしかりし又佛
菩薩の後光盡しぬひありこれら粹客のこのみ雅にして美麗也近代六月
祭禮ねりものに大盡の羽織ぬひにをもとの實を珊瑚珠にてぬひまたる
有高名のものゆゑあるす

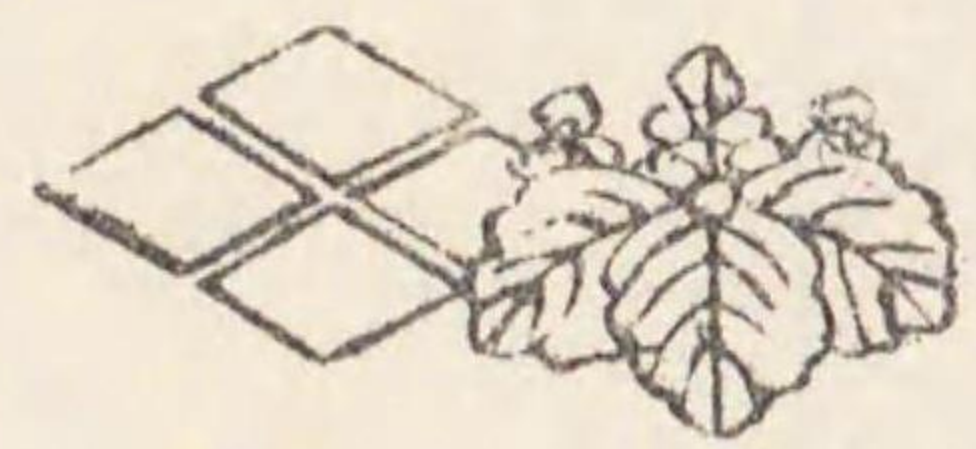
世の中よ獨活芽鯛の眼花盛り 巾 絲

夕霧文

前に文をつらねて夕ぎりの萬藝をあふぐむべなるべし絲竹のわざの跡
残るべくもなし只文の残りあり其能書雅文小紫に肩をならべんものか
左にうつす

Handwritten text in cursive style, likely a letter or document fragment.

右の奉書地にて一軸となり有之外黒塗箱紐付金銀金物



桐の戸の夕ぎり

紋のよし
箱之上に
金粉にて

十七日 八十さま

おんもと御返事

さりより

澹 標

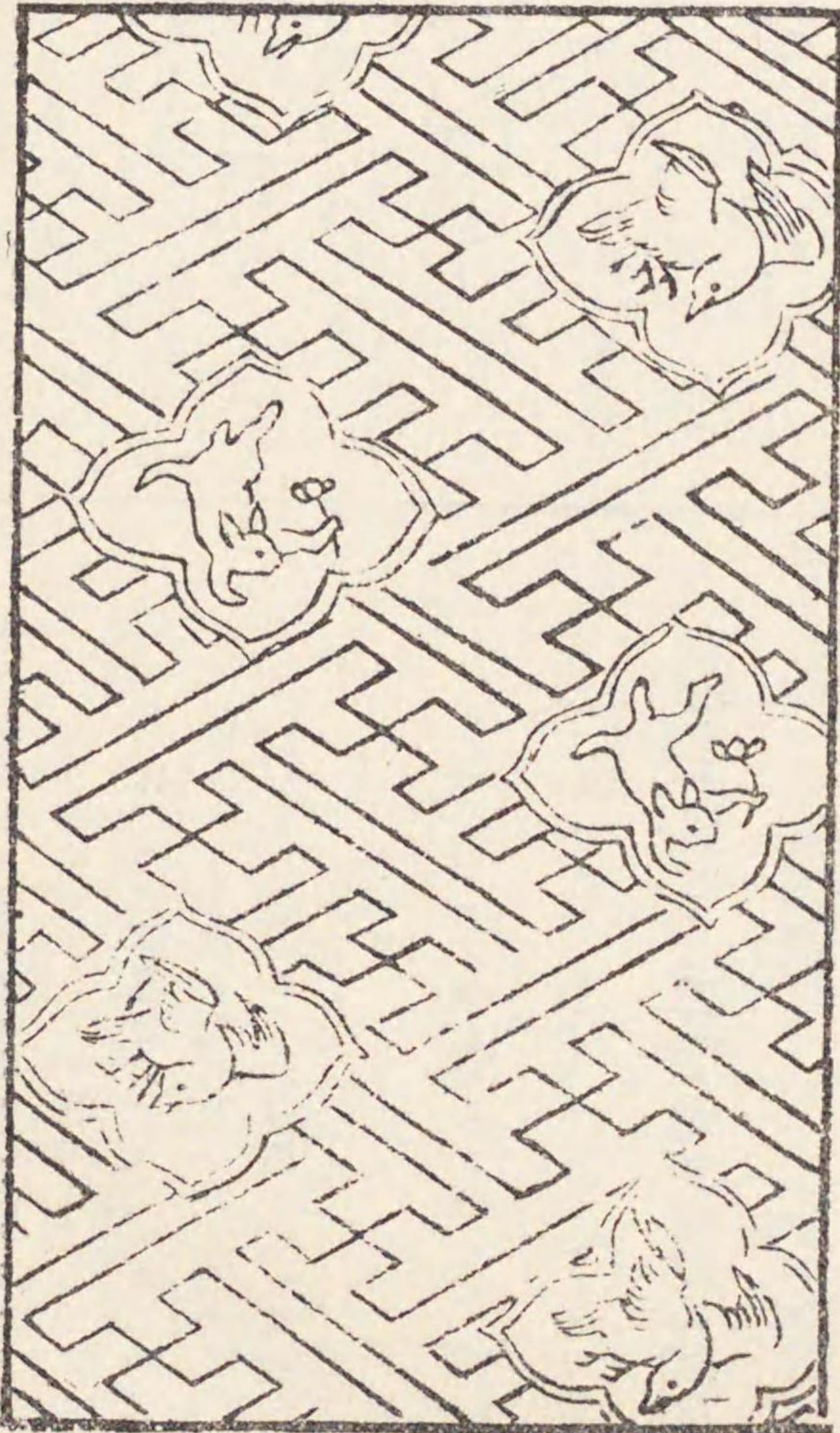
右書付け萩原殿御筆のよしかくいかめしくも御染筆被爲成下り事傾城の身として類ひなき事なり誠に日本國中お
さな子までも聞傳ふほどの國色高名色の外に感ある事どもなり文の名當八十様とは阿州の客人とやら播州の客人
とやら聞傳ふ

九〇

同 襠之模様

唐

織



地薄玉子 浮紋 鳶 茶 白絲交り

地厚くして仕立小サし裏通藤色縹子袖口ともなりいたつて古風に結構なり近代の花を好みて實を不好との格別也
右ハ扇屋四郎兵衛が所持也

家々珍雅名物

吉田屋喜左衛門方に夕ぎりの文あり堺何某の方に枕の中にありしと云々文つゞきがたし
名當ハ

なか様

夕より

と見えたり
又夕ぎりの手道具として料紙硯箱あるひハ鏡等ありいづれも高蒔繪古物なり又夕霧追悼の巻あり凡三千章あり其中
の一二を記す

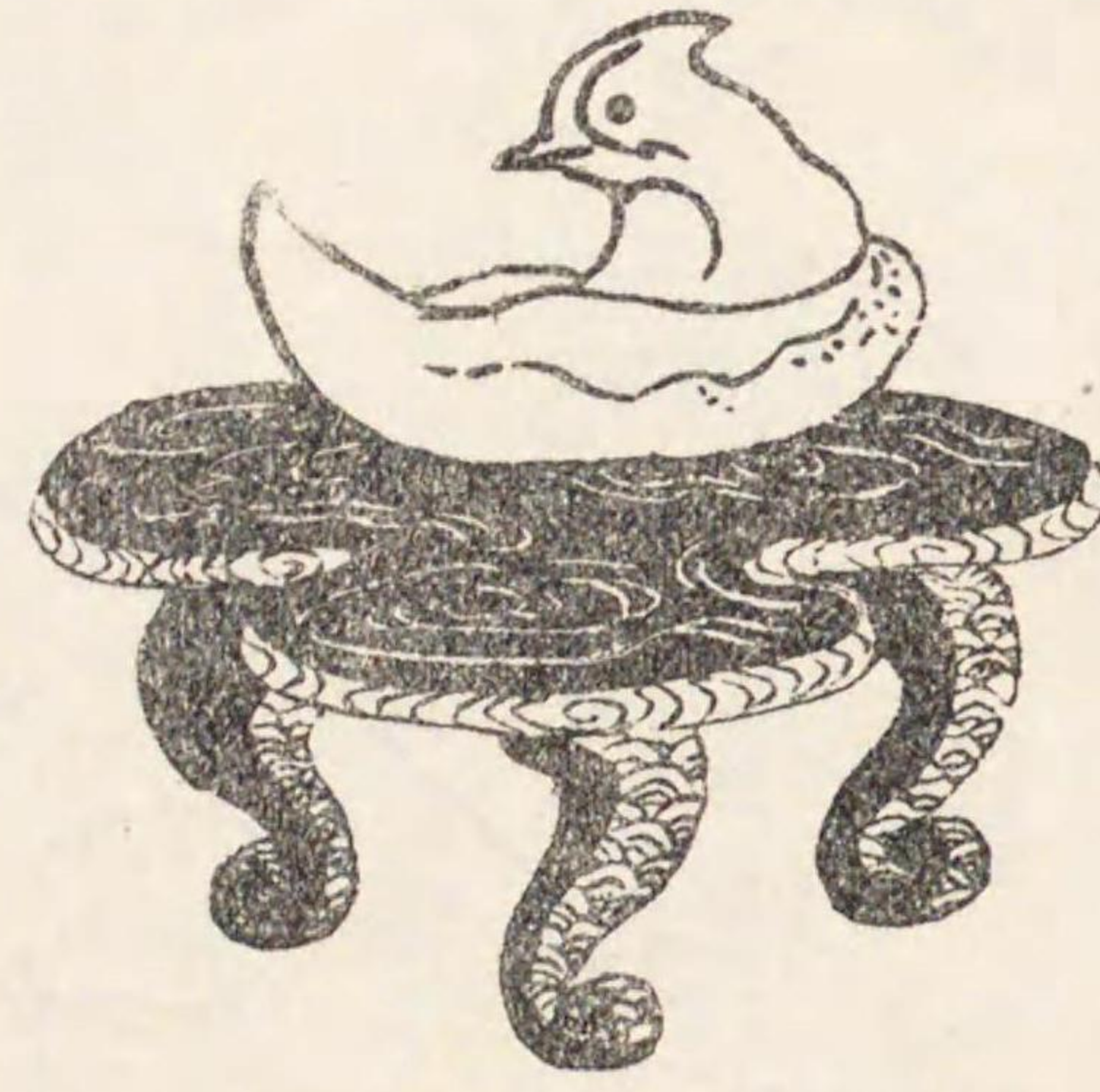
夕ぎりに物うくひすやむせびなき 元 順
夕への霧 朝の霞 消ごくら 由 平

又柳里恭の醉書一軸多し名たゝる豪粹名たゝる青樓席上の醉書にやあらん

澹 標

九一

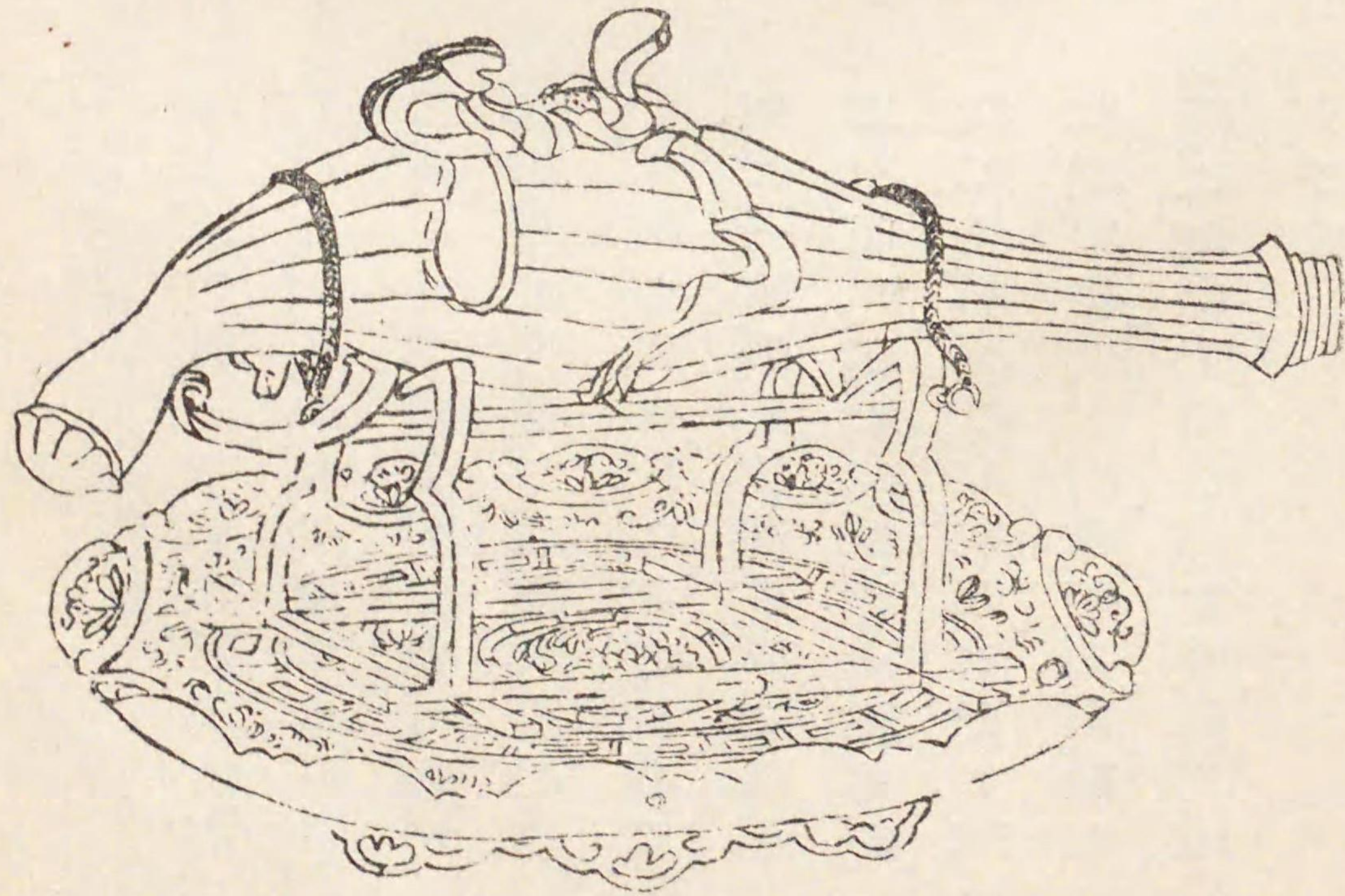
器
標



住吉屋重兵衛方に鮑盃あり自然而妙也

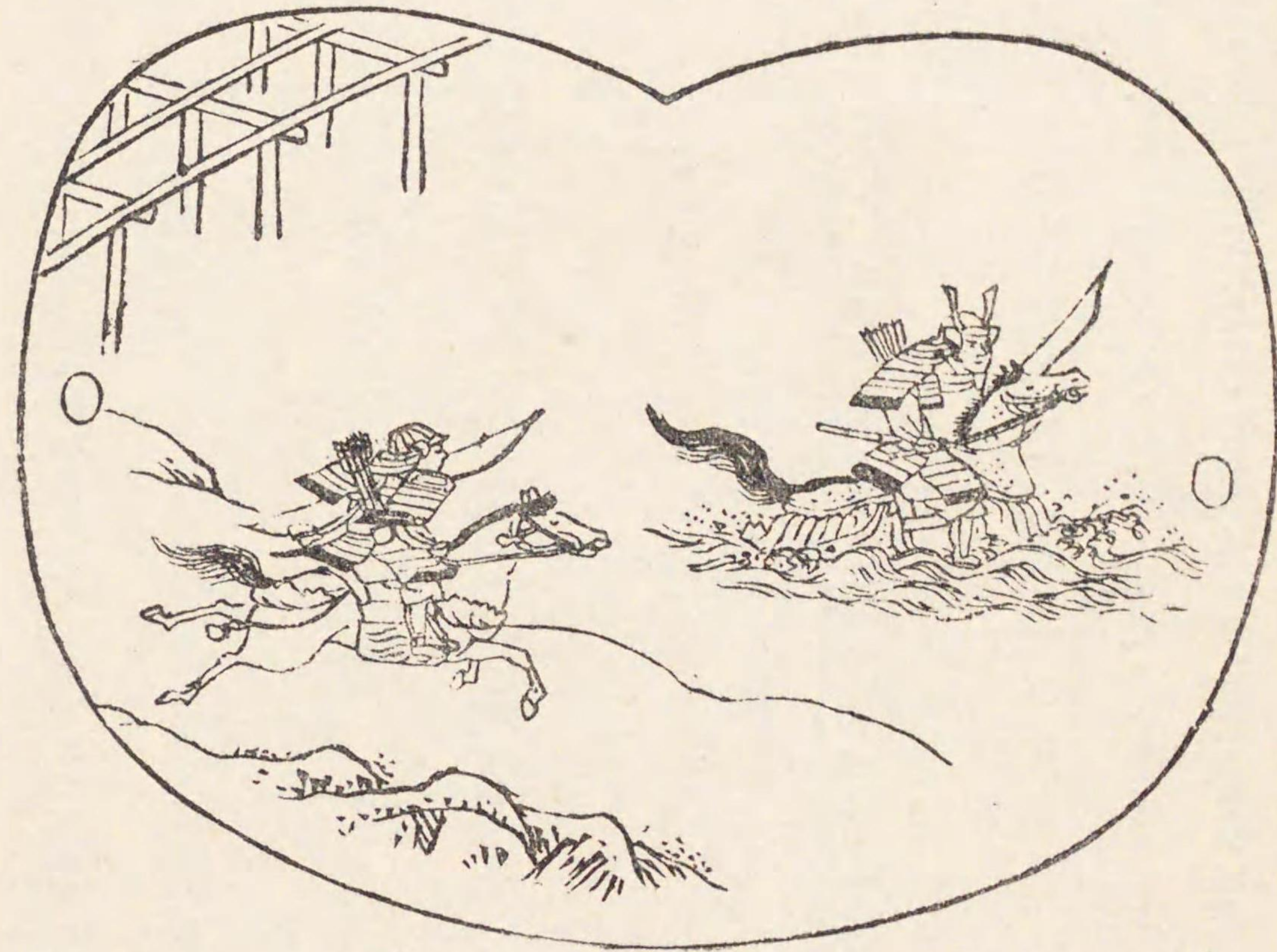
此盃をもつて吞
ためしともかな
ふた、ひわれぬ
もへて種がしま
住半の名をバお

ケ嶋盃あり舎中
大盡のおくりもの
也中古打われしを
ふた、び長崎にて
阿蘭陀つぎにせし
添文あり文畧奥に
狂哥ありから崎の
松の意をとりて



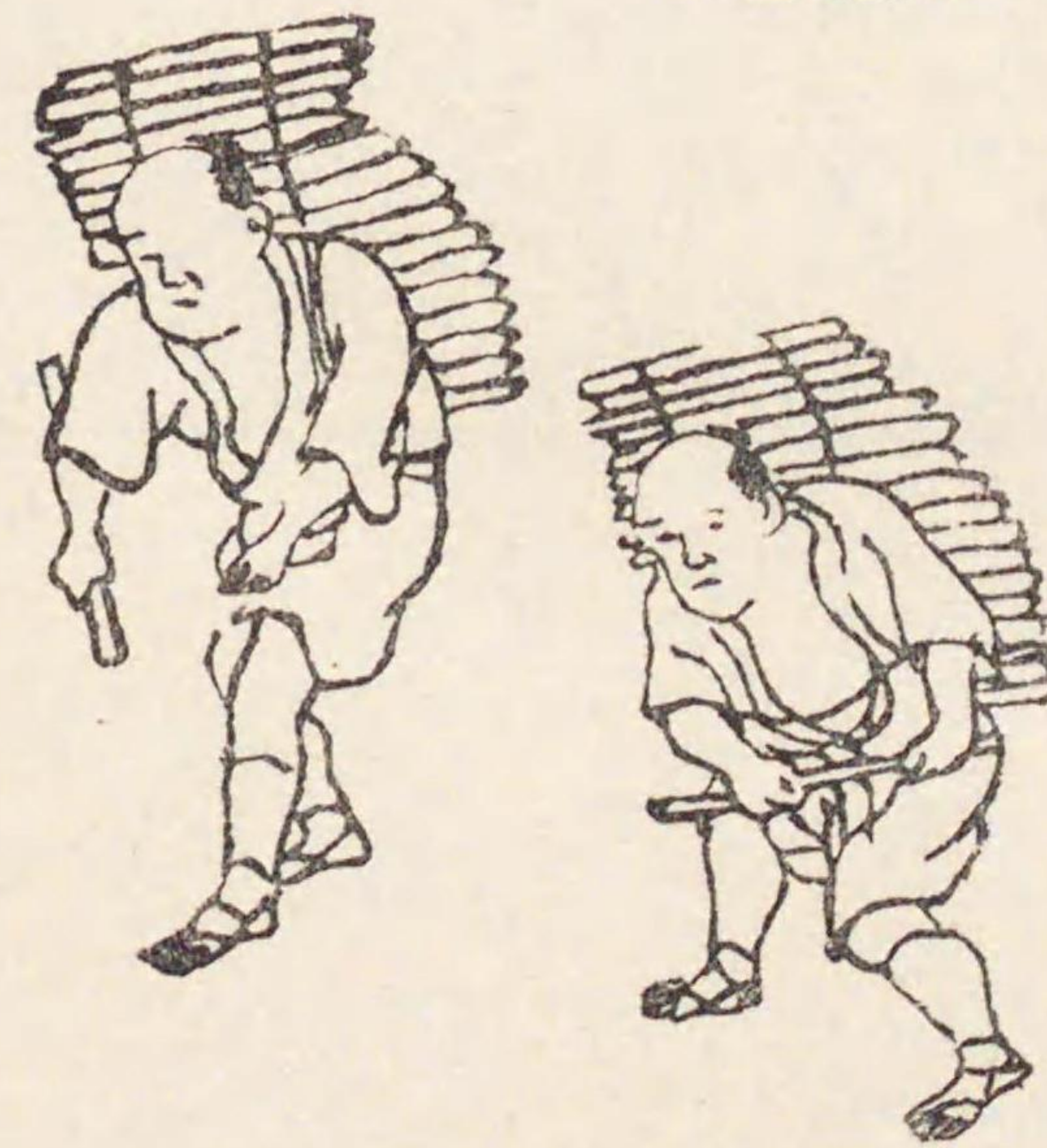
九三

筆野狩襖間の表 方郎三郎四屋木茨



器
標

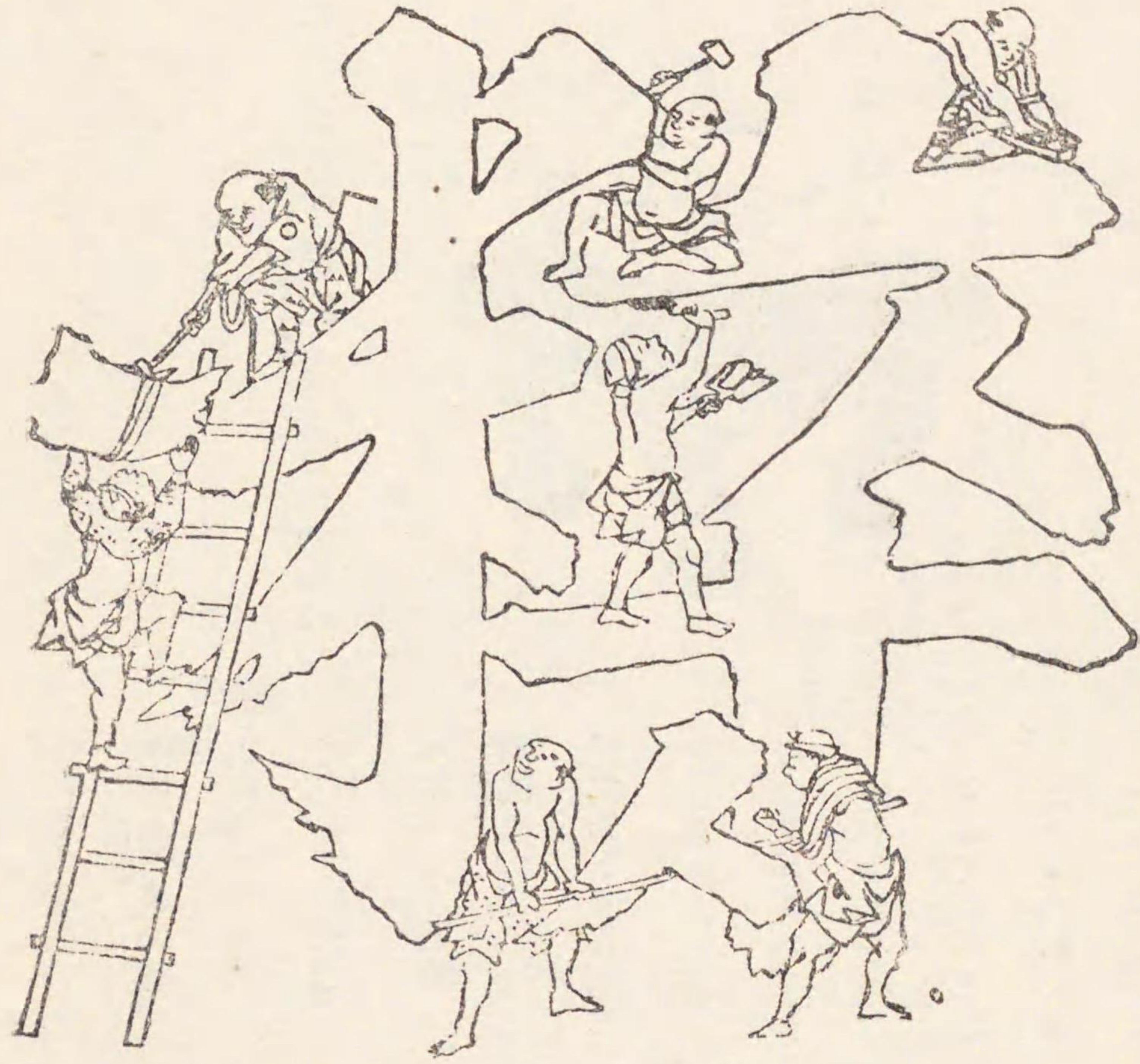
同 奥座敷妻戸に
狩野筆
古物雅也



九二

し強客の帳にあるす也

住半方額李佛大盡の自畫にて雅也燒失去て今ハなしといへども粹文ゆる爰に記す



粹之大不以一義盡也粹爲言醉也人生不可以有不醉又推也推已及人之謂也又水也隨英器而澹之謂也又帥也元帥大將之謂也又吹也善作鼓吹者之謂也又衰也一擲千金財寶相滅之謂也又陞也陞遠邊也總登樓最豪盛者九州奥州之人其謂之乎大體兼此衆義知之曰醉而不及亂此謂之於吉醉嗚呼今世稱粹者何人乎哉

或人問て云此外すいの字あり

炊ハ如何答て云かしくと讀てふたり手鍋を提るの意 又問錐確垂翠誰の字おのゝいかん

錐ハ もむがごとく腹立る客歟

確ハ 粉にひくごとく利つよきをいふなるべし

垂ハ 前垂の垂の字氣のつく客をほむるのいひか

翠ハ よわひのみどりなるをさすならん

誰の一字ハ 尤妙くいはゆる誰に見あよとて紅粉かねつけよそのたれならん穴賢々々

右ハ隴易居士の八分字を以て見事に書おかれし也可惜々々今かなを以てすハよめやすからんため傍訓す

住半方額王羲之の瘞鶴銘を金箔の石摺にして文字の中又金銀の石疊形あり文ハ目出度文字を撰て並たり尤その

中寂寥の二字あり其二字をわざと蟲食の闕字にたたり商賣柄さびしきと讀二字を闕たる事趣向の眼目なり尤住半

方ハ李物子を初め萬翁宗匠茶雷巾緜御苑子等其外いづれも誹家の粹客ヒイキ多かりし故かよの粹好み物多し高

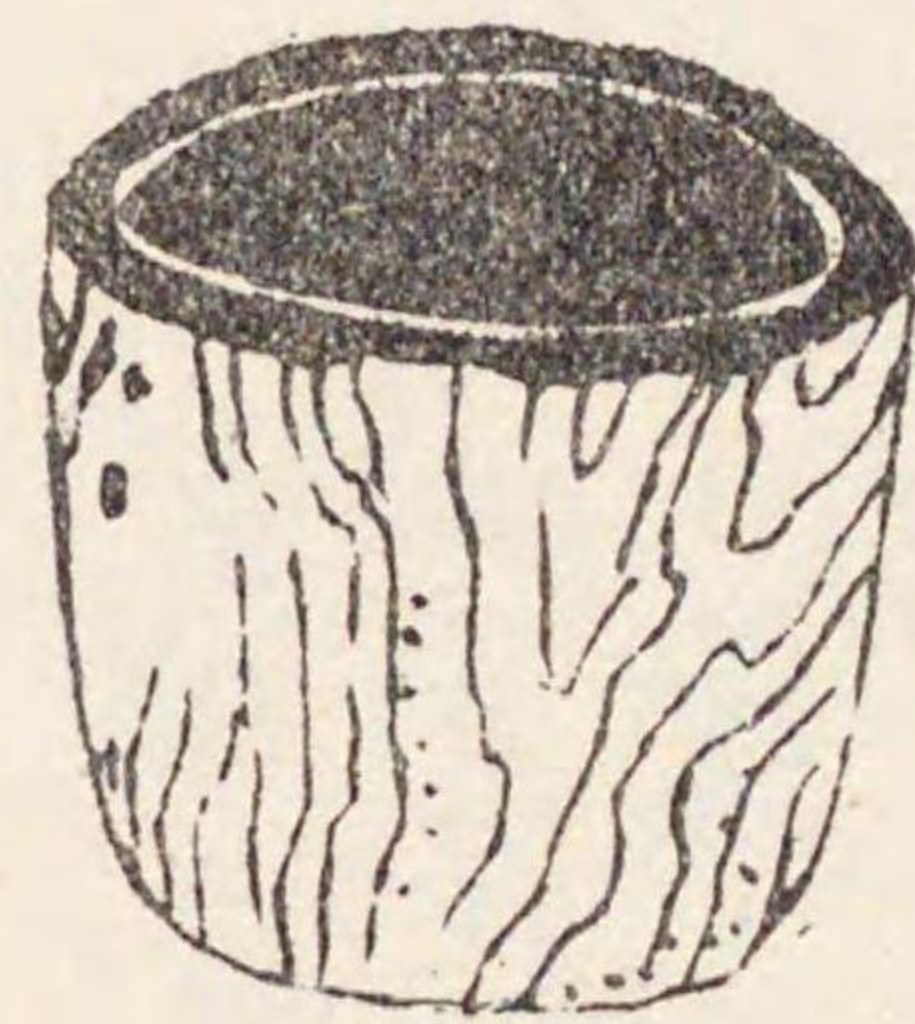
嶋屋長次郎方奥庭築山に猿の形なる石いつのほどよりとちらずありしにふと人のきよめあがむるより願ひ事もき

くよしにて毎朝里の人々參詣す中古此石をぬすみとりて外へもち行しにいつとなく又高嶋屋の庭へもどりあり

しと云傳ふ左に圖す

住吉屋長四郎方に能因法師花の井の釣瓶あり亘り六寸ばかり丸形くりぬき木ハ桐か合歡か内黒塗花生と成有高槻
邊の客人よりおくられしよし文に

立寄て花の鏡にかけみればまゆしろたへにわれ老にけり
右ハ能因法師の哥なり其井のつるべ也といふ事をちらせる添文なり



里詞の篇

廓中すべて太夫すと呼は白藏主などいひぬし賢主など、あがむる言ばなり

なませんか

なんか上ノ器
言ナリ

ちよとみな

どうでます

いつこゑな

なめくさり

きらひ

すかん

どうじやある

是等夫々家々の言葉にてわかちありくハしくハ通ひて聞ゑらぶべし

御もとり御かへりと
言をいむ

もしおちかひに
門送送りし
時のことば

あけて筆に盡しかたし

遊君出門之故實

いにしへ此廓の東西の大門に番所を建て遊君を他所へ出す事をゆるさず

今ハむかし此里のたはれ女ある客にふかく契りしがさ、ハる事のありて通路もかれくになり文のかえしさへせ
ざりけれハ行て今一目見まほしくおもへども門を守るもの堅く禁しめけるにせんすへなく關の戸を叩て泣ハ水鶏
かわれかなとかこち悲しみけれハ其まゝとある心に感しゆるしていたしける其より後門出といふ事はじまれり今
ハ門も數多く遊ひ翫水にたはれ女をいざなひ行こともたやすくなりにける

△但シ揚屋茶屋より番所へ出るよしをつけちらせバ直に帳面へ何屋の誰門出と記し置也

浪花十二月畫譜

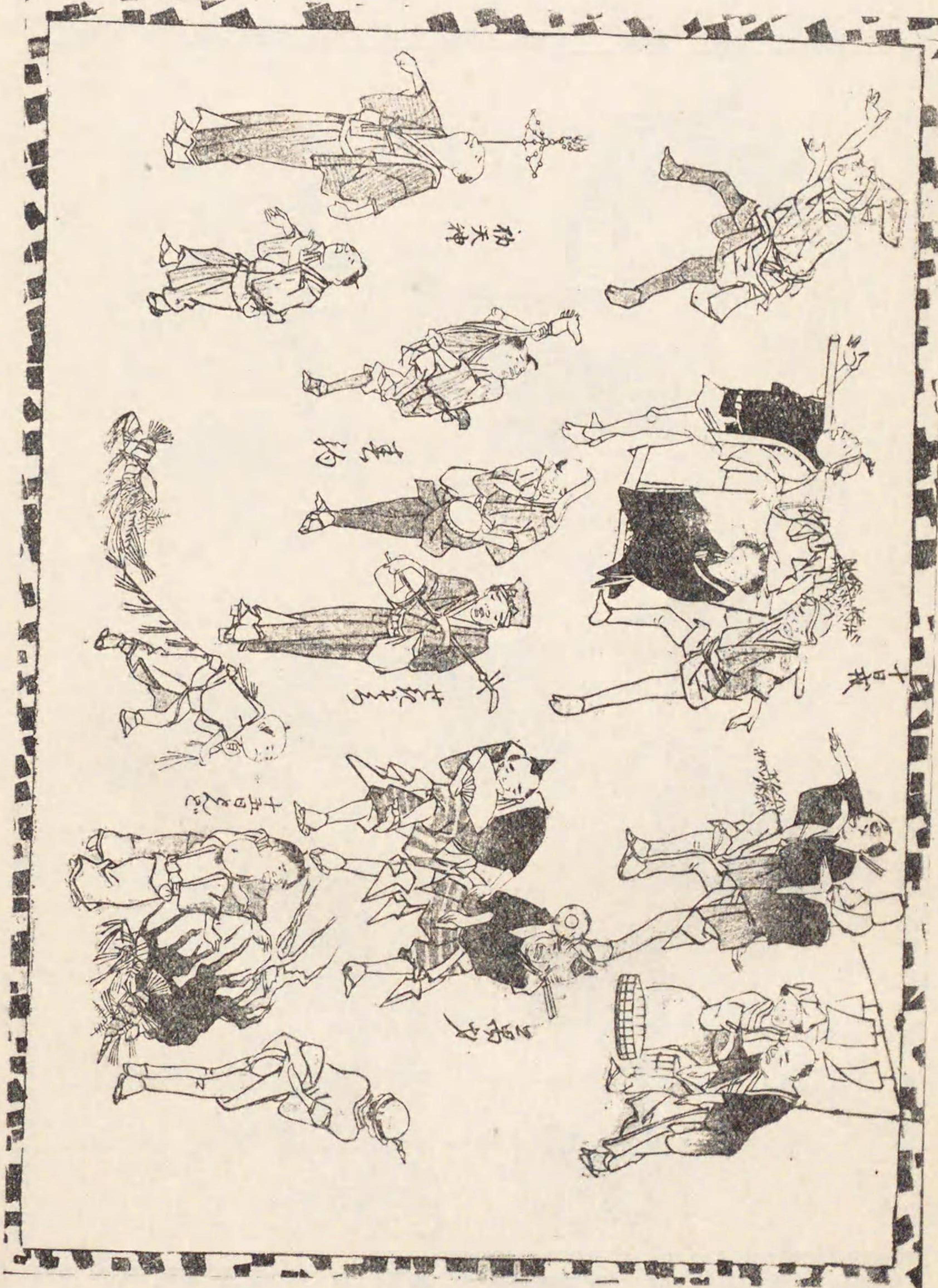
解題

一 『浪花十二月畫譜』は、狂言堂春のや織月の述作。板元は金生堂。嘉永二年（我が二五〇九西曆一八四九）の開板。上下二帖に分れてゐます。

一 元日の雑煮より筆を始めて年末の御歳暮配りまで、苟くも浪花に於ける其の當時の年中行事を順序を追ふて書いたもので、中には考證の筆も交つて、天保から弘化嘉永にかけての大坂風俗の寫生です。

一 『浪花十二月畫譜』との書名の通り、本書は繪畫が主で、説明は從となつてゐます。この畫は誰の手に成つたか知りませんが、一種のユウモアを帯びた才筆は、當時の大坂人の一面を巧に描寫してゐます。この原畫の趣致を成るべく如實に傳へたいために、製版に際し、ハイライトプロセスを用ゐましたが、原畫の彩色を出せなかつたのは遺憾です。

一 著者狂言堂春のや織月については、本叢書『演藝篇』に、その傳記を發表することに致しました。底本は三宅吉之助氏の愛藏本です。



雑煮

東鑑 脱漏ニ云嘉録三年四月十六日追日世上頓死のるい甚多くこれによつて餅を春きあるひ粥を煮て食ふ所々此こと有今夜御所中これを始めらるゝといふ夫饅は脾胃を養に以て保ちかためるといふ吉語を取て和訓モチといふ三都家々におゐて正月元三雑煮餅思ひくありて加味ちがふといへども大畧田畑山海に生ずる物を加へて祝ひ食ふ色々取ませて煮るがゆへに雑煮といふこれ神代の遺風なりといふ江戸などにてハ畑菜に鰯を切肉をくわへて醬油雑煮を祝ふ又家によつて餅をあぶりて食すこれをホコラカスといふ物事を殖し益といふ縁語を祝して斯のごとしと又齒がため祝ふといふ齒をヨハヒと訓て天壽を保ちかためるといふ祝言祝食なり

年酒 神代のむかし祇園素戔雄尊の酒を以て稻田姫のために八股のをろちを撃亡し給ひて諸々の邪惡を避給ふ縁語をもつて酒をサケといふ夫酒ハ愁をはらふ玉筥延壽水と稱し酒ハ百藥の長なれども豪飲なれば酒の爲に身をわすれ家國の滅亡におよぶ慎むべし狂哥に 百藥のちやうとよいほと限りして飲やうたへや酒に亂れ春の屋 歳旦家内妻子眷屬打あつまりて年酒を汲かわすハ互ひに無事に年をかさねて和合の姿をむすぶハ芽出度との至りなり殊更年酒に用ふるを屠蘇酒といふ死たる者の蘇りたるといふ字訓にて春に成たるを蘇りたるも同意と祝し飲なり是嵯峨天皇の御宇ニ始るといふ

七艸 七種の若菜を取調へて産土神氏の祖神并に三寶荒神始め先祖父母に供へ次に食すれば春の氣病夏の疫病秋の痢疾冬の黃病も病ず又人の七魄を定むと若菜はナヅナ ハコベラ セリ アオナゴキヤウ ホトケノザ スバシロ 正月七日に七種の菜羹を食すれば一切萬病なしました邪氣をのぞくと長明が四

季物語にあり又此七種を囃子て唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬさきといふハ諸鳥のいまた來らざる以前に七種を摘來れ然せざれば糞などのけがれ有てハ志からずといふ事也

羽子板手毬遊 羽子板を胡木の子遊びといふて羽根をつき侍る刻ハ幼兒の夏日蚊に喰れぬ咒なりといふ秋の始に蜻蜂といふ蟲出て蚊を取くらふ胡木の子といふハ木連子などを蜻蜂頭にして羽根付てこれを板にてつきあけれハ落るときとんばうかへりの様子なり是蚊の咒なり又ハ幼兒に仰むかしめ口を開かしむるは寒毒を吐き青陽を飲しむるの一助といふ黃帝惡賊蚩尤カ頭を取て之を毬す今の毬杖これなりと彼例を以て漢土年始に此故変を用ゆ國中無事なりよつて日本國其例を學び年始に毬の遊び毬杖を打といふ幼童の戲玩ながら春陽をもとむるの一助といふ

初賣 正月二日朝子の刻頃より商家をのく賣物を我一と得意へはこぶ車の天に轟く地に響く事雷電の如き事聖代の恩澤繁華の爲す處なり

初風呂 同朝寅の刻市中の湯やより太鼓鉦又ハ螺貝を吹立涌たく何風呂か涌たくと大勢觸あるくこと賑ハし是も繁華都會のいさをし成べし

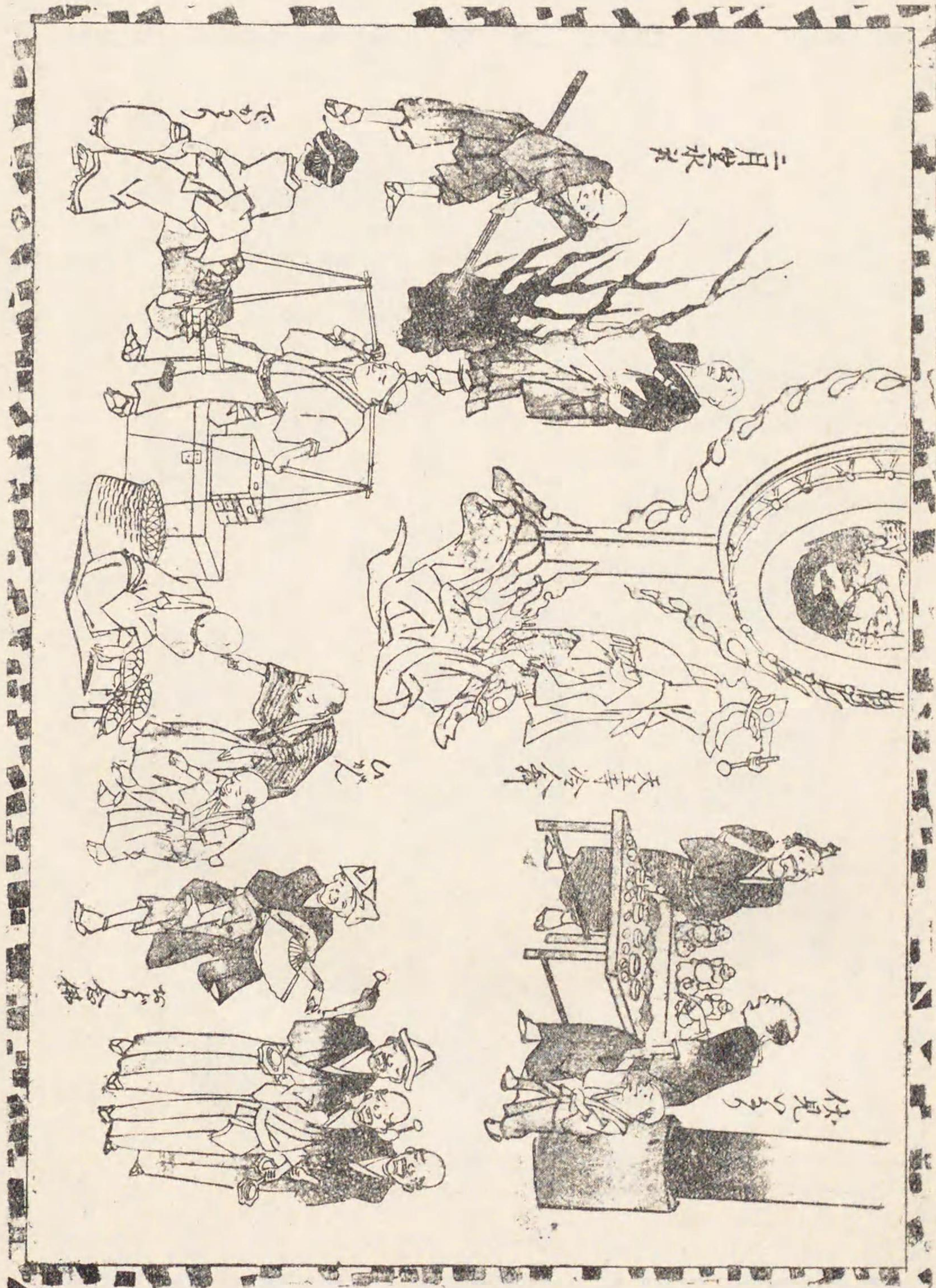
廓女郎 同朝三都とも廓の例とて遊婦童女我まに市中を遊行さす事なり夜明れば化粧して客來をまつ

鏡開き 公には鏡餅とて具足弓矢鏡等に供へ煮て食する事十一日を例とす此日弓の弦を以て鏡を開くといふ吉例也と町家には四日鏡開なり

萬歳 昔正月十四五日に京中の遊士月に戯れあなたこなたへ巡る舞しよりこと起る末代に千秋萬歳といふて逸興を催す此餘風を今萬歳といふて大和又ハ三河より來るなり世事談に人皇六十六代一條の院の御宇大江定基三河守たりし時其國の民春毎に來り千秋樂萬歳樂と舞奏ける是を始とし



浪花十二月畫譜 上



て今に萬歳といふなり聖代を壽く吉例なり **春駒** 延文の頃とかや幼兒に馬の頭の本細工を持しめ正月二日早天

より攝家清華の貴館へ來り春駒となへ太鼓三絃を以て謳舞しをはじめ寛政文化より花麗に衣裳を飾り初春の壽をのべ賑やかに舞謳ふ事に成たり **鳥追** 相傳ふ寛文延寶の頃三河國に長者あり數千町の田園を持ち民家ながら

貴人高位にまじり家富て福有なりし一とせ正月村の土民歳首の禮をなす中にさゝらを摺て謳ふもの數人有長者の其故をとふに長者の田園の鳥を追ふ斗の勤めにて妻子を養ふ者ども長者の徳を謳ひ年始に壽はべるなりといふ

其唄の發端にセデヨヤマンゾノ鳥追といふ千町も萬町も殿の田園の鳥を追ふて也御長者の内へおとするハ誰ある右大臣左大臣關白殿か鳥追ひ御内證へ音信るゝ人ハ高位高官扱ハ鳥追ふ我々がといふなり西たもよせんて

十日夷 正月十日攝州西宮驛なる蛭子宮

よ東たもよせんてよハ東西に八千町の田を持つ事を祝したりといふ **十日夷** 正月十日攝州西宮驛なる蛭子宮にハ八日亥こもりの神事といふことありて九日十日驛中のにきわひ年中の繁華なり大坂の南今宮村天滿堀川の同社參りに人のくんじゆする事大濤のよするか如く三都の繁華を是によせたるがごとく就中戯れ男の酒の酔ひ遊ひ女絃婦の駕籠にての參り下向の花やかさ一きわ目立浪速のにぎわひ目ざましく價千金一日の榮華なるべし **とん**

ど 正月十五日早旦に注連繩飾を焼くことを爆竹といひ邪氣妖陰を避るといふ是を左儀長とてはやすハ色々説あれ共是に畧すそもく注連繩繩ハ天照皇太神の天の岩戸を出給ひし時手力雄命の岩戸を押開き再び閃り給ハざるやうとて繩を以て入口を隔てしを尻くめ繩といふ是注連飾りの始めなりゆへにこれを爆して邪氣妖陰を避るとい

ふまた今朝小豆粥を煮て饅をまじへてこれを食するをバ古きこと、見へて清少納言が枕艸紙に見へたり腹中を温補ならしめ冬の邪寒を除かしむるの一助といふ

せきぞろ

大黒舞 節季候とて冬十二月の末に人の門に立て米錢を乞ふ乞巧人なり節季にて候得バ何とそ合力御助けを以て芽出度年を迎へさせ給はれといふて米錢を乞ふ非田村より出る又ハ元朝夜いまだ明さる頃より乞巧人ども大黒神夷三郎の圖像を紙に摺たるを持來り賣しが後に大黒舞と稱し來つて米錢を乞ふ同人なり

口祝 小四方に白米を盛り其真中に松竹梅を立て海老鬘斗昆布および榎乾栗柿などを並べ蓬萊山といふて禮者來る毎に結びこんぶを挟み與へて口祝といふハ天下をしなへて人のなす處なり然れども邊鄙中國西州などには正月に限るべからず四季ともに遠國他邦より珍客の來る時ハ武家方ハ小四方に長鮑鬘斗市中在方にをいてハ盆に白紙を敷き白米を盛て客の前へ出し御口を祝ひまするといふ客御念の入れられしと手を懸て戴く眞似をして亭主へかへす是古例のよし然して茶煙艸盆の饗しにをよぶ京攝にハ見聞さる事なり又酒宴の砌盃臺に附木をそへて出すこれいわふてといふ意なりといふ

二月

二日灸 二八月二日定めて灸するを二日灸といふて俳諧の季よせにも載て人のある處なり春ハ冬の邪寒の患なきやう秋ハ暑中の暑毒のわざハひを除んがためなるべし 散梅をいざふたにせん二日灸 春の屋 といふ發句の如し又つれづれ艸に四十已後人身に灸を加へて三里をやかされば上灸の事有必らず灸すべしと灸經に云三十歳已上迄三里に灸せずんば有べからず三里ハ氣を下す所以なり或ハ膝がしら三十に有貞徳云三里の灸も年によりてよからぬ事あり八歳十七歳廿六歳





四十四歳 八十歳 これを禁ず 紙鳶 幼児ハ内に陽熱盛なる故春陽の時節其氣いよく大過すれば紙鳶を作り高く

揚させて童兒に口を開かせ仰向しめ内熱を上に咄しめて病を生ぜざらしめる處なり此紙鳶といふハ漢の韓信が作る處なり紙鳶を作りこれを放して未央宮の遠近を量るとあり春の風は下より昇り夏の風ハ空中に横行す紙鳶に即てこれを見るに春能起り夏ハ起る事あたはずと言て遠州又ハ中國近くハ攝州伊丹など夏日専らこれを翫ぶ

初午 人皇四十三代元明天皇の和銅四年二月初午の日稻荷大明神天降り給ふといふ事年代記諸社の縁記にも見

へたり桓武天皇の御宇弘法大師城州三ヶみねの麓にて稻を荷へる翁に出會の砌深慮を聞て大師の稻荷大明神と崇め祀り給ふ此神號に稻荷飯成とて三號あり春夏の徳を稻生と尊び秋冬を稻荷と崇め米と成て人命を助け養ひ給ふを保食の神飯成大明神と祭り尊ふまた三ヶ峯の土砂を持ちかへり田畑に入れバ作物よく熟するといふを以て參詣の人々土砂を持ち歸り米の鈴成のやうにといふ意にて鈴の形を調べ小さき器を田實といふて伏見街道稻荷前の名物の土人形を賣の始とす田の實とするゆへに田實と稱し始め布袋ハ東福寺開山聖一國師の漢土より持歸りたる布袋の像を模し賣しを始めとして今の如く繁昌にをよぶ 涅槃 二月十五日當日釋迦如來涅槃に入給ふ日なり佛入滅の時沙羅林の色白く變じたるハ鶴の毛に似たりとて鶴林といふ哥に 薪つき雪降しける鳥邊野ハ鶴の林の心地こそ

すれ俗家まぜり豆餅あられを炒て鼻屎といふハ誤りなり花供そなへ成といふ 彼岸 二八月に俗家彼岸に入たりとて佛事を行ふことに説あれとも是に昇す彼岸と言ハ二八月晝夜當分にて夜五十刻晝五十刻の時なるがゆへにい

ふ大坂ハ安井一心寺天王寺邊に集り入日を拜む日想觀といふ勝曼の上に家隆卿の住し入日の岡といふ所あり日想觀によき處なり法師の誦にくハし 何を見て西に入日の彼岸かな

二の替追出し

三都ともに正二月の戲場狂言

を二の替りといふ狂言の果口に勘定場において表方の者ども福女うそ吹の面をかづき紙幣を持って太鼓鉦の拍子に合せて面白くをどり見物の歸りを見送評判を頼むとはやし立る事誠に花やかにして賑ハしきは則猿田彦命御女命の眞似ひたりといふ

天王寺太子會

二月廿二日天王寺金堂におゐて聖德太子聖靈會を行ハる俗人法事中より舞

樂を奏する事夜四ツにをよぶ凡百廿餘番といふ

二月堂水取

二月十五日南都二月堂におゐて若狭の水を呼取事

人の知る處長廊下の天井にとうしんを釣置て其下を大松明を燃し通るにとうしんに火うつらざるを靈驗法徳なり

〇三月

雛遊

敏達天皇二年に雛遊びといふ事始る雛といふハ鳥の子をすべて雛といふ小小さく愛らしき

ゆへに名とす小女これをもて遊ぶハ女ハ世帯を持つことを主とするの教へなり近世内裏雛とて公卿の夫婦の形に作れども昔ハ紙雛なりし世に夫婦妹脊の雛形祭りといへども大きなるハ神功皇后にして小きハ御子應神天皇八まん

宮の御すがた母子の雛がた祭りといふいづれか是なるや泉州堺の津ハ九月九日備前牛まどハ八月朔日祭る事三月

三日のことし

白酒

三月三日家毎に白酒を以て雛祭りの饗なしとする事江戸大坂其ほか然り京ハみりん酒を用

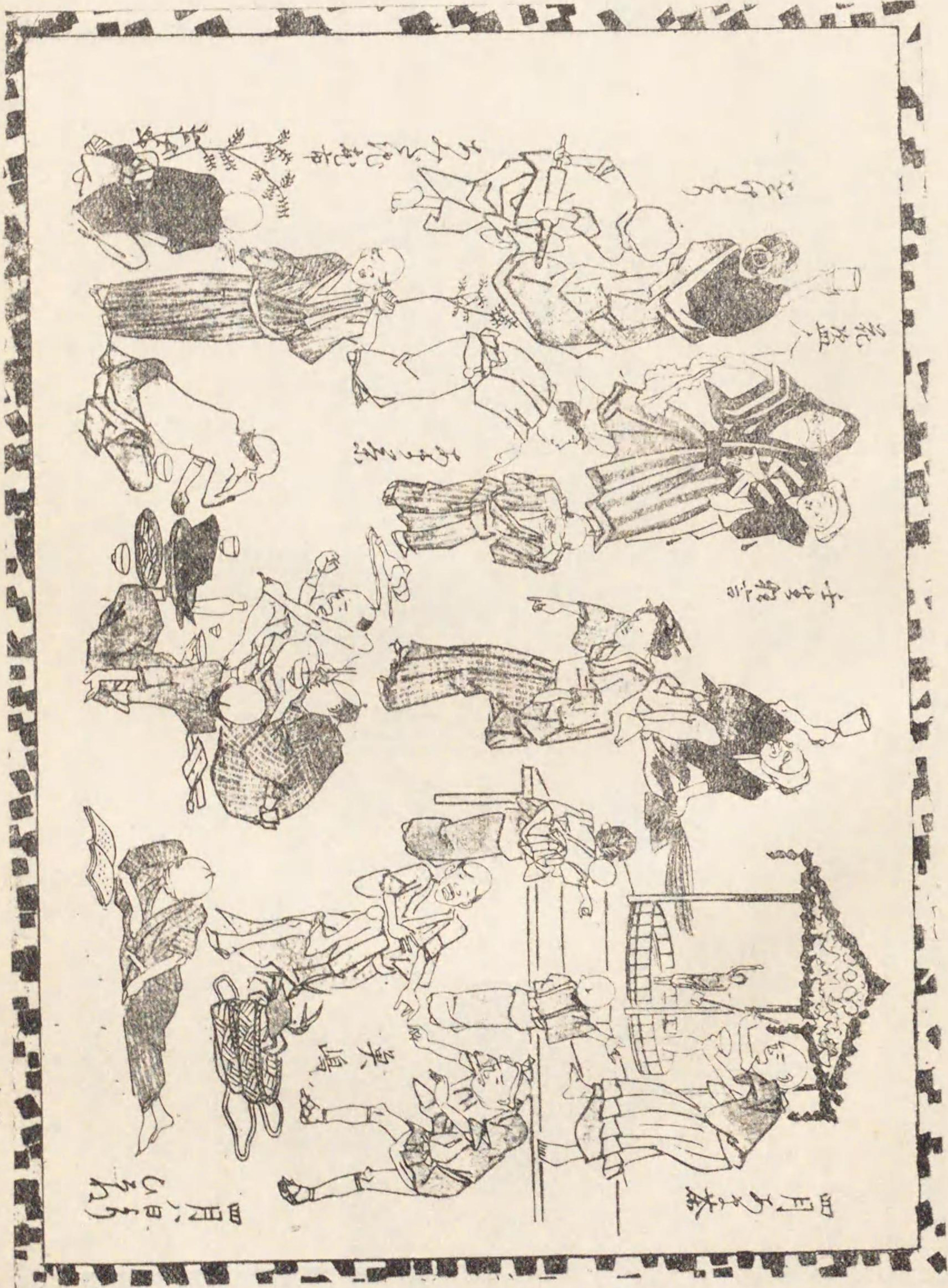
ゆ 汐干

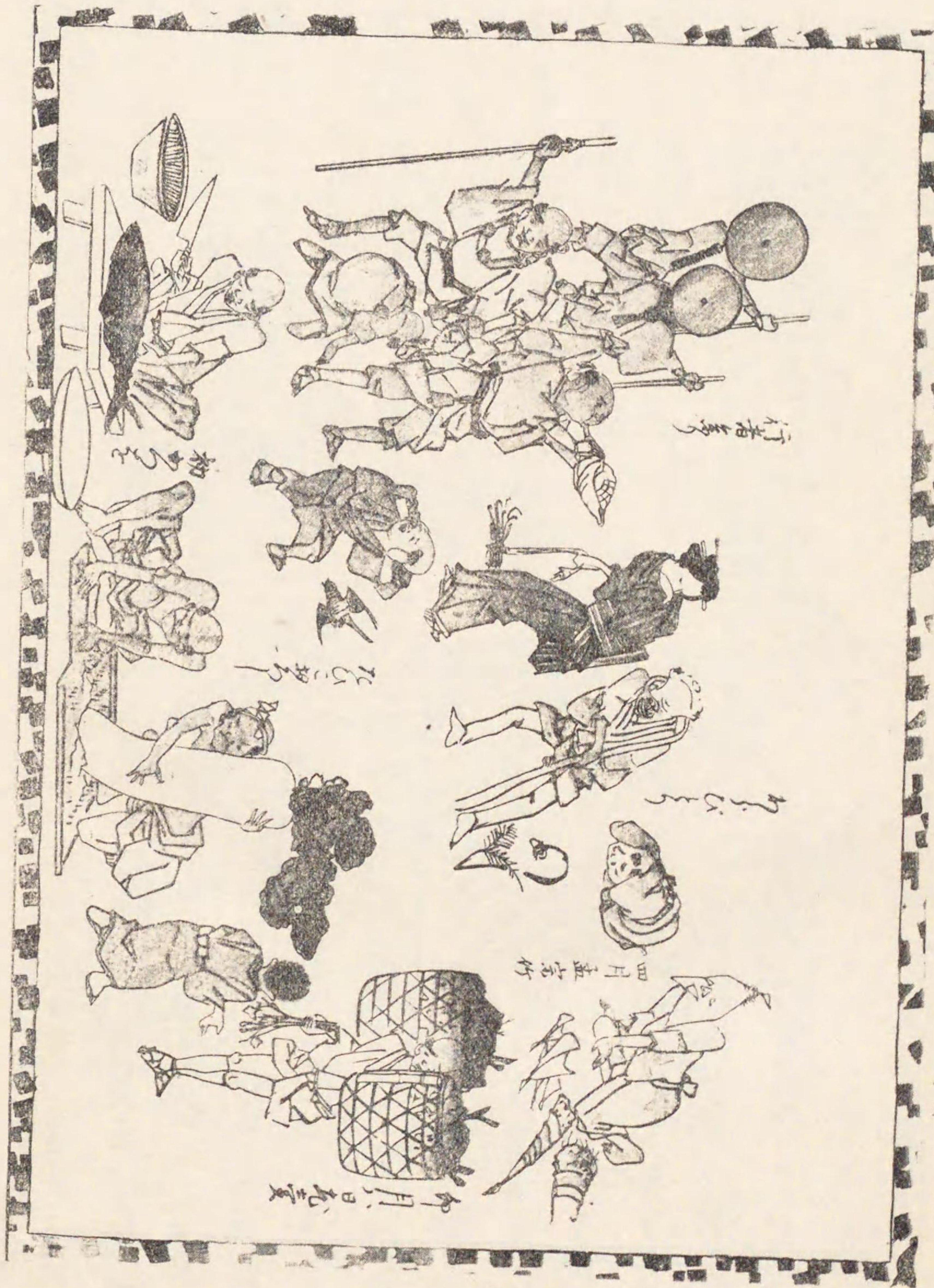
三月三日住よし浦の大汐干にて大坂及び近國近在の貴賤是に遊んで 蛤を取て樂しみとする或ハ天保

山をなじ江戸ハ品川沖深川辨天まへにて遊ぶなり

出替

奉公人出かわり古來ハ二月二日なりし近年ハ三月五日





九月十一日とす

踊念佛

踊念佛といへば京都空也堂に限るべし大坂市中の男女老若諸寺院の勸化寄進に念佛詠

哥をとなへ志を施したる家のまへにて鉦を合せて踊るこれをおどりば、といふ此おどりに妙手の者を諸講中へやとふて連あるくなり

櫻鯛

三月下旬より四月上旬を魚島時といふて鯛の美味格別なるゆへ家毎にこれを賞美す或人の句に 花うりがほめてゆくなり櫻鯛

鶏合

三月三日禁庭におゐて鶏合の節會とて紫宸殿の御庭に於て

鶏合せ賀賀雜人拜見をゆるさる、

華見

花の比へ大坂市中寺社所々京へ御室嵐山東山所々櫻の花さかり又大坂

の東小ばせ上の宮うぶゆの近邊桃の花さかりにハ男女貴賤竹筒をたづさへ或ハ詩哥連誹に樂しむ有又ハおどり狂ふて樂しむこと思ひく、實に聖代の恩徳有がたかりし事どもなり

參宮

正月下旬より春ハおいく、三都の貴賤

及び遠國邊鄙の男女神恩をほふじたてまつらんがため伊勢參宮或ハ三社めぐりなど實に聖代の恩徳なり

木芽田

樂 田樂法師の曲の形に似たるゆへ名とせり田樂法師ハ七尺ばかりの細き棒に下より三四寸上に小さき貫を通し

此小貫を足かゝりして兩足をのせ兩手にて棒の上をにぎり棒の先にて飛ぶ曲なり此姿ひとへに棒に身を貫ぬき

たるが如し豆腐を串にさしたる形のごとく似たるがゆへにでんがくと名く此田樂法師ハ南都春日祭り五月廿八日

攝州住吉御田祭りに此曲有

壬生狂言

京壬生寺におゐて三月十四日より廿四日迄洛北ゑんま堂北さが釋迦堂な

どにて大念佛としていろく、の狂言俳優をなす壬生ハ無言にして勝れたりといふ私に日刑罰に行われし者并に

無縁法界の爲の回向大念佛なりといふ〇四月

灌佛會

四月八日ハ釋迦如來の誕生日として寺々において灌佛を